

特 216

733

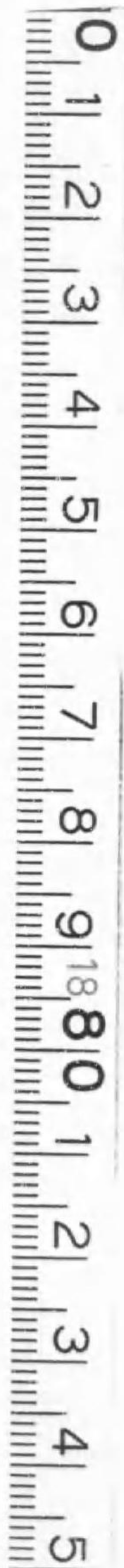
版書科教・庫文波岩

1

古 事 記

訂校友成田幸

店書波岩



始



397

時216
733



訂校友成田幸



店書波岩



古事記序

臣安萬侶言す。夫混元既に凝り、氣象未だ效れず、名も無く爲も無し、誰か其の形を知らむ。然して乾坤初めて分れて、參神造化の首を作し、陰陽斯に開けて、二靈群品の祖たり。所以に幽顯に出入して、日月目を洗ふに彰れ、海水に浮沈して、神祇身を濼くに呈る。故太素の杳冥なる、本教に因りて土を孕み嶋を産みたまひし時を識り、元始の綿邈たる、先聖に頼りて神を生み人を立てたまひし世を察にす。寔に知る鏡を懸け珠を吐きて、百玉相續ぎ、劍を喫ひ蛇を切りて、以て萬神蕃息することを。安河に議りて天下を平け、小瀆に論ひて國土を清めき。是を以て番仁岐命、初めて高千嶺に降りたまひ、神倭天皇、秋津嶋に經歷したまふ。化熊山を出でて、天劍高倉に獲、生尾徑を遮り、大鳥吉野に導く。儼を列ねて賊を攘ひ、歌を聞きて仇を伏す。即ち夢に覺りて神祇を敬ひたまふ、所以に賢后と稱す。烟を望みて黎元を撫でたまふ、今に聖帝と傳ふ。境を定め邦を開きて、近淡海に制したまひ、姓を正し氏を撰して、遠飛鳥に勅したまふ。步驟各異に、文質同じからずと雖、古を稽へて以て風猷を既に頽れたるに繼し、今を照して以て典教

を絶えむとするに補はずといふこと莫し。飛鳥清原大宮に、大八洲御しし天皇の御世に暨びて、潜龍元を體し、洊雷期に應ず。夢の歌を聞きて業を纂がむことを想ひ、夜の水に投りて基を承けむことを知しめす。然れども天の時未だ臻らず、南山に蟬のごと蛻けたまひ、人事共に治くして、東國に虎のごと歩みたまひき。皇輿忽ち駕して、山川を凌渡り、六師雷のごと震ひ、三軍電のごと逝く。杖矛威を擧げて、猛士烟のごと起り、絳旗兵を耀かして、凶徒瓦のごと解けつ。未だ浹辰を移さずして、氣沴自から清まりぬ。乃ち牛を放ち馬を息へて、懣悌して華夏に歸り、旌を卷き戈を戢め、舞詠して都邑に停りたまふ。歳大梁に次り、月夾鍾に躍りて、清原大宮にして、昇りて天位に即きたまふ。道軒后に軼ぎ、德周王に跨えたまふ。乾符を握りて六合を摠べ、天統を得て八荒を包ねたまふ。二氣の正しきに乗じ、五行の序を齊へたまふ。神理を設ねて以て俗を獎め、英風を敷きて以て國を弘めたまふ。重加智海浩瀚として、潭く上古を探り、心鏡焯焯として、明に先代を親たまふ。是に天皇詔したまはく、朕聞く諸家の實る所の、帝紀及び本辭、既に正實に違ひ、多く虚偽を加ふと。今の時に當りて、其の失を改めずは、未だ幾の年を経ずして、其の旨滅びむとす。斯乃ち邦家の經緯、王化の鴻基なり。故惟帝紀を撰録し、舊辭を討覈して、偽を削り實を定め、後葉に流へむとすとのたまふ。時に舍人有り。姓は神田名は阿禮、年是廿八。人と爲り聰明にして、目に度れば口に誦み、耳に拂るれば心に勒す。即ち阿禮に勅語

古

事

記

して、帝皇の日繼、及び先代の舊辭を誦み習はしむ。然れども遷移り世異りて、未だ其の事を行はざりき。伏して惟ふに皇帝陛下、一を得て光宅し、三に通じて亭育したまふ。紫宸に御して德馬蹄の極むる所に被り、支扈に坐して化船頭の逮ぶ所を照したまふ。日浮びて暉を重ね、雲散りて烟に非ず。柯を連ね穗を并すの瑞、史書すことを絶たず、烽を列ね譯を重ねるの貢、府空しき月無し。名文命よりも高く、徳天乙にも冠れりと謂ひつ可し。焉に舊辭の誤り忤へるを惜み、先紀の謬り錯れるを正さむとして、和銅四年九月十八日を以て、臣安萬侶に詔して、神田阿禮が誦む所の勅語の舊辭を撰録して、以て獻上せしむてへり。

謹みて詔旨に隨ひ、子細に採り撫ふ。然るに上古の時、言意並に朴にして、文を敷き句を構ふること、字に於て即ち難し。已に訓に因りて述べたるは、詞心に逮はず。全く音を以て連ねたるは、事の趣更に長し。是を以て今或は一句の中、音訓を交へ用ひ、或は一事の内、全く訓を以て録す。即ち辭の理見え匡きは、注を以て明す。意況解り易きは更に注せず。亦姓の目下に玖沙詞と謂ひ、名の帶の字に多羅斯と謂ふ。此の如きの類、本に隨つて改めず。大抵記す所は、天地の開闢より始めて、以て小治田御世に訖ふ。故天御中主神より以下、日子波限建鷦草葺不合尊より以前を、上卷とし、神倭伊波禮毘古天皇より以下、品陀御世より以前を、中卷とし、大雀皇帝より以下、小治田大宮より以前を、下卷とし、并せて三卷を録し、謹みて以て獻上す。臣安萬侶、

誠惶誠恐頓首頓首。

和銅五年正月二十八日

正五位上勳五等太朝臣安萬侶 謹上

古事記上卷

天地の初發の時、高天原に成りませる神の名は、天之御中主神、次に高御産巢日神、次に神産巢日神。此の三柱の神は、並獨神成り坐して、身を隠したまひき。
次に國稚く浮脂の如くして、くらげなすただよへる時に、葦牙の如萌え騰る物に囚りて、成りませる神の名は、宇麻志阿斯訶備比古遲神、次に天之常立神。此の二柱の神も獨神成り坐して、身を隠したまひき。

上の件五柱の神は、別天神。

次に成りませる神の名は、國之常立神、次に豐雲野神。此の二柱の神も獨神成り坐して、身を隠したまひき。

次に成りませる神の名は、宇比地瀨神、次に妹須比智瀨神、次に角杵神、次に妹活杵神、二柱次に意富斗能地神、次に妹大斗乃辨神、次に湊母陀琉神、次に妹阿夜訶志古泥神、次に伊邪那岐神、次に妹伊邪那美神。

上の件國之常立神より以下、伊邪那美神以前、并せて神世七代と稱す。上の二柱は、獨り神各一代と云す。次に變びます十神は、各二神を合せて一代と云す。

是に天神諸の命以ちて、伊邪那岐命伊邪那美命二柱の神に、是のただよへる國を修理り固め成せと詔りごちて、天沼矛を賜ひて、言依さし賜ひき。故二柱の神天浮橋に立たして、其の沼矛を指し下して畫きたまへば、鹽をろこをろに畫き鳴して、引き上げたまふ時に、其の矛の末より垂落る鹽、累積りて嶋と成る、是能登呂嶋なり。

其の嶋に天降り坐して、天之御柱を見立て、八尋殿を見立てたまひき。是に其の妹伊邪那美命に、汝が身は如何に成れると問曰ひたまへば、吾が身は成り成りて成り合はざる處一處在りと言曰したまひき。伊邪那岐命詔りたまひつらく、我が身は、成り成りて成り餘れる處一處在り。故此の吾が身の成り餘れる處を、汝が身の成り合はざる處に刺し塞ぎて、國土生み成さむと爲ふは奈何とのりたまへば、伊邪那美命然か善けむと答曰したまひき。爾に伊邪那岐命、然らば吾と汝とは右より廻り逢へ、我は左より廻り逢はむと詔りたまひき。約り竟へて廻ります時に、伊邪那美命先づあなによしえをとこを言りたまひ、後に伊邪那岐命あなによしえをとめを言りたまひき。各言りたまひ竟へて後に、其の妹に、女人を言先だちて良はずと告曰りたまひき。然れどもく

みどに興して、子水蛭子を生みたまひき。此の子は葦船に入れて流し去てつ。次に淡嶋を生みたまひき。是も子の例には入らず。

是に二柱の神議云りたまひつらく、今吾が生めりし子良はず。猶天神の御所に白す宜しとのりたまひて、即ち共に參る上りて、天神の命を請ひたまひき。爾に天神の命以ちて、ふとまににト相へて詔りたまひつらく、女を言先だちしに歸りて良はず。亦還り降りて改め言へとのりたまひき。

故爾ち反り降りまして、更に其の天之御柱を先の如往き廻りたまひき。是に伊邪那岐命、先づあなによしえをとめを言りたまひ、後に妹伊邪那美命、あなによしえをとめを言りたまひき。如此言りたまひ竟へて、御台ひまして、子淡道之穗之狭別嶋を生みたまひき。次に伊豫之二名嶋を生みたまひき。此の嶋は身一つにして面四つ有り。面毎に名有り。故伊豫國を愛比賣と謂ひ、讚岐國を飯依比古と謂ひ、粟國を大宜都比賣と謂ひ、土左國を建依別と謂ふ。次に隱伎之三子嶋を生みたまふ。亦の名は天之忍許呂別。次に筑紫國を生みたまふ。此の嶋も身一つにして面四つ有り。面毎に名有り。故筑紫國を白日別と謂ひ、豐國を豐日別と謂ひ、肥國を建日向日豐久土比泥別と謂ひ、熊曾國を建日別と謂ふ。次に伊伎嶋を生みたまふ。亦の名は天比登都柱と謂ふ。次に津嶋を生みたまふ。亦の名は天之狭手依比賣と謂ふ。次に佐度嶋を生みたまふ。次に大倭豐秋

津嶋を生みたまふ。亦の名は天御虛空豐秋津根根と謂ふ。故此の八嶋を先づ生みませるくなるに因りて、大八嶋國と謂ふ。

然後還り坐しし時に、吉備兒嶋を生みたまふ。亦の名は建日方別と謂ふ。次に小豆嶋を生みたまふ。亦の名は大野手比賣と謂ふ。次に大嶋を生みたまふ。亦の名は大多麻流別と謂ふ。次に女嶋を生みたまふ。亦の名は天一根と謂ふ。次に知訶嶋を生みたまふ。亦の名は天之忍男と謂ふ。次に兩兒嶋を生みたまふ。亦の名は天兩屋と謂ふ。吉備兒嶋より天兩屋嶋まで并せて六嶋。

既に國を生み竟へて、更に神を生みます。故生みませる神の名は大事忍男神、次に石土昆古神を生みまし、次に石巢比賣神を生みまし、次に大戸日別神を生みまし、次に天之吹男神を生みまし、次に大屋昆古神を生みまし、次に風木津別之忍男神を生みまし、次に海神名は大綿津見神を生みまし、次に水戸神名は速秋津日子神、次に妹速秋津比賣神を生みましき。大事忍男神より秋津比賣神まで并せて十神。

此の速秋津日子速秋津比賣一一神、河海に因りて持ち別けて生みませる神の名は沫那藝神、次に沫那美神、次に類那藝神、次に類那美神、次に天之水分神、次に國之水分神、次に天之久比奢母智神、次に國之久比奢母智神、沫那藝神より國之久比奢母智神まで并せて八神。次に風神名は志那都比古神を生みます。次に木神名は久久能智神を生みます。次に山神名は大

山津見神を生みます。次に野神名は鹿屋野比賣神を生みます。亦の名は野椎神と謂す。志那都比古神より野准まで并せて四神。

此の大山津見神野椎神二神、山野に因りて持ち別けて生みませる神の名は天之狹土神、次に國之狹土神、次に天之狹霧神、次に國之狹霧神、次に天之關戸神、次に國之關戸神、次に大戸惑子神、次に大戸惑女神。天之狹土神より大戸惑女神まで并せて八神。

次に生みませる神の名は鳥之石楠船神、亦の名は天鳥船と謂す。次に大宜都比賣神を生みまし、次に火之夜藝速男神を生みます。亦の名は火之炫毘古神と謂し、亦の名は火之迦具土神と謂す。此の子を生みますに因り、みほと炙かえて病み臥せり。たぐりに生りませる神の名は金山毘古神、次に金山毘賣神。次に尿に成りませる神の名は波邇夜須毘古神、次に波邇夜須毘賣神。次に尿に成りませる神の名は彌都波能賣神、次に和久產巢日神。此の神の子を豐宇氣毘賣神と謂す。故伊邪那美神は、火神を生みませるに因りて、遂に神遊り坐しぬ。天鳥船より豐宇氣毘賣神まで并せて八神。

凡て伊邪那岐伊邪那美一一神、共に生みませる、嶋壹拾肆嶋、神參拾伍神。是は伊邪那美神未だ神遊りまさざりし以前に生みませる。唯意能基呂嶋のみは、生みませるならず。亦姪子と欲嶋とも、子の例に入らず。

故爾に伊邪那岐命の詔りたまはく、愛しき我が那邇妹命や。子の一本に易へつる乎と謂りたまひて、御枕方に匍匐ひ、御足方に匍匐ひて、哭きたまふ時に、御涙に成りませる神は、香山の敵尾の木の本に坐す、名は泣澤女神。故其の神避りましし伊邪那美神は、出雲國と伯伎國との堺比婆之山に葬しまつりき。

是に伊邪那岐命、御佩かせる十拳劔を抜きて、其の子迦具土神の頸を斬りたまふ。爾に其の御刀の前に著ける血、湯津石村に走り就きて、成りませる神の名は、石拆神、次に根拆神、次に石筒之男神。三神、次に御刀の本に著ける血も、湯津石村に走り就きて、成りませる神の名は、速速日神、次に樋速日神、次に建御雷之男神、亦の名は建布都神、亦の名は豊布都神。三神、次に御刀の手上に集る血、手俣より漏き出て、成りませる神の名は、隱添加美神、次に開御津羽神。

上の件石拆神より以下、開御津羽神以前、并せて八神は、御刀に因りて成りませる神也。殺さえましし迦具土神の頭に成りませる神の名は、正鹿山津見神。次に腕に成りませる神の名は、淤藤山津見神。次に腹に成りませる神の名は、奥山津見神。次に陰に成りませる神の名は、關山津見神。次に左の手に成りませる神の名は、志藝山津見神。次に右の手に成りませる神の名は、羽山津見神。次に左の足に成りませる神の名は、原山津見神。次に右の足に成りませる神の名は、戸山津見神。正鹿山津見神より、戸山津見神まで、并せて八神、故斬りたまへる刀の名は、天之尾

羽張と謂ふ。亦の名は伊都之尾羽張と謂ふ。

是に其の妹伊邪那美命を相見まく欲ほして、黄泉國に追ひ往てましき。爾ち殿騰戸より出で向へます時に、伊邪那岐命語らひたまはく、愛しき我が那邇妹命、吾汝と作れりし國、未だ作り竟へずあれば、還りまさねと詔りたまひき。爾に伊邪那美命の答白したまはく、悔しき哉速く來まさずて。吾は黄泉戸喫爲つ。然れども愛しき我が那勢命、入り來坐せる事恐れれば、還りなむを。且に具に黄泉神と相論はむ。我をな視たまひそ。如此白して、其の殿内に還り入りませる間、甚と久しくて待ち難ねたまひき。故左の御みづらに刺させる湯津津間櫛の男柱一箇取り闕きて、一火燭して、入り見ます時に、うじたかれとろろぎて、頭には大雷居り、胸には火雷居り、腹には黒雷居り、陰には拆雷居り、左の手には若雷居り、右の手には土雷居り、左の足には鳴雷居り、右の足には伏雷居り、并せて八雷神成り居りき。

是に伊邪那岐命見畏みて、逃げ還ります時に、其の妹伊邪那美命吾に辱見せたまひつと言したまひて、即ちよもつしこめを遣して、追はしめき。爾伊邪那岐命黒御璽を取りて投げ棄てたまひしかば、乃ち蒲子生りき。是を撫ひ食む間に、逃げ行てますを、猶追ひしかば、亦其の右の御みづらに刺させる湯津津間櫛を引き闕きて、投げ棄てたまへば、乃ち笋生りき。是を抜き食む間に、逃げ行てましき。且後には、其の八雷神に、千五百の黄泉軍を副へて、追はしめき。

爾御佩かせる十拳劍を抜きて、後手にふきつつ逃げ來ませるを、猶追ひて、黄泉比良坂の坂本に到る時に、其の坂本なる桃子を三箇取りて、待ち撃ちたまひしかば、悉に逃げ返りき。爾に伊邪那岐命桃子に告りたまはく、汝吾を助けしが如、葦原中國に所有うつしき青人草の、苦瀨に落ちて、患惚まむ時に、助けてよと告りたまひて、意富加牟豆美命と號ふ名を賜ひき。

最後に其の妹伊邪那美命、身自ら追ひ來まじき。爾ち千引石を、其の黄泉比良坂に引き塞へて、其の石を中に置いて、各對き立たして、事戸を度す時に、伊邪那美命の言したまはく、愛しき我が那勢命、如此爲たまはば、汝の國の人草、一日に千頭絞り殺さむとまをたまひき。爾に伊邪那岐命の詔りたまはく、愛しき我が那迦妹命、汝然か爲たまはば、吾はや一日に千五百産屋立ててむとのりたまひき。是を以て一日に必ず千人死に、一日に必ず千五百人なも生る。故其の伊邪那美命を、黄泉津大神と謂す。亦其の追ひしきに以りて、道敷大神と號すとも云へり。亦其の黄泉坂に塞れりし石は、道反大神とも號し、塞坐黄泉戸大神とも謂す。故其の所謂黄泉比良坂は、今出雲國の伊賦夜坂とも謂ふ。

是を以て伊邪那岐大神の詔りたまはく、吾はいなしこめしこめき穢き國に到りて在りけり。故吾は御身の輓爲などのりたまひて、竺紫の日向の橋小門の阿波岐原に到て坐して、禊祓ひたまひき。故投げ棄つる御杖に成りませる神の名は、衝立船戸神。次に投げ棄つる御帶に成りませる神の名は、道之長乳齒神。次に投げ棄つる御裳に成りませる神の名は、時置師神。次に投げ棄つる御衣に成りませる神の名は、和豆良比能宇斯能神。次に投げ棄つる御禪に成りませる神の名は、道侯神。次に投げ棄つる御冠に成りませる神の名は、飽咋之宇斯能神。次に投げ棄つる左の御手の手纏に成りませる神の名は、奥疎神。次に奥津那藝佐昆古神、次に奥津甲斐辨羅神。次に投げ棄つる右の御手の手纏に成りませる神の名は、邊疎神。次に邊津那藝佐昆古神、次に邊津甲斐辨羅神。

右の件船戸神より以下、邊津甲斐辨羅神以前、十二神は、身に著ける物を脱ぎうてたまひしに因りて、生りませる神也。

是に上瀬は瀨速し、下瀬は瀨弱しと詔りごちたまひて、初めて中瀬に墮りかづきて、滌ぎたまふ時に、成り坐せる神の名は八十福津日神、次に大福津日神。此の二神は、其の穢き繁國に到りましし時の汚垢に因りて、成りませる神也。次に其の禍を直さむとして、成りませる神の名は神直毘神、次に大直毘神、次に伊豆能賣神。并三神也。次に水底に滌ぎたまふ時に、成りませる神の名は、底津綿津見神、次に底筒之男命。中に滌ぎたまふ時に、成りませる神の名は、中津綿津見神。次に中筒之男命。水の上に滌ぎたまふ時に、成りませる神の名は、上津綿津見神、次に上筒之男命。此の三柱の綿津見神は、阿曇連等が祖神と以ちいつく神也。故阿曇連等は、其の綿津見神の

子、宇都志日金拆命の子孫也。其の底筒之男命、中筒之男命、上筒之男命、三柱の神は、墨江の三前の大神也。

是に左の御目を洗ひたまひし時に、成りませる神の名は、天照大御神。次に右の御目を洗ひたまひし時に、成りませる神の名は、月讀命。次に御鼻を洗ひたまひし時に、成りませる神の名は、建速須佐之男命。

右の件八十福津日神以下、建速須佐之男命以前、十四柱の神は、御身を滌ぎたまふに因りて生れませる者也。

此の時伊邪那岐命大歡喜ばして詔りたまはく、吾は子生み生みて、生みの終に、三貴子得たりとのりたまひて、即ち其の御頸珠の玉緒もゆらに、取りゆらかして、天照大御神に賜ひて詔りたまはく、汝が命は、高天原を知せと、事依さして賜ひき。故其の御頸珠の名を御倉板舉之神と謂す。次に月讀命に詔りたまはく、汝が命は、夜之食國を知せと、事依さしたまひき。次に建速須佐之男命に詔りたまはく、汝が命は、海原を知せと、事依さしたまひき。

故、各依さし賜へる命の隨、知し看す中に、建速須佐之男命、命さしたまへる國を知さずて、八拳須心前に至るまで、啼きいさちき。其の泣きたまふ狀は、青山を枯山如す泣き枯らし、河海は悉に泣き乾しき。是を以て惡神の音、狹蠅如す皆沸き、萬物の妖、悉に發りき。故伊邪那

岐大御神、建速須佐之男命に詔りたまはく、何由とも汝は、事依させる國を治さずて、哭きいさちるとのりたまへば、答白したまはく、僕は此の國根之堅洲國に罷らむと欲ふが故に哭くとまを

したまひき。爾に伊邪那岐大御神大忿怒らして、然らば汝此の國にはな住みそと詔りたまひて、乃ち神やらひにやらひ賜ひき。故其の伊邪那岐大神は、淡海の多賀になも坐します。

故是に建速須佐之男命の言したまはく、然らば天照大御神に請して罷りなむとまをしたまひて、乃ち天に參り上ります時に、山川悉に動み、國土皆震りき。爾に天照大御神驚かして、我が那勢命の上り來ます由は、必ず善心ならじ。我が國を奪はむと欲ほすにこそと詔りたまひ

て、即ち御髪を解き、御みづらに纏かして、左右の御みづらにも、御髪にも、左右の御手にも、各八尺勾瓊の五百津のみすまるの珠を纏き持たして、そびらには千入の鞆を負ひ、五百入の鞆を

付け、亦いつの竹柄を取り佩ばして、弓腹振り立てて、堅庭は、向股に踏みなづみ、沫雪如す駈る散らかして、いつの男建踏み建びて、待ち問ひたまはく、何故上り來ませるととひたまひき。爾に建速須佐之男命の答白したまはく、僕は邪心無し。唯大御神の命以ちて、僕が哭きいさちる

事を問ひ賜ひし故に、白しつらく、僕は此の國に往らむと欲ひて哭くとまをししかば、大御神、汝は此の國にはな在みそと詔りたまひて、神やらひやらひ賜ふ故に、罷往りなむとする狀を請さむと爲ひてこそ、參り上りつれ。異心無しとまをしたまへば、天照大御神、然らば汝の心の

清明きことは、何にして知らましと詔りたまひき。是に速須佐之男命、各うけひて、子生まなと告白したまふ。

故爾に各天安河を中に置きて、うけふ時に、天照大御神、先づ建速須佐之男命の佩かせる十拳劍を乞ひ度して、三段に打ち折りて、ぬなともゆらに、天之眞名井に振り濺ぎて、さがみにかみて、吹き棄つる氣吹の狹霧に成りませる神の御名は、多紀理毘賣命、亦の御名は奥津嶋比賣命と謂す。次に市寸嶋比賣命、亦の御名は狹依毘賣命と謂す。次に多岐都比賣命。三柱速須佐之男命、天照大御神の左の御みづらに纏かせる八尺勾璣の五百津のみすまるの珠を乞ひ度して、ぬなともゆらに、天之眞名井に振り濺ぎて、さがみにかみて、吹き棄つる氣吹の狹霧に成りませる神の御名は、正勝吾勝勝速日天之忍穗耳命。亦右の御みづらに纏かせる珠を乞ひ度して、さがみにかみて、吹き棄つる氣吹の狹霧に成りませる神の御名は、天之善卑能命。亦御璽に纏かせる珠を乞ひ度して、さがみにかみて、吹き棄つる氣吹の狹霧に成りませる神の御名は、天津日子根命。又左の御手に纏かせる珠を乞ひ度して、さがみにかみて、吹き棄つる氣吹の狹霧に成りませる神の御名は、活津日子根命。亦右の御手に纏かせる珠を乞ひ度して、さがみにかみて、吹き棄つる氣吹の狹霧に成りませる神の御名は、熊野久須毘命。并五柱是に天照大御神、速須佐之男命に告りたまはく、是の後に生れませる五柱の男子は、物質、我

が物に囚りて成りませり。故自から吾が子也。先に生れませる三柱の女子は、物質、汝の物に囚りて成りませり。故乃ち汝の子也。如此詔り別けたまひき。

故其の先に生れませる神、多紀理毘賣命は、智形之奥津宮に坐す。次に市寸嶋比賣命は、智形之中津宮に坐す。次に田寸津比賣命は、智形之邊津宮に坐す。此の三柱の神は、智形君等が以ちいつく三前の大神也。

故此の後に生れませる五柱の子の中に、天善比命の子建比良鳥命、此は出雲國造、天邪志國造、上つ巻上國造、下つ巻上國造、伊自牟國造、津嶋直造、江國造等の祖也。次に天津日子根命は、凡川内國造、額田部源坐連、(茨)木國造、佐の田中直、山代國造、馬來田國造、道原の岐間國造、周芳國造、倭の流知造、高市縣主、蒲生稻寸、三枝部造等の祖也。

爾に速須佐之男命、天照大御神に白したまはく、我が心清明き故に、我が生めりし子、手弱女を得つ。此に囚りて言さば、自から我勝ちぬと云ひて勝ちさびに、天照大御神の營田の阿離ち、溝埋め、亦其の大嘗聞こし看す殿に、尿まり散らしき。故然か爲れども、天照大御神は、とがめずて告りたまはく、尿如すは、酔ひて吐き散らすこそ。我が那勢之命如此爲つらめ。又田の阿離ち溝埋むるは、地をあたらしとこそ。我が那勢之命如此爲つらめと、詔り直したまへども、

猶其の悪しき態止まずて、轉てあり。天照大御神、忌服屋に坐しまして、神御衣織らしめたまふ時に、其の服屋の頂を穿ちて、天斑馬を逆刺ぎに刺ぎて、墮し入るる時に、天衣織女見驚きて、梭に陰上を衝きて死せにき。故是に天照大御神見畏みて、天石屋戸を閉て、刺しこもり坐しましき。

爾ち高天原皆暗く、葦原中國悉に闇し。此に因りて常夜往く。是に萬神の聲は、狹蠶なす皆涌き、萬の妖悉に發りき。是を以て八百萬神、天安之河原に、神集ひ集ひて、高御産巢日神の子思金神に、思はしめて、常世の長鳴鳥を集へて、鳴かしめて、天安之河の河上の天堅石を取り、天金山の鐵を取りて、鍛入天津麻羅を求きて、伊斯許理度賣命に科せて、鏡を作らしめ、玉祖命に科せて、八尺勾瓊の五百津の御すまるの珠を作らしめて、天兒屋命布刀玉命を召びて、天香山の眞男鹿の肩を内拔に抜きて、天香山の天波波迦木名を取りて、占合へまかなはしめて、天香山の五百津眞賢木を、根こじにこじて、上枝に、八尺勾瓊の五百津の御すまるの玉を取り著け、中枝に、八咫鏡を取り繫け、下枝に、白丹寸手青丹寸手を取り垂てて、此の種種の物は、布刀玉命、布刀御幣と取り持たして、天兒屋命、布刀詔戸言齋白して、天手力男神、戸の掖に隠り立たして、天宇受賣命、天香山の天之日影を手次に繫けて、天之眞折を簀と爲て、天香山の小竹葉を手草に結びて、天之石屋戸にうけ伏せて、踏みとどろこし、神懸り爲て、智乳を

掛き出で、裳緒をほとに忍し垂れき。爾高天原動りて、八百萬神共に咲ひき。

是に天照大御神怪しと以爲ほして、天石屋戸を細めに開きて、内より告りたまへるは、吾が隠り坐すに因りて、天原自から闇く、葦原中國も皆闇けむと以爲ふを、何由て天宇受賣は、樂びし、亦八百萬神諸咲ふぞとのりたまひき。爾ち天宇受賣、汝が命に益りて貴き神坐ますが故に歡喜咲樂ふと白言しき。如此言す間に、天兒屋命布刀玉命、其の鏡を指し出でて、天照大御神に示せ奉る時に、天照大御神逾奇しと思ほして、稍戸より出でて、臨み坐す時に、其の隠り立てる天手力男神、其の御手を取りて引き出しまつりき。即ち布刀玉命、尻久米繩を其の御後方に控き度して、此より内にな還り入りましそと白言しき。故天照大御神出で坐せる時に、高天原も葦原中國も、自から照り明りき。

是に八百萬神共に議りて、速須佐之男命に、千位置戸を負ほせ、亦鬚を切り、手足の爪をも抜かしめて、神やらひやらひき。

又食物を大氣津比賣神に乞ひたまひき。爾に大氣都比賣、鼻口また尻より、種種の味物を取り出でて、種種作り具へて、進る時に、速須佐之男命其の態を立ち伺ひて、穢汚きもの奉進ると爲ほして、乃ち其の大氣津比賣神を殺したまひき。故殺さえたまへる神の身に生れる物は、頭に蠶生り、二つの目に稻種生り、二つの耳に粟生り、鼻に小豆生り、陰に麥生り、尻に大豆生りき。

故是に神産巢日御祖命、茲を取らしめて、種と成したまひき。
 故避追えて、出雲國の肥河上なる鳥髪の地に降りましき。此の時しも嘗其の河より流れ下りき。
 是に須佐之男命、其の河上に入有りけりと以爲ほして、尋覓ぎ上り往てまししかば、老夫と老女
 と二人在りて、童女を中に置て泣くなり。汝等は誰ぞと問ひ賜へば、其の老夫は國神、大山
 津見神の子なり。僕が名は足名稚、妻が名は手名稚、女が名は櫛名田比賣と謂すと答言す。亦汝
 の哭く由は何ぞと問ひたまへば、我が女は本より八稚女在りき。是に高志の八俣遠呂智なも、年
 毎に來て喫ふなる。今其れ來ぬ可き時なるが故に泣くと答言す。其の形は如何にかと問ひたま
 へば、彼が目は赤加賀智如して、身一つに入頭八尾有り。亦其の身に蘿また檜櫛生ひ、其の長さ
 竊八谷峽八尾を度りて、其の腹を見れば、悉に常も血あえ爛れたりと答言す。此に赤加賀知と謂へる
 は、今の磯磯也。爾速須佐之男命其の老夫に、是汝の女ならば、吾に奉らむやと詔りたまふに、恐
 けれど御名を覺らずと答言せば、吾は天照大御神の伊呂勢也。故今天より降り坐しつと答詔へた
 まひき。爾に足名稚手名稚神、然か坐さば恐し、立奉らむと白しき。
 爾速須佐之男命、乃ち其の童女を湯津爪櫛に取り成して、御みづらに刺さして、其の足名稚手
 名稚神に告りたまはく、汝等、八鹽折之酒を醸み、且垣を作り廻し、其の垣に入つの門を作り、
 門毎に入つのさずきを結び、其のさずき毎に、酒船を置きて、船毎に其の八鹽折酒を盛りて待

ちてよとのりたまひき。故告りたまへる隨にして、如此設け備へて待つ時に、其の八俣遠呂智、
 信に言ひしが如來つ。乃ち船毎に己頭を垂入て、其の酒を飲みき。是に飲み酔ひて、皆伏し寝
 たり。爾ち速須佐之男命、其の御佩かせる十拳劍を抜きて、其の蛇を切り散りたまひしかば、肥
 河血に變りて流れき。故其の中尾を切りたまふ時、御刀の刃毀けき。怪しと思ほして、御刀の前
 以ちて、刺し割きて見そなはししかば、都牟刈の大刀在り。故此の大刀を取らして、異しき物ぞ
 と思ほして、天照大御神に白し上げたまひき。是は草那藝之大刀也。
 故是を以て其の速須佐之男命、宮造作可き地を、出雲國に求ぎたまひき。爾に須賀の地に到
 り坐して詔りたまはく、吾此地に來まして、我が御心すがしとのりたまひて、其地になも宮
 作りて坐しましたしける。故其地をば、今に須賀とぞ云ふ。茲の大神初め須賀宮作らしし時に、其地
 より雲立ち騰りき。爾御歌作したまふ。其歌曰は、
 やくもたつ 出雲やへがき つま隠みに やへがきつくる そのやへがきを
 是に其の足名稚神を喚して、汝は我が宮の首任れと告言りたまひ、且名號を稻田宮主須賀之八耳
 神と負ほせたまひき。
 故其の櫛名田比賣を以て、くみどに起して、生みませる神の名を、八嶋士奴美神と謂ふ。又大
 山津見神の女、名は神大市比賣に娶ひて、子、大年神、次に宇迦之御魂神二柱を生みたまひき。

兄八嶋士奴美神、大山津見神の女、名は木花知流比賣に娶ひて、生みませる子、布波能母遲久奴須奴神。此の神、淤迦美神の女、名は日河比賣に娶ひて、生みませる子、深淵之水夜禮花神。此の神、天之都度間知泥神に娶ひて、生みませる子、淤美豆奴神。此の神、布怒豆怒神の女、名は布帝耳神に娶ひて、生みませる子、天之冬衣神。此の神、刺國大神の女、名は刺國若比賣に娶ひて、生みませる子、大國主神。亦の名は大穴牟遲神と謂し、亦の名は葦原色許男神と謂し、亦の名は八千矛神と謂し、亦の名は宇都志國玉神と謂す。并せて五名有り。

故此の大國主神の兄弟、八十神坐しき。然れども皆國は大國主神に避りまつりき。避りまつりし所以は、其の八十神各、稻羽の八上比賣を婚はむの心有りて共に稻羽に行きける時に、大穴牟遲神に俗を負はせ、從者と爲て、率て往きき。是に氣多之前に到りける時に、裸なる菟伏せり。八十神其の菟に誦ひけらく、汝爲むは、此の海鹽を浴み、風の吹くに當りて、高山の尾上に伏してよと云ふ。故其の菟、八十神の教ふる從にして伏しき。爾に其の鹽の乾く隨、其の身の皮悉に風に吹き拆かえし故に、痛苦みて泣き伏せれば、最後に來ませる大穴牟遲神、其の菟を見て、何由も汝泣き伏せると言ひたまふに、菟答言さく、僕淤岐嶋に在りて、此の地に度らまく欲りつれども、度らむ因無かりし故に、海のわにを欺きて言ひけらく、吾と汝と、族の多き小きを競べてむ。故汝は、其の族の在りの、悉率て來て、此の嶋より氣多前まで、皆列み伏し度れ。吾其の

上を踏みて、走りつつ讀み度らむ。是に吾が族と孰れ多きといふことを知らむ。如此言ひしかば、欺かえて、列み伏せりし時に、吾其上を踏みて、讀み度り來て、今地に下りむとする時に、吾汝は我に欺かえつと言ひ竟れば、即ち最端に伏せるわに、我を捕へて、悉に我が衣服を剝き去り。此に因りて泣き患ひしかば、先だちて行でませる八十神の命以ちて、海鹽を浴みて風に當り伏せれと誦告へたまひき。故其の如爲しかば、我が身悉に傷はえつとまをす。是に大穴牟遲神、其の菟に教告へたまはく、今急く此の水門に往きて、水以て汝が身を洗ひて、即ち其の水門の蒲の黃を取りて、敷き散らして、其の上に輾轉びてば、汝が身本の膚の如必ず差えなむものぞとをしへたまひき。故其の如爲しかば、其の身本の如くになりき。此稻羽の素菟といふ者也。今者に菟神と名も謂ふ。故其の菟大穴牟遲神に白さく、此の八十神は、必ず八上比賣を得たまはじ。俗を負ひたまへれども、汝が命を獲たまはむとまをしき。

是に八上比賣、八十神に答へけらく、吾は汝等の言は聞かじ。大穴牟遲神に嫁はなと言ふ。故爾に八十神怒りて、大穴牟遲神を殺さむと共謀りて、伯伎國の山間山本に至りて云ひけるは、此の山に赤猪在るなり。故われ共追ひ下りなば、汝待ち取れ。若し待ち取らずは、必ず汝を殺さむと云ひて、猪に似たる大石を火以て焼きて、轉ばし落しき。爾追ひ下り、取る時に、其の石に燒き著かえて死せたまひき。爾に其の御祖命哭き思ひて、天に參り上りて、神産巢日之命に請した

まふ時に、乃ち賣比賣と蛤比賣とを遣せて、作り活さしめたまふ。爾賣比賣きさげ焦して、蛤比賣水を持ちて、母の乳汁と塗りしかば、麗しき壯夫に成りて、出で遊行きき。
 是に八十神見て、且欺きて山に率て入りて、大樹を切り伏せ、矢を茹めて、其の木に打ち立て、其の中に入らしめて、即ち其の氷目矢を打ち離ちて、拷殺しき。爾亦其の御祖命哭きつつ求げば、見得て、即ち其の木を拆きて、取り出で活かして、其の子に告りたまはく、汝此間に有らば、遂に八十神に滅さえなむと言りたまひて、乃ち木國の大屋毘古神の御所に速がし遣りたまひき。爾八十神竟ぎ追ひ臻りて、矢刺す時に、木俣より漏き逃れて去りたまひき。
 御祖命子に告りたまはく、須佐能男命の坐します根堅洲國に參向てよ。必ず其の大神譲りたまひなむと云りたまふ。故詔命の隨、須佐之男命の御所に參到りしかば、其の女須勢理毘賣出で見て、目合爲て、相婚まして、還り入りて、其の父に、甚と麗しき神來ましつと言したまひき。爾其の大神出で見て、此は葦原色許男と謂ふかみぞと告りたまひて、即て喚び入れて、其の蛇の室に寝しめたまひき。是に其の妻須勢理毘賣命、蛇の比禮を其の夫に授けて云りたまはく、其の蛇咋はむとせば、此の比禮を三たび擧りて打ち撥ひたまへとのりたまふ。故教の如したまひしかば、蛇自から静まりし故に、平く寢て出でたまひき。亦來る日の夜は、吳公と蜂との室に入れたまひしを、且吳公蜂の比禮を授けて、先の如教へたまひし故に、平く出でたまひき。亦鳴鏑

を大野の中に射入れて、其の矢を探らしめたまふ。故其の野に入ります時に、即ち火以て其の野を燒き廻らしつ。是に出でむ所を知らざる間に、鼠來て云ひけるは、内はほらほら、外はすぶすぶ。如此言ふ故に、其處を踏みしかば、落り墜入りし間に、火は燒け過ぎぬ。爾に其の鼠其の鳴鏑を咋ひ持ち出で來て、率りき。其の矢の羽は、其の鼠の子等皆喫ひたりき。
 是に其の妻須世理毘賣は、喪具を持ちて、哭きつつ來まし。其の父の大神は、已に死せぬと思ほして、其の野に出で立たせば、爾ち其の矢を持ちて奉る時に、家に率て入りて、八田間の大室に喚び入れて、其の頭の鼠を取らせたまひき。故其の頭を見れば、吳公多かり。是に其の妻、むくの木の實と赤土とを、其の夫に授けたまへば、其の木の實を咋ひ破り、赤土を含みて、唾出したまへば、其の大神、吳公を咋ひ破りて、唾出すと以爲ほして、心に愛しく思ほして、寢ましき。爾に其の大神の髪を握りて、其の室の椽毎に結び著けて、五百引石を、其の室の戸に取り塞へて、其の妻須世理毘賣を負ひて、其の大神の生大刀生弓矢、また其の天詔琴を取り持たして、逃げて出でます時に、其の天詔琴樹に拂れて、地動鳴きき。故其の寢ませる大神、聞き驚かして、其の室を引き休したまひき。然れども椽に結べる髪を解かす間に、遠く逃げたまひき。故爾に賣泉比良坂まで追ひ至てまして、遙に望けて、大穴牟遲神を呼ばひて謂りたまはく、其の汝が持たる生大刀生弓矢を以ちて、汝が庶兄弟をば、坂の御尾に追ひ伏せ、河の瀬に追ひ撥ひて、おれ大

國主神と爲り、亦宇都志國玉神と爲りて、其の我が女須世理毘賣を、嫡妻と爲て、宇迦能山の山本に、底津石根に、宮柱ふとしり、高天原に、氷縁たかしりて居れ、是奴よと曰りたまひき。故其の大刀弓を持ちて、其の八十神を追ひ避くる時に、坂の御尾毎に追ひ伏せ、河の瀬毎に追ひ撥ひて、國作り始めたまひき。

故其の八上比賣は、先の期りの如、みとあたはしつ。故其の八上比賣は、率て來ましつれども、其の嫡妻須世理毘賣を畏みて、其の生みませる子をば、木の俣に刺し挟みて、返りましき。故其の子の名を木俣神と云す。亦の名は御井神とも謂す。

此の八千矛神、高志國の沼河比賣を婚ひに幸行しし時、其の沼河比賣の家に到りて、歌曰ひたまはく、

八千矛の 神の命は 八島國 つま覺きかねて とほとほし 高志の國に さ
かしめを ありときかして くはしめを ありときこして さよばひに あり
たたし よばひに ありかよはせ 大刀が緒も いまだとかずて 襲をも い
まだとかねば をとめの 寝すやいたとを 押そぶらひ わがたたせれば 引
こづらひ わがたたせれば あをやまに ぬえはなき さ野つとり きぎしは
とよむ にはつとり かけはなく うれたくも なくなるとりか このとり

も うちやめこせね いたふや あまはせづかひ ことの かたりごとも

爾に其の沼河日賣、未だ戸を開かずて、内より歌曰ひたまはく、

八千矛の 神の命 ぬえくさの 女にしあれば わがこころ 浦渚の鳥ぞ い
まこそは ちどりにあらめ のちは などりにあらむを いのちは な死せた
まひそ いたふや あまはせづかひ ことの かたりごとも こそば
あをやまに ひがかくれば ぬばたまの よはいでなむ あさひの 丞みさか
えきて 袴綱の しろき腕 あわゆきの 弱るむねを そだたき たたきまな
がり 眞玉手 玉手さしまき 股ながに 寝は宿さむを あやに な戀ひきこ
し 八千矛の 神の命 ことの かたりごとも こそば

故其の夜は、合はさずて、明日の夜御合ひしたまひき。

又其の神の嫡后須勢理毘賣命、甚く嫉妬爲たまひき。故其の日子遲神わびて、出雲より、倭國に上り坐さむとして、束装し立たす時に、片御手は、御馬の鞍に懸け、片御足其の御鏡に踏み入れて、歌曰ひたまはく、

ぬばたまの くろきみ衣を まつぶさに とりよそひ おきつとり 胸みると

きはたたぎも、これはふさはず、邊つなみ、磯にぬぎ棄て、雄鳥のあをきみ衣をまつぶさに、とりよそひ、おきつとり、胸みるとき、はたたぎも、こもふさはず、邊つなみ、磯にぬぎ棄て、やまがたに、求ぎし、茜つき、染木がしるに、染めころもを、まつぶさに、とりよそひ、おきつとり、胸みるときはたたぎも、此しよろし、いとこやの、いものみこと、むらとりの、わがむれ往なば、ひけとりの、わがひけ往なば、なかじとは、なはいふとも、山處の、ひともとすすき、項傾し、ながなかさまく、あさあめの、さざりに、たたむぞ、わかくさの、つまのみこと、ことの、かたりごと、こをば、爾に其の後、大御酒杯を取らして、立ち依り指擧げて、歌曰ひたまはく、八千矛の、神の命や、あが大國、主こそは、男にいませば、うちみる、しまの崎崎、かきみる、いその崎おちず、わかくさの、つまもたせらめ、あはもよ女にしあれば、汝を除て、夫はなし、汝を除て、夫はなし、あやかきの、ふはやがしたに、蒸しぶすま、にこやがしたに、栲ふすま、さやぐがしたに、あわゆきの、弱るむねを、栲綱の、しろき腕、そだたき、たたきまながり、眞玉手、玉手さしまき、股ながに、寝をしなせ、豊御酒、たてまつらせ

如此歌ひて、即ちうきゆひ爲て、うながけりて、今に至るまで鎮り坐す。此を神語と謂ふ。故此の大國主神、曾形奥津宮に坐す神、多紀理毘賣命に娶ひて、生みませる子、阿遲鉏高日子根神、次に妹高比賣命、亦の名は下光比賣命。此の阿遲鉏高日子根神は、今迦毛大御神と謂す者也。

大國主神、亦神屋楯比賣命に娶ひて生みませる子、事代主神、亦八嶋牟遲能神の女鳥耳神に娶ひて、生みませる子、鳥鳴海神。此の神、日名照額田毘道男伊許知瀨神に娶ひて、生みませる子、國忍富神。此の神、葦那陀迦神、亦の名は八河江比賣に娶ひて、生みませる子、速甕之多氣佐波夜遲奴美神。此の神、天之甕主神の女、前玉比賣に娶ひて、生みませる子、甕主日子神。此の神、添加美神の女、比那良志毘賣に娶ひて、生みませる子、多比理岐志麻流美神。此の神、比比羅木之其花麻豆美神の女、活玉前玉比賣神に娶ひて、生みませる子、美呂浪神。此の神、敷山主神の女、青沼馬沼押比賣に娶ひて、生みませる子、布忍富鳥鳴海神。此の神、若晝女神に娶ひて、生みませる子、天日腹大科度美神。此の神、天狹霧神の女、遠津待根神に娶ひて、生みませる子、遠津山岬多良斯神。

右の件八嶋土奴美神より以下、遠津山岬帶神以前、十七世の神と稱ふ。故大國主神、出雲の御大之御前に坐す時に、波の穂より、天之羅摩船に乗りて、蛾の皮を内剝

に到きて、衣服に爲て、歸り來る神有り。爾其の名を問はすれども、答へず。且所從の諸神に問はすれども、皆知らずと白しき。爾にたにくく白言さく、此は久延毘古そ必ず知りたむとまをせば、即ち久延毘古を召して、問はず時に、此は神產巢日神の御子、少名毘古那神なりと答白しき。故爾に神產巢日御祖命に白し上げしかば、此は實に我が子也。子の中に、我が手侯よりくきし子也。故汝葦原色許男命と、兄弟と爲りて、其の國作り堅めよと答告りたまひき。故爾より、大穴牟遲と少名毘古那と二柱の神、相並ばして、此の國作り堅めたまひき。然後には、其の少名毘古那神は、常世國に度りましき。故其の少名毘古那神を顯し白せりし、所謂久延毘古は、今者に山田之曾富騰といふ者也。此の神は、足は行かねども、天下の事を盡に知れる神になもありける。

是に大國主神愁ひまして、吾獨して何でかも此の國を得作らむ、孰の神と與に吾は此の國を相作らましと告りたまひき。是の時に、海を光して、依り來る神有り。其の神の言りたまはく、我が前を能く治めてば、吾共與に相作り成してむ。若し然らずは、國成り難てましとのりたまひき。爾大國主神曰したまはく、然らば、治め奉らむ狀は奈何にぞとまをしたまへば、吾をばも、倭の青垣東山の上につき奉れと答言りたまひき。此は御諸山の上に坐す神也。故其の大年神、神活須毘神の女、伊怒比賣に娶ひて、生みませる子、大國御魂神、次に韓神、

次に曾富理神、次に向日神、次に聖神。五神 又香用比賣に娶ひて、生みませる子、大香山戸臣神、次に御年神。二柱 又天知迦流美豆比賣に娶ひて、生みませる子、奥津日子神、次に奥津比賣命、亦の名は大戸比賣神。此は諸人の以ち拜く龍神也。次に大山咋神、亦の名は山末之大主神。此の神は、近淡海國の日枝山に坐す。亦葛野の松尾に坐す、鳴籥になりませる神也。次に庭津日神、次に阿須波神、次に波比岐神、次に香山戸臣神、次に羽山戸神、次に庭高津日神、次に大土神、亦の名は土之御祖神。九神

上の件大年神の子、大國御魂神より以下、大土神以前、并せて十六神。
 羽山戸神、大氣都比賣神に娶ひて、生みませる子、若山咋神、次に若年神、次に妹若沙那賣神、次に彌豆麻岐神、次に夏高津日神、亦の名は夏之賣神、次に秋毘賣神、次に久久年神、次に久久紀若室葛根神。

上の件羽山戸神の子、若山咋神より以下、若室葛根神以前、并せて八神。
 天照大御神の命以ちて、豐葦原の、千秋の長五百秋の水穗國は、我が御子正勝吾勝勝速日天忍穗耳命の知さむ國と、言因さし賜ひて、天降したまひき。是に天忍穗耳命、天浮橋にたたして、詔りたまはく、豐葦原の、千秋の長五百秋の水穗國は、いたくさやぎて有りけりと、告りたまひて、更に還り上らして、天照大御神に請したまひき。爾高御產巢日神、天照大御神の命以ちて、天

安河の河原に、八百萬の神を神集に集へて、思金神に思はしめて詔りたまはく、此の葦原中國は、我が御子の知さむ國と、言依さし賜へる國也。故此の國に道速振荒振國神等の多なると以爲ほすは、何の神を使はしてか、言趣けましとのりたまひき。爾に思金神また八百萬の神たち、議りて、天若比神、是遣してむと白しき。故天若比神を遣しつれば、乃て大國主神に媚び附きて、三年に至るまで、復奏さざりき。

是を以て高御產巢日神天照大御神、亦諸の神等に問ひたまはく、葦原中國に遣せる天若比神、久しく復奏さず。亦何の神を使はしてば吉けむ。爾に思金神答白しけらく、天津國玉神の子、天若日子を遣してむとまをしき。故爾に天之麻迦古弓、天之波波矢を、天若日子に賜ひて、遣しき。是に天若日子、其の國に降り到きて、即ち大國主神の女、下照比賣をめとし、亦其の國を獲むと慮りて、八年に至るまで、復奏さざりき。故爾に天照大御神高御產巢日神、亦諸の神等に問ひたまはく、天若日子久しく復奏さず。又曷の神を遣してか、天若日子が淹しく留る所由を問はしめむととひたまひき。是に諸の神たち、また思金神答白さく、雉鳴女を遣してむとまをす時に、詔りたまはく、汝行きて、天若日子に問はむ狀は、汝を葦原中國に使はせる所以は、其の國の荒振神等を言趣け和せと也。何ぞ八年に至るまで、復奏さざるととへのりたまひき。

故爾に鳴女天より降り到きて、天若日子が門なる湯津楓の上に居て、委曲に天神の詔命の如言りき。爾に天佐具賣、此の鳥の言ふことを聞きて、天若日子に、此の鳥は、鳴く音甚と惡し。故射殺したまひねと云ひ進むれば、即ち天若日子、天神の賜へる天之波士弓、天之加久矢を持ちて、其の雉を射殺しつ。爾に其の矢、雉の胸より通りて、逆に射上げらえて、天安河の河原に坐しませ、天照大御神、高木神の御所に逮りき。是の高木神は、高御產巢日神の別名なり。故高木神、其の矢を取らして見そなはすれば、其の矢の羽に血著きたりき。是に高木神、此の矢は、天若日子に賜へりし矢ぞかしと告りたまひて、諸の神等に示せて、詔りたまへらくは、或し天若日子、命を誤へず、惡神を射たりし矢の至つるならば、天若日子に中らざれ。或し邪心し有らば、天若日子、此の矢にまがれと云りたまひて、其の矢を取らして、其の矢の穴より、擲き返したまひしかば、天若日子が、胡床に寝たる高智坂に中りて、死せにき。此還矢可惡之木也。亦其の雉還らず。故今に諺に、雉の頼使と曰ふ本是也。

故天若日子が妻下照比賣の哭かせる聲、風の與響きて、天に到りき。是に天なる天若日子が父、天津國玉神、また其の妻子ども聞きて、降り來て、哭き悲みて、乃ち其處に喪屋を作りて、河鴈を岐佐理持とし、鷺を掃持とし、翠鳥を御食人とし、雀を確女とし、雉を哭女とし、如此行ひ定めて、日八日夜八夜を遊びたりき。

此の時阿遲志貴高日子根神到まして、天若日子が喪を弔ひたまふ時に、天より降り到つる、天若日子が父亦其の妻、皆哭きて、我が子は死なずて有りけり。我が君は死なずて坐しけりと云ひて、手足に取り懸りて、哭き悲みき。其の過てる所以は、此の二柱の神の容姿、甚と能く相似たり。故是を以て過てるなりけり。是に阿遲志貴高日子根神大く怒りて曰ひけらく、我は愛しき友なれこそ弔ひ來つれ。何とかも吾を穢き死人に比ふると云ひて、御佩かせる十掬劍を抜きて、其の喪屋を切り伏せ、足以て躡る離ち遣りき。此は美濃國の藍見河の河上なる、喪山といふ者也。其の持ちて切れる大刀の名は、大量と謂ふ。亦の名は神度劍とも謂ふ。故阿治志貴高日子根神は、怒りて飛び去りたまふ時に、其の伊呂妹高比賣命、其の御名を顯さむと思ひて、歌曰ひけらく、

あめなるや おとたなばたの 項懸せる たまのみすまる みすまるに あな
 だまはや またに 二互らす 阿遲志貴 高日子根の かみぞや

此の歌は、夷振也。

是に天照大御神の詔りたまはく、亦曷の神を遣してば吉けむ。爾思金神また諸の神たち白しけらく、天安河の河上の天石屋に坐す、名は伊都之尾羽張神、是遣す可し。若し亦此の神非ずは、其の神の子建御雷之男神、此遣す應し。且其の天尾羽張神は、天安河の水を逆に塞き上げて、道を塞き居れば、他神は得行かじ。故別に天迦久神を遣して、問ふ可しとまをしき。故爾に天迦久

神を使はして、天尾羽張神に問ふ時に恐し、仕へ奉らむ。然れども此の道には、僕が子建御雷神を遣す可しと答白して、乃ち貢進りき。爾天鳥船神を、建御雷神に副へて遣しき。

是を以て此の二神、出雲國の伊那佐の小濱に降り到きて、十掬劍を抜きて、浪の穂に逆に刺し立てて、其の劍の前に踏み坐て、其の大國主神に問言ひたまはく、天照大御神高木神の命以ちて、問ひに使はせり。汝がうしはける葦原中國は、我が御子の知さむ國と、言依さし賜へり。故汝が心奈何にぞとひたまふときに、答白へまつらく、僕は得白さじ。我が子八重言代主神、是白す可きを、鳥遊取魚爲に、御大之前に往きて、未だ還り來ずとまをしき。故爾に天鳥船神を遣して、八重言代主神を徴し來て、問ひ賜ふ時に、其の父の大神に、恐し、此の國は、天神之御子に立奉りたまへと言ひて、即ち其の船を踏み傾けて、天逆手を、青柴垣に打ち成して、隠りましき。

故爾に其の大國主神に問ひたまはく、今汝が子事代主神、如此白しぬ。亦白す可き子有りやととひたまひき。是に亦白しつらく、亦我が子建御名方神有り。此を除きては無し。如此白したまふ間しも、其の建御名方神、千引石を、手末に擎けて來て、誰ぞ我が國に來て、忍び忍び如此物言ふ。然らば力競爲む。故我先づ其の御手を取らむといふ。故其の御手を取らしむれば、即ち立氷に取り成し、亦劍双に取り成しつ。故懼れて退き居り。爾に其の建御名方神の手を取らむと、

乞ひ歸して取れば、若草を取るが如、搦み掛きて投げ離ちたまへば、即ち逃げ去にき。故追ひ往きて、科野國の洲羽海に迫めたりて、殺さむとしたまふ時に、建御名方神白しつらく、恐し、我をな殺したまひそ。此の地を除きては、他處に行かじ。亦我が父大國主神の命に違はじ。八重事代主神の言に違はじ。此の葦原中國は、天神御子の命の隨、獻らむとまをしたまひき。

故更に且還り來て、其の大國主神に問ひたまはく、汝が子等、事代主神、建御名方神二神は、天神御子の命の隨、違はじと白しぬ。故汝が心奈何にぞとひたまひき。爾に答白へまつらく、僕が子等二神の白せる隨、僕も違はじ。此の葦原中國は、命の隨既に獻らむ。唯僕が住所をば、天神の御子の天津日繼知しめさむ、とたる天之御巢如して、底津石根に、宮柱ふとしり、高天原に、氷木たかしりて、治め賜はば、僕は、百不足八十朔手に隠りて侍ひなむ。亦僕が子等、百八十神は、八重事代主神、神の御尾前と爲りて、仕へ奉らば、違ふ神は非し。如此白して、乃ち隠りましき。故白したまひし隨、出雲國の名藝志の小濱に、天の御舎を造りて、水戸神の孫、櫛八玉神を、膳夫と爲て、天御饗獻る時に、禱ぎ白して、櫛八玉神鶴に化りて、海底に入りて、底のはにを咋ひ出でて、天八十毘良迦を作りて、海布の柄を鎌りて、燧白に作り、海尊の柄を燧杵に作りて、火を鑽り出でて云しけらく、是の我が燧れる火は、高天原には、神産巢日御祖命のとたる天之新巢の燧烟の、八拳垂るまで燒き擧げ、地の下は、底津石根に燒き燧して、櫛繩の千

尋繩打ち延へ、釣らせる海人が、大口の尾翼鱈、さわさわに控き依せ騰げて、折竹のとををとをに、天の眞魚炸獻らむとまをしき。故建御雷神、返り參る上りて、葦原中國言向け和平しぬる狀を復奏したまひき。

爾に天照大御神高木神の命以ちて、太子正勝吾勝勝速日天忍穗耳命に詔りたまはく、今葦原中國平け訖へぬと白す。故言依さし賜へりし隨、降り坐して知し看せとのりたまひき。爾に其の太子正勝吾勝勝速日天忍穗耳命の答白したまはく、僕は、降りなむ裝束せし間に、子生れ坐しつ。名は天邇岐志國邇岐志天津日高日子番能邇邇藝命。此の子を降す應しとまをしたまひき。此の御子は、高木神の女、萬幡豐秋津師比賣命に御合ひまして、生みませる子、天火明命、次に日子番能邇邇藝命二柱にます。是を以て白したまふ隨、日子番能邇邇藝命に詔科せて、此の豐葦原の水穂國は、汝知さむ國なりと、言依さし賜ふ。故命の隨、天降ります可しとのりたまひき。

爾に日子番能邇邇藝命、天降りまさむとする時に、天の八織に居て、上は高天原を光し、下は葦原中國を光す神、是に有り。故天照大御神高木神の命以ちて、天宇受賣神に、汝は手弱女人に有れども、いむかふ神と、面勝神なり。故専ら汝往きて問はむは、吾が御子の天降りまさむとする道を、誰ぞ如此て居るとへと詔りたまひき。故問はせ賜ふ時に、答へ白さく、僕は國神、名は發田毘古神也。出で居る所以は、天神の御子天降り坐すと聞きつる故に、御前に仕へ奉らむ

として、參る所へ待ふぞとまをしたまひき。
爾に天兒屋命、布刀玉命、天宇受賣命、伊斯許理度賣命、玉祖命、并せて五件緒を、支り加へて、天降りまさしめたまひき。

是に其のをきし八尺勾璣鏡、また草那藝劍、亦常世思命神、手力男神、天石門別神を副へ賜ひて詔りたまへらくは、此の鏡は、専ら我が御魂として、吾が前を拜くが如、いつき奉れ。次に思命神は、前の事を取り持ちてまをしたまへとのりたまひき。

此の二柱の神は、さくくしろ伊須受能宮に拜き祭る。次に登由宇氣神、此は外宮の度相に坐す神也。次に天石戸別神、亦の名は櫛石窟神と謂し、亦の名は豐石窟神とも謂す。此の神は、御門の神也。次に手力男神は、佐那縣に坐せり。

故其の天兒屋命は、中臣連等が祖、布刀玉命は、忌部首等が祖、天宇受賣命は、野女君等が祖、伊斯許理度賣命は、鏡作連等が祖、玉祖命は、玉祖連等が祖なり。

故爾に天津日子番能邇邇藝命、天之石位を離れ、天之八重多那雲を押し分けて、いつのちわきちわきて、天浮橋に、うきしまり、そりたたして、竺紫の日向の、高千穂之久士布流多氣に天降り坐しき。

故爾に天忍日命、天津久米命二人、天之石鞞を取り負ひ、頭椎之大刀を取り佩き、天之波士弓

を取り持ち、天之眞鹿兒矢を手狹み、御前に立たして、仕へ奉りき。故其の天忍日命、此は大伴連等が祖、天津久米命、此は久米直等が祖也。

是に肉の韓國を笠沙之御前にまぎ通りて詔りたまはく此地は朝日の直刺す國、夕日の日照る國也。故此地ぞ甚と吉き地と詔りたまひて、底津石根に、宮柱ふとしり、高天原に、氷縁たかしりて坐しましき。

故爾に天宇受賣命に詔りたまはく、此の御前に立ちて仕へ奉れりし、猿田毘古大神をば、専ら顯し申せる汝、送り奉れ。亦其の神の御名は、汝負ひて仕へ奉れとのりたまひき。是を以て猿田君等、其の猿田毘古之男神の名を負ひて、女を猿女君と呼ぶ事是也。

故其の猿田毘古神阿邪訶地名に坐しける時に、漁爲て、比良夫具に、其の手を咩ひ合はさえて、海鹽に沈溺れたまひき。故其の底に沈み居たまふ時の名を、底度久御魂と謂し、其の海水のつふたつ時の名を、都夫多都御魂と謂し、其のあわさく時の名を、阿和佐久御魂と謂す。是に猿田毘古神を送りて、還り到りて、乃ち悉に鱈の廣物鱈の狭物を追ひ聚めて、汝は天神の御子に仕へ奉らむやと問言ふ時に、諸の魚ども、皆仕へ奉らむと白す中に、海鼠白さず。爾天宇受賣命、海鼠に謂ひけらく、此の口や、答へせぬ口と云ひて、紐小刀以ちて、其の口を拆しき。故今に海鼠の口拆けたり。是を以て御世、嶋の速賢獻れる時に、猿女君等に給ふ也。

是に天津日高日子能邇邇能命、笠沙御前に、麗き美人の遇へるに、誰か女ぞと問ひたまひき。答へ白したまはく、大山津見神の女、名は神阿多都比賣、亦の名は木花之佐久夜毘賣と謂したまひき。又汝が兄弟有りやと問ひたまへば、我が姉石長比賣在りと答白したまひき。爾詔りたまはく、吾汝に目合せむと欲ふは奈何にとのりたまへば、僕は得白さじ。僕が父大山津見神ぞ白さむと答白したまひき。故其の父大山津見神に乞ひに遣しける時に、大く歡喜びて、其の姉石長比賣を副へて、百取の机代の物を持たしめて、奉出しき。故爾に其の姉は、甚と凶醜きに因りて、見畏みて、返し送りたまひて、唯其の弟木花之佐久夜毘賣のみ留めて、一宿婚はしつ。爾に大山津見神、石長比賣を返したまへるに因りて、大く恥ぢて、白し送りたまひける言は、我が女一並べて立奉れる由は、石長比賣を使はしてば、天神の御子の命は、雨零り風吹けども、恒なる石の如く、常堅不動坐しませ。亦木花之佐久夜毘賣を使はしてば、木花の榮ゆるが如、榮え坐せと、うけひて貢進りき。此るに今石長比賣を返して、木花之佐久夜毘賣獨り留めたまひつれば、天神の御子の御壽は、木花のあまひのみ坐しなむとすとまをしたまひき。故是を以て今に至るまで、天皇命等の御命長くはまさざるなり。

故後に木花之佐久夜毘賣、參出て白したまはく、妾妊身を、今産むべき時に臨りぬ。是の天神の御子、私に産みまつる可きにあらず故請すとまをしたまひき。爾詔りたまはく、佐久夜毘賣、

一宿にや妊める。是は我が子に非じ。必ず國神の子にこそあらめとのりたまへば、吾が妊める子、若し國神の子ならむには、産むこと幸からじ。若し天神の御子にまさば幸からむと答白して、戸無き八尋殿を作りて、其の殿内に入りまして、土以て塗り塞ぎて、産ます時に方りて、其の殿に火を著けてなも産ましける。故其の火の盛に焼ゆる時に、生れませる子の名は、火照命、此は事人阿多君の祖。次に生れませる子の名は、火須勢理命、次に生れませる子の御名は、火遠理命、亦の名は天津日高日子穗穗手見命。三柱

故火照命は、海佐知毘古として、鯨の廣物鯨の狹物を取りたまひ、火遠理命は、山佐知毘古として、毛の麤物毛の柔物を取りたまひき。爾に火遠理命、其の兄火照命に、各にさちを相易へて用ひてむと謂ひて、三度乞はししかども、許さざりき。然れども遂に纒に得相易へたまひき。爾火遠理命、海さちを以ちて、魚釣らすに、都て一魚も得たまはず。亦其の鉤をさへ海に失ひたまひき。是に其の兄火照命、其の鉤を乞ひて、山さちも、己がさちさち、海さちも、己がさちさち、今は各さち返さむと謂ふ時に、其の弟火遠理命答曰りたまはく、汝の鉤は、魚釣りしに、一魚も得ずて、遂に海に失ひてきとのりたまへども、其の兄誰に乞ひ徴りき。故其の弟、御佩の十拳劔を破りて、五百鉤を作りて、償ひたまへども、取らず。亦一千鉤を作りて、償ひたまへども、受けずて、猶其の本の鉤を得むとぞ云ひける。

是に其の弟、海邊に泣き思ひています時に、鹽椎神来て問曰ひけらく、何にぞ虚空津日高の、泣き思ひたまふ所由はとへば、答言へたまはく、我兄と、鉤を易へて、其の鉤を失ひてき。是て其の鉤を乞ふ故に、多の鉤を償ひしかども、受けずて、猶其の本の鉤を得むと云ふなり。故泣き思ふとのりたまひき。爾に鹽椎神、我汝が命の爲に、善き譏作むと云ひて、即ち无間勝間之小船を造りて、其の船に載せまつりて、教曰へけらく、我其の船を押し流さば、差暫し往てませ。味御路有らむ。乃ち其の道に乗りて往ましなば、魚鱗の如造れる宮室、其綿津見神の宮也。其の神の御門に到りましなば、傍なる井の上に、湯津香木有らむ。故其の木の上に坐しまさば、其の海神の女、見て相譏らむ者そとをしへまつりき。

故教へし隨、小し行でましけるに、備に其の言の如くなりしかば、即ち其の香木に登りて坐しましき。爾に海神の女、豐玉毘賣の從婢、玉器を持ちて、水酌まむとする時に、井に光有り。仰ぎて見れば、麗しき壯夫有り。甚と異奇しと以爲ひき。爾火遠理命、其の婢を見たまひて、水を得しめよと乞ひたまふ。婢乃ち水を酌みて、玉器に入れて貢進りき。爾に水をば飲みたまはずして、御頸の璵を解かして、口に含みて、其の玉器に唾入れたまひき。是に其の璵い、器に著きて、婢璵を得離たず。故璵著けながら、豐玉毘賣命に進りき。爾其の璵を見て、婢に、若し門の外に人有りやと問曰ひたまへば、我が井の上の香木の上に人坐す。甚と麗しき壯夫にます。

我が王にも益りて、甚と貴し。故其の人、水を乞はせる故に、奉りしかば、水をば飲まさずて、此の璵をなも唾入れたまへる。是得離たぬ故に、入れながら將來て獻りぬと答白しき。爾豐玉毘賣命、奇しと思ほして、出で見て、乃ち見感でて、目合爲て、其の父に、吾が門に麗しき人いますと白曰したまひき。爾に海神自ら出で見て、此の人は、天津日高の御子、虚空津日高にませりと云ひて、即ち内に率て入れまつりて、美智皮の疊八重を敷き、亦絶疊八重を、其の上に敷きて、其の上に乗せまつりて、百取の机代の物を具へて、御饗爲て、即ち其の女豐玉毘賣を婚はせまつりき。故三年といふまで、其の國に住みたまひき。

是に火遠理命、其の初の事を思ほして、大きな敷一つしたまひき。故豐玉毘賣命、其の敷を聞かして、其の父に白言したまはく、三年住みたまへども、恒は敷かすことも無かりしに、今夜大きな敷一つ爲たまひつるは、若し何の由有るにかとまをしたまへば、其の父の大神、其の聲夫に問曰ひまつらく、今且我が女の語を聞けば、三年坐しませども、恒は敷かすことも無かりしに、今夜大きな敷爲たまひつと云せり。若し由有りや。亦此間に到ませる由は奈何にぞとひまつりき。爾其の大神に、備に其の兄の失せにし鉤を解れる状を語りたまひき。是を以て海神、悉に海之大小魚を召ひ集めて、若し此の鉤を取れる魚有りやと問曰ひたまふ。故諸の魚ども白さく、頃者赤海鯽魚なも、喉に鰓ありて、物得食はずと愁言ふなれば、必ず是取りつらむ

とまをしき。是に赤海鯉魚の喉を探りしかば、鉤有り。即ち取り出でて、清洗して、火遠理命に奉る時に、其の綿津見大神、誨曰へまつりけらく、此の鉤を、其の兄に給はむ時に、言りたまはむ状は、此の鉤は、淤煩鉤、須須鉤、香鉤、宇流鉤と云ひて、後手に賜へ。然して其の兄、高田を作らば、汝が命は、下田を營りたまへ。其の兄下田を作らば、汝が命は、高田を營りたまへ。然爲たまはば、吾水を掌れば、三年の間、必ず其の兄、香窮しくなりなむ。若し其然爲たまふ事を恨怨みて、攻めめなば、鹽盈珠を出して、瀝らし、若し其愁ひ請さば、鹽乾珠を出して活かし、如此して惣苦めたまへと云して、鹽盈珠鹽乾珠并せて兩箇を授けまつりて、即ち悉に和瀬魚どもを召び集めて、問曰ひたまはく、今天津日高の御子、虚空津日高、上國に出幸さむとす。誰は幾日に送り奉りて覆奏さむとひたまひき。故各、己身の尋長の隨、日を限りて白す中に、一尋和瀬、僕は、一日に送りまつりて、還り來なむと白す。故其の一尋和瀬に、然らば汝送り奉りてよ。若し海中を渡る時、な惶畏せまつりそと告りて、即ち其の和瀬の頸に載せまつりて、送り出しまつりき。故期ひしが如、一日の内に、送り奉りき。其の和瀬返りなむとせし時に、佩かせる紐小刀を解かして、其の頸に著けてなも返したまひける。故其の一尋和瀬をば、今に佐比持神とぞ謂ふなる。

是を以て備に海神の教へし言の如くして、其の鉤を與へたまひき。故爾より以後、稍愈貴しく

なりて、更に荒き心を起して、迫め來。攻めむとする時は、鹽盈珠を出して瀝らし、其愁ひ請せば、鹽乾珠を出して救ひ、如此して惣苦めたまふ時に、稽首み白さく、僕は今より以後、汝が命の晝夜の守護人と爲りてぞ仕へ奉らむとまをしき。故今に至るまで、其の瀝れし時の種種の態、絶えず仕へ奉る也。

是に海神の女、豐玉毘賣命、自ら參出て白したまはく、妾已くより妊身を、今産むべき時に臨りぬ。此を念ふに、天神の御子を、海原に生みまつる可きにあらず。故參出到つとまをしたまひき。爾即ち其の海邊の波限に、鵜の羽を葦草に爲て、産殿を造りき。是に其の産殿未だ葺き合へぬに、御腹之急忍へがたくなりたまひければ、産殿に入り坐しき。爾に産みまさむとする時に、其の日子に白したまはく、凡て佐國の人は、産む時に臨れば、本國の形に以りてなも産生むなる。故妾も今本身に以りて、産みなむ。妾をな見たまひそと言したまひき。是に其の言を奇しと思ほして、其の方に産みたまふを竊伺たまへば、八尋和瀬に化りて、匍匐ひ委蛇ひき。即見驚き畏みて、遁け退きたまひき。爾に豐玉毘賣命、其の伺見たまひし事を知らして、心恥しと以爲ほして、其の御子を生み置きて、妾恒は海道を通して、往來はむとこそ欲ひしを、吾が形を伺見たまひしが甚と忤しきことと白して、即ち海坂を塞きて、返り入りましき。是を以て其の産れませる御子の名を、天津日高日子波限建鵜草葺不合命と謂す。

然れども後は、其の伺たまひし情を恨みつつも、戀心にあ忍へたまはずて、其の御子を治養しまつる縁に因りて、其の弟玉依毘賣に附けて、歌をなも獻りける。其の歌曰、
あかだまは 緒さへひかれど しらたまの きみがよそひし たふとくありけり

爾其のひこち、答へたまひける歌曰、

おきつとり 鴨著くしまに わがゐねし いもはわすれじ よのことごとくに
故日子穗穗手見命は、高千穂宮に、伍佰捌拾歳坐しましき。御陵は、即て其の高千穂山の西に在り。

是の天津日高日子波限建鵜葺草葺不合命、姨玉依毘賣命に娶ひまして、生みませる御子の名は、五瀬命、次に稻氷命、次に御毛沼命、次に若御毛沼命、亦の名は豊御毛沼命、亦の名は神倭伊波禮毘古命。四柱 故御毛沼命は、波の穂を眺みて、常世國に渡り坐し、稻氷命は、此の國として、海原に入り坐しき。

古事記上卷終

古事記中卷

神倭伊波禮毘古命、其の伊呂兄五瀬命と二柱、高千穂宮に坐しまして、議云りたまはく、何の地に坐さばか、天下の政をば平けく聞こし看さむ。猶東のかたにこそ行でまされとのりたまひて、即ち日向より發たして、筑紫に幸行しき。故豊國の宇沙に到りませる時に、其の土人、名は宇沙都比古宇沙都比賣二人、足一騰宮を作りて、大御饗獻りき。其地より遷移らして、竺紫の岡田宮に、一年坐しましき。亦其の國より上り幸して、阿岐國の多祁理宮に、七年坐しましき。亦其の國より、遷り上り幸して、吉備の高嶋宮に、八年坐しましき。

故其の國より、上り幸す時に、龜甲に乗りて、釣爲つつ、打ち羽擧り來る人、速吸門に遇ひき。爾喚び歸せて、汝は誰ぞと問はしければ、僕は國神（名は宇豆毘古）と答曰しき。又汝は海道を知られりやと問はしければ、能く知れりと答曰しき。又從に仕へ奉らむやと問はしければ、仕へ奉らむと答曰しき。故爾ち稿機を指し度して、其の御船に引き入れて、稿根津日子といふ名號を賜ひき。此は倭國 造等が祖なり。

故其の國より上り行てます時に、浪速の渡を経て、青雲の白肩津に泊てたまひき。此の時登美那賀須泥毘古、軍を興して、待ち向へて戦ひしかば、御船に入れたる楯を取りて、下り立ちたまひき。故其地の號を、楯津と謂けつるを、今者に日下の藝津とも云ふ。是に登美毘古と戦ひたまふ時に、五瀬命、御手に登美毘古が痛矢串を負はしき。故爾に詔りたまはく、吾は日神の御子として、日に向ひて戦ふこと良はず。故賤奴が痛手をなも負ひつる。今よりはも、行き廻りて、日を背負ひてこそ撃ちてめと、期りたまひて、南の方より、廻り幸す時に、血沿海に到りて、其の御手の血を洗ひたまひき。故血沿海とは謂ふ也。其地より廻り幸して、紀國の男之水門に到りまして詔りたまはく、賤奴が手を負ひてや死きなむと、男建爲て崩りましたぬ。故其の水門を、男水門とぞ謂ふ。陵は即て紀國の籠山に在り。

故神倭伊波禮毘古命、其地より廻り幸して、熊野村に到てませる時に、大きな熊山より出でて、即ち失せぬ。爾に神倭伊波禮毘古命、倏忽にをえまし、また御軍皆をえて、伏しき。此の時に熊野の高倉下、此者人名、横刀を齎ちて、天神の御子の伏せる地に到て、獻る時に、天神の御子即ち寤起めまして、長寢しつる乎と詔りたまひき。故其の横刀を受け取りたまふ時に、其の熊野山の荒神、自から皆切り仕さえて、其の惑え伏せる御軍、悉に寤起めたりき。故天神の御子、其の横刀を獲つる所由を問ひたまへば、高倉下答へ曰さく、己夢に、天照大神、高木神、二柱の神

の命以ちて、建御雷神を召して詔りたまはく、葦原中國は、いたくさやぎてありけり。我が御子等、不平み坐すらし。其の葦原中國は、専ら汝が言向ける國なれば、汝建御雷神降りてよとのりたまひき。爾に答へ曰さく、僕降らずとも、専ら其の國平けし横刀有れば、降してむ。此の刀の名は、佐土布都神と云ふ。亦の名は、布都御魂と云ふ。亦の名は、布都御魂。此の刀は、石上神宮に坐す。此の刀を降さむ状は、高倉下が倉の頂を穿ちて、其より墮し入れむとまをたまひき。(故建御雷神教曰へたまはく、汝が倉の頂を穿ちて、此の刀を墮し入れむ)故あさめよく汝取り持ちて、天神の御子に獻れとをしへたまひき。故夢の教の如に、且めて己が倉を見しかば、信に横刀有りき。故是の横刀は獻るにこそとまをしき。

是に亦高木大神の命以ちて、覺し白したまはく、天神の御子、此より奥方になり幸しそ。荒神甚と多かり。今天より、八咫鳥を遣せむ。故其の八咫鳥遣引きてむ。其の立たむ後より幸行す。應しとさとしまをたまひき。故其の教覺の隨、其の八咫鳥の後より幸行ししかば、吉野河の河尻に到りましき。時に筥を作ちて、魚取る人有りき。爾に天神の御子、汝は誰ぞと問はしければ、僕は國神、名は贊持之子と答曰しき。此は阿陀の編養の祖。其地より幸行せば、尾生る人、井より出で來。其の井光れり。汝は誰ぞと問はせば、僕は國神、名は氷鹿と答曰しき。此は吉野首等が祖也。即て其の山に入りまししかば、亦尾生る人遇へり。此の人、巖を押し分けて出で來。汝は誰ぞと

問はせば、僕は國神、名は石押分之子、今天神の御子幸行すと聞ける故に、參る向へまつるにこそと答曰しき。此は吉野の國果の祖。其地より踏み穿ち越えて、宇陀に幸しき。故宇陀の穿と曰ふ。故爾に宇陀に、兄宇迦斯弟宇迦斯と二人有りけり。故先づ八咫鳥を遣して、二人に問曰はしめたまはく、今天神の御子幸行せり。汝等仕へ奉らむや。是に兄宇迦斯、鳴鏑を以ちて、其の使を待ち射返しき。故其の鳴鏑の落ちたりし地を、訶夫羅前と謂ふ。待ち撃たむと云ひて、軍を聚めしかども、得聚軍めざりしかば、仕へ奉らむと欺陽りて、大殿を作り、其の殿の内に、押機を作りて、待ちける時に、弟宇迦斯先づ參る向へて、拜みて曰さく、僕が兄兄宇迦斯、天神の御子の使を射返し、待ち攻めむとして、軍を聚むれども、得聚めざれば、殿を作り、其の内に押機を張りて、待ち取らむとす。故參る向へて顯し白すとまをしき。爾に大伴連等が祖、道臣命、久米直等が祖、大久米命二人、兄宇迦斯を召して、罵言りて云ひけらく、いが作り仕へ奉れる大殿の内には、おれ先づ入りて、其の仕へ奉らむとする狀を明し白せといひて、横刀の手上握り、矛ゆけ矢刺して、追ひ入るる時に、己が作りおける押に打たえて死にき。即ち控き出して、斬り散りき。故其地を宇陀の血原となも謂ふ。然して其の弟宇迦斯が獻れる大饗をば、悉に其の御軍に賜ひき。此の時に歌曰みしたまは

宇陀の高城に 鳴わなはる わがまつや 鳴は障らず いすくはし 鯨障る
 前妻が 魚乞はさば たちそばの寶の 長けくを こきしひゑね 後妻が 魚
 乞はさば いちさかき寶の 大けくを こきだひゑね
 ええしやこしや、こはいごのふぞ。ああしやこしや、こは嘲笑ふぞ。故其の弟宇迦斯、此は宇陀の水取等が祖也。

其地より幸行して、忍坂の大家に到りませる時に、尾生る土雲八十建、其の室に在りて、待ちいなる。故爾に天神の御子の命以ちて、八十建に饗を賜ひき。是に八十建に宛てて、八十膳夫を設けて、人毎に刀佩けて、其の膳夫等に、歌を聞かば、一時共に斬れと誨曰へたまひき。故其の土雲を打たむとすることを明かせる歌曰、

忍坂の おほむろやに ひとさはに きいりをり ひとさはに いらをりとも
 みつみつし 久米のこが 頭椎 石椎もち うちてしやまむ みつみつし 久
 米のこらが 頭椎 石椎もち いまうたば善らし
 如此歌ひて、刀を抜きて、一時に打ち殺しつ。
 然後登美毘古を撃ちたまはむとせし時の歌曰、
 みつみつし 久米のこらが 粟生には 臭葦ひと莖 其根が莖 其根芽つなぎ

て うちてしやまむ

又歌曰、

みつみつし 久米のこらが 垣もとに うゑし 藪 口疼く われはわすれじ
うちてしやまむ

又歌曰、

かむかぜの 伊勢のうみの 大石に はひ廻ふ 細螺の い這ひ廻り うちて
しやまむ

又兄師木弟師木を撃ちたまへる時に、御軍暫は疲れたりき。爾の歌曰、

楯並めて 伊那佐のやまの 木のまよも い行きまもらひ たたかへば われ

はや飢ぬ 鳥つとり 鶺鴒がとも いま助にこね

故爾に瀧發速日命、參る赴て、天神の御子に白さく、天神の御子天降り坐しぬと聞きつる故に、追ひて參る降り來つとまをして、即ち天津瑞を獻りて、仕へ奉りき。故瀧發速日命、登美毘古が妹、登美夜毘賣に娶ひて、生める子、宇摩志麻遲命、此は物部連 穗積臣 蘇臣の祖也。故如の此、荒夫琉神等を言向け平和し、伏はぬ人等を退撥げたまひて、敵火の白檮原宮に坐し、まして、天下治しめしき。

故日向に坐しましし時、阿多の小椅君の妹、名は阿比良比賣を娶して、生みませる子、多藝志美美命、次に岐須美美命、二柱坐せり。

然れども更に太后と爲む美人を求ぎたまふ時に、大久米命の曰さく、此間に神の御子なりと謂す媛女有り。其を神の御子なりと謂す所以は、三嶋の湊咋の女、名は勢夜陀多良比賣、其容姿麗美かりければ、美和の大物主神、見感でて、其の美人の、爲大便時に、丹塗矢に化りて、其の爲大便の溝流下より、其の美人のほとを突きたまひき。爾其の美人驚きて、立ち走りいすぎき。乃て其の矢を將來て、床の邊に置きしかば、忽ちに麗しき壯夫に成りて、即ち其の美人に娶ひて、生みませる子、名は富登多多良伊須須岐比賣命、亦の名は比賣多多良伊須氣余理比賣と謂す。是は其の言登と云ふ事を懸みて、後に改へつる名也。故是を以て神の御子とは謂すなりとまをしき。

是に七媛女、高佐土野に遊行べる、伊須氣余理比賣其の中に在りき。大久米命其の伊須氣余理比賣を見て、歌以て天皇に白曰しけらく、

倭の 高佐土野を 七ゆくをとめども たれをし覚かむ

爾に伊須氣余理比賣は、其の媛女等の前に立てりき。天皇其の媛女等を見そなはして、御心に伊須氣余理比賣の最前に立てることを知りたまひて、歌以て答曰へたまはく、

かつがつも 最前だてる 可愛をし覚かむ

爾に大久米命、天皇の命を、其の伊須氣余理比賣に詔れる時に、其の大久米命の黥ける利目を見

て、奇しと思ひて、
あめつつ ちどりましとと など裂ける利目
と歌曰ひければ大久米命、

をとめに 直にあはむと わが裂ける利目

と歌曰ひてぞ答へける。故其の麿子、仕へ奉らむと白しき。是に其の伊須氣余理比賣命の家、狹井河の上に在りき。天皇其の伊須氣余理比賣が幸行して、一宿御寝坐しき。其の河を佐草河と謂ふ由は、其の河の邊に、山由理草多かりき。故其の山由理草の名を取りて、佐草河と號けき。山由理草の木の名佐草と云ひき。後に其の伊須氣余理比賣、宮内に參入る時に、天皇御歌曰みしたまはく、

葦原の 醜き小屋に 昔たみ 彌清敷きて わがふたりねし

然してあれ坐せる御子の名は、日子八井命、次に神八井耳命、次に神沼河耳命。三柱

故天皇崩りまして後に、其の庶兄當藝志美美命、其の嫡后伊須氣余理比賣に娶くる時に、其の三の弟たちを殺せむとして、謀つ間に、其の御祖伊須氣余理比賣患苦ひまして、歌みして、其の御子等に知しめたまへりし、その歌曰、

狹井河よ くもたちわたり 畝火山 木の葉さやぎぬ かぜふかむとす

又歌曰、

畝火山 ひるは雲とみ ゆふされば かぜふかむとぞ 木の葉さやげる

是に其の御子たち聞き知りまして、驚きて、乃ち當藝志美美を殺せむとしたまふ時に、神沼河耳命、其の兄神八井耳命に曰したまはく、なれ汝が命、兵を持ちて入りて、當藝志美美を殺せたまへとまをしたまひき。故兵を持ちて入りて、殺せむとしたまふ時に、手足わなきて得殺せたまはざりき。故爾に其の弟神沼河耳命、其の兄の持たせる兵を乞ひ取りて、入りて、當藝志美美を殺せたまひき。故亦其の御名を稱へて、建沼河耳命とも謂しき。

爾に神八井耳命、弟建沼河耳命に譲りて曰したまはく、吾は、仇を能殺せず。汝が命既に得殺せたまひぬ。故吾は兄なれども、上と爲る宜からず。是を以て汝が命上と爲して、天下治しめせ。僕は、汝が命を扶けて、忌人と爲りて、仕へ奉らむとまをしたまひき。

故其の日子八井命は、茨田連、手順連の祖。

神八井耳命は、意富臣、小子部連、坂合部連、火君、大分君、阿蘇君、筑紫三家連、備部臣、備部造、小長谷造、都御直、伊余國造、科野國造、遠東の石城國造、常道の仲國造、長狭國造、伊勢の船木直、尾張の丹羽臣、嶋田臣等が祖也。

神沼河耳命は、天下治しめしき。

凡て此の神倭伊波禮毘古天皇、御年壹佰參拾陸歲。御陵は畝火山の北の方白檜の尾上に在り。
 神沼河耳命、葛城の高岡宮に坐しまして、天下治しめしき。此の天皇、師木縣主の祖、河俣
 毘賣を娶して、生みませる御子、師木津日子玉手見命。一柱 この天皇、御年肆拾伍歲。御陵は龜
 田岡に在り。

師木津日子玉手見命、片鹽の浮穴宮に坐しまして、天下治しめしき。此の天皇、河俣毘賣の兄、
 縣主殿延の女、阿久斗比賣を娶して、生みませる御子、常根津日子伊呂泥命、次に大倭日子鈕友
 命、次に師木津日子命。

此の天皇の御子等、并せて三柱の中、大倭日子鈕友命は、天下治しめしき。次に師木津日子
 命の子、二王坐せる、一子孫は、伊賀の須知稻置、那斐理之稻置、三野之稻置の祖。一子、知知都美命は、
 淡道之御井宮に坐しき。故此の王、二女有しき。兄の名は鰐伊呂泥、亦の名は意富夜麻登
 久邇阿禮比賣命、弟の名は鰐伊呂杼。

この天皇、御年肆拾玖歲。御陵は畝火山のみほとに在り。
 大倭日子鈕友命、輕の境岡宮に坐しまして、天下治しめしき。此の天皇、師木縣主の祖、賦登
 麻和訶比賣命、亦の名は飯日比賣命を娶して、生みませる御子、御眞津日子訶惠志泥命、次に多
 藝志比古命。二柱

故御眞津日子訶惠志泥命は、天下治しめしき。次に當藝志比古命は、血沼之別、多遲麻之竹別、野井
 之稻置の祖なり。

この天皇、御年肆拾伍歲。御陵は畝火山の眞名子谷の上に在り。

御眞津日子訶惠志泥命、葛城の掖上宮に坐しまして、天下治しめしき。此の天皇、尾張連の祖、
 奥津余曾の妹、名は余曾多本毘賣命を娶して、生みませる御子、天押帶日子命、次に大倭帶日子
 國押人命。二柱

故弟帶日子國忍命は、天下治しめしき。兄天押帶日子命は、春日臣、大宅臣、粟田臣、小野
 臣、柿木臣、壹比賣臣、大坂臣、阿那臣、多紀臣、羽栗臣、知多臣、牟那臣、都怒山臣、伊勢の飯高君、壹師
 君、近淡海國造の祖也。

この天皇、御年玖拾參歲。御陵は掖上の博多山の上に在り。

大倭帶日子國押人命、葛城の室の秋津嶋宮に坐しまして、天下治しめしき。此の天皇、姪
 忍鹿比賣命に娶ひまして、生みませる御子、大吉備諸進命、次に大倭根日子賦斗邇命。二柱 故
 大倭根日子賦斗邇命は、天下治しめしき。この天皇、御年壹佰貳拾參歲。御陵は玉手岡の上に
 在り。

大倭根日子賦斗邇命、黒田廣戸宮に坐しまして、天下治しめしき。此の天皇、十市縣主の

祖、大目の女、名は細比賣命を娶して、生みませる御子、大倭根日子國玖琉命。一柱 又春日の千千速眞若比賣を娶して、生みませる御子、千千速比賣命。一柱 又意富夜麻登玖邇阿禮比賣命に娶ひまして、生みませる御子、夜麻登母曾毘賣命、次に日子刺肩別命、次に比古伊佐勢理毘古命、亦の名は大古備津日子命、次に倭飛羽矢若屋比賣。四柱 又其の阿禮比賣命の弟、鰐伊呂籽に娶ひまして、生みませる御子、日子窟間命、次に若日子建吉備津日子命。二柱 此の天皇の御子等、并せて八柱ませり。男王五、女王三。

故大倭根日子國玖琉命は、天下治しめしき。大古備津日子命と、若建吉備津日子命とは、二柱相副はして、針間の氷河の前に、忌鏡を居ゑて、針間を道口として、吉備國を言向け和したまひき。

故此の大古備津日子命は、吉備の上道、臣の祖也。次に若日子建吉備津日子命は、吉備の下道、臣の祖なり。次に日子窟間命は、針間の牛鹿臣の祖也。次に日子刺肩別命は、高志の利波臣、野國の國前臣、五百原君、角鹿の海、直の祖也。

この天皇、御年壹佰陸歳。御陵は片岡の馬坂の上に在り。

大倭根日子國玖琉命、輕の坂原宮に坐しまして、天下治しめしき。此の天皇、穗都臣等が祖、内色許男命の妹、内色許賣命を娶して、生みませる御子、大毘古命、次に少名日子建猪心命、次

に若倭根日子大毘古命。三柱 又内色許男命の女、伊賀迦色許賣命を娶して、生みませる御子、比古布都押之信命。又河内青玉が女、名は波邇夜須毘賣を娶して、生みませる御子、建波邇夜須毘古命。一柱 此の天皇の御子等、并せて五柱ませり。

故若倭根日子大毘古命は、天下治しめしき。其の兄大毘古命の子、建沼河別命は、阿倍臣等が祖。次に比古伊那許志別命、此は膳、臣の祖也。比古布都押之信命、尾張連等が祖、意富那毘が妹、葛城の高千那毘賣に娶ひて、生みませる子、味師内宿禰、此は山代の内、臣の祖也。又木國造が祖、宇豆比古が妹、山下影日賣に娶ひて、生みませる子、建内宿禰。

此の建内宿禰の子、并せて九。男七、女二。波多八代宿禰は、波多臣、林、臣、波美臣、星川、臣、淡海臣、長谷部君の祖也。次に許勢小柄宿禰は、許勢臣、雀部臣、輕部臣の祖也。次に蘇賀石河宿禰は、蘇我臣、川邊臣、田中臣、高向臣、小治田臣、櫻井臣、岸田臣等の祖也。次に平羣都久宿禰は、平羣臣、佐和良臣、馬御、樺連等の祖也。次に木角宿禰は、木臣、都奴臣、坂本、臣の祖。次に久米能摩伊刀比賣、次に怒能伊呂比賣、次に葛城長江曾都毘古は、玉手臣、的、臣、生江臣、阿蘇那臣等の祖也。又若子宿禰は、江野間臣の祖。

此の天皇、御年伍拾陸歳。御陵は劔池の中岡の上に在り。

若倭根日子大毘古命、春日の伊邪河宮に坐しまして、天下治しめしき。此の天皇、且波の大

縣主、名は由基理が女、竹野比賣を娶して、生みませる御子、比古由牟須美命。一柱 又庶母伊賀
 邊色許賣命に娶ひまして、生みませる御子、御眞木入日子印惠命、次に御眞津比賣命。二柱 又丸
 遷臣の祖、日子國意禰都命の妹、意禰都比賣命を娶して、生みませる御子、日子坐王。一柱 又
 葛城の垂見宿禰の女、鶴比賣を娶して、生みませる御子、建豐波豆羅和氣王。一柱 此の天皇の御
 子等、并せて五柱、男王四、女王一。
 故御眞木入日子印惠命は、天下治しめしき。其の兄比古由牟須美命の子、大筒木垂根王、次
 に讃岐垂根王。二王。此の二王の女五柱、坐しき。
 次に日子坐王、山代の在名津比賣、亦の名は苺崎戸辨に娶ひて、生みませる子、大俣王、次
 に小俣王、次に志夫美宿禰王。三柱 又春日建國勝戸賣が女、名は沙本之大間見戸賣に娶ひて、生
 みませる子、沙本毘古王、次に袁邪本王、次に沙本毘賣命、亦の名は佐波遲比賣、此の沙本毘賣命
 は、伊久米天皇の后と爲せり。次に室毘古王。四柱 又近淡海の御上祝が以ちいつく、天之御影神の女、
 息長水依比賣に娶ひて、生みませる子、丹波比古多須美知能宇斯王、次に水穗之眞若王、次に
 神大根王、亦の名は八瓜入日子王、次に水穗五百依比賣、次に御井津比賣。五柱 又母の弟袁邪都
 比賣命に娶ひて、生みませる子、山代之大筒木直若王、次に比古意須王、次に伊理泥王。三柱 凡
 て日子坐王の子、并せて十五王。

故、兄大俣王の子、暉立王、次に菟上王。二柱 此の暉立王は、伊勢の近邊部君、伊勢の依那造の祖。
 菟上王は、比賣陀耶の祖。次に小俣王は、當麻勾野の祖。次に志夫美宿禰王は、依佐君の祖也。次に沙
 本毘古王は、日下部連、甲斐國造の祖。次に袁邪本王は、葛野之別、近淡海の鞍野之別の祖也。次に
 室毘古王は、若狹の耳、別の祖。其の美知能宇志王、丹波の河上之摩須郎女に娶ひて、生みませる
 子、比婆須比賣命、次に眞砥野比賣命、次に弟比賣命、次に朝廷別王。四柱 此の朝廷別王は、三
 川之種別の祖。此の美知能宇斯王の弟、水穗眞若王は、近淡海の安直の祖。次に神大根王は、三野
 國造、本巢國造、長幡部連の祖。次に山代之大筒木眞若王、同母弟伊理泥王の女、母泥能
 阿治佐波毘賣に娶ひて、生みませる子、迦遲米雷王。此の王、丹波之遠津臣の女、名は高材比賣
 に娶ひて、生みませる子、息長宿禰王。此の王、葛城之高額比賣に娶ひて、生みませる子、息長
 帶比賣命、次に虚空津比賣命、次に息長日子王。三柱 此の王は、吉備の品遲君、針間之阿宗君の祖。又息
 長宿禰王、河俣稻依毘賣に娶ひて、生みませる子、大多牟坂王。此は多遲摩國造の祖也。
 上に謂へる建豐波豆羅和氣王は、道守臣、忍海部造、御名部造、磐羽の忍海部、丹波の竹野別、依繼之
 阿毘古等が祖也。
 この天皇、御年陸拾參歲。御陵は伊邪河の坂の上に在り。
 御眞木入日子印惠命、師木の水垣宮に坐しまして、天下治しめしき。此の天皇、木國造名

は荒河刀辨が女、遠津年魚目目微比賣を娶して、生みませる御子、豐木入日子命、次に豐鉏入日子命、二柱、又尾張連の祖、意富阿麻比賣を娶して、生みませる御子、大入杵命、次に八坂之入日子命、次に沼名木之入日賣命、次に十市之入日賣命、四柱、又大毘古命の女、御眞津比賣命に娶ひまして、生みませる御子、伊玖米入日子伊沙知命、次に伊邪能眞若命、次に國片比賣命、次に千都久和比賣命、次に伊賀比賣命、次に倭日子命、六柱、此の天皇の御子等、并せて十二柱、男王七、女王五、五十五。

故伊久米伊理毘古伊佐知命は、天下治しめしき。次に豐木入日子命は、上毛野(君)、下毛野(君)等が祖也。妹豐鉏比賣命は、伊勢大神の宮を拜き祭りたまひき。次に大入杵命は、能登田の祖也。次に倭日子命、此の王の時に、始めて國に人垣を立てたりき。

此の天皇の御世に、疫病多に起り、人民死せて、盡きなむとす。爾に天皇愁歎ひたまひて、神牀に坐しませる夜、大物主大神、御夢に顯れて曰りたまはく、是は我が御心ぞ。故意富多泥古を以て、我が御前を祭らしめたまはば、神氣起らず、國安平ぎなむとのりたまひき。是を以て、驛使を四方に班ちて、意富多泥古謂ふ人を求むる時に、河内の美努村に、其の人を見得て貢進りき。爾に天皇、汝は誰が子ぞと問ひ賜ひき。僕は大物主大神、陶津耳命の女、活玉依毘賣に娶ひて、生みませる子、名は櫛御方命の子、飯肩集見命の子、建葉櫛命の子、僕意富多泥古と

白しき。是に天皇大く歡びたまひて、天下平ぎ人民榮えなむと詔りたまひて、即ちこの意富多泥古命を、神主と爲て、御諸山に意富美和の大神前を拜き祭りたまひき。又伊迦賀色許男命に仰せて、天の八十毘羅訶を作り、天神地祇の社を定め奉りたまひき。又宇陀の墨坂神に、赤色の楯矛を祭り、又大坂神に、黒色の楯矛を祭り、又坂之御尾神、河瀬神まで、悉に遺忘ること無く、幣帛奉りたまひき。此に因りて役氣、悉に息みて、國家安平ぎき。

此の意富多泥古謂ふ人を、神の子と知れる所以は、上に云へる活玉依毘賣、其容姿端正かりき。是に神壯夫有りて、其の形姿威儀、時に比無きが、夜半之時に、倏忽到來つ。故相感でて、共婚供住之間、幾時も経らねば、其の美人姪身みぬ。爾に父母其の姪身める事を怪みて、其の女に、汝は自から姪めり。夫無きに、何由にしてかも姪身めると問曰へば、答曰へけらく、麗美しき壯夫の、其の姓名も知らぬが、夕毎に到來て、供住める間に、自然から懷姪みぬといふ。是を以て其の父母、其の人を知らまく欲りて、女に誨曰へつらくは、赤土を床の前に散らし、閑蘇紡麻を針に貫きて、其の衣の襷に刺せとをしふ。故教へし如して、且時に見れば、針著けたりし麻は、戸の鈎穴より控き通り出て、唯遺れる麻は、三勾のみなりき。爾即ち鈎穴より出でし狀を知りて、糸の從尋ね行きしかば、美和山に至りて、神社に留りにき。故其の神の子なりとは知りぬ。故其の麻の三勾遺れるに因りてなも、其地を美和とは謂ひける。此の意富多泥古命は、神君、鴨君の

祖なり。
 又此の御世に、大毘古命をば、高志道に遣し、其の子建沼河別命をば、東方十二道に遣して、其のまつろはぬ人等を平け和さしめ、又日子坐王をば、且波國に遣して、玖賀耳之御笠此は人の名也を殺らしめたまひき。
 故大毘古命、高志國へ罷り往ます時に、腰裳服せる少女、山代の幣羅坂に立てりて、歌曰ひけらく、

此はや 御眞木 入日子はや 御眞木 入日子はや おのが緒を ぬすみ殺せ
 むと 後つ戸よ 行ききたがひ 前つ戸よ 行ききたがひ うかがはく 知ら

是に大毘古命怪と思ひて、馬を返して、其の少女に、汝が謂へる言、何にふ言ぞと問曰ひたまへば、少女、吾言はず、唯歌をこそ詠ひつれと答曰へて、所知も見えず、忽に失せにき。
 故大毘古命、更に還り参る上りて、天皇に請す時に、天皇答詔りたまはく、此は爲ふに、山代國なる、汝が庶兄建波邇安王の、雅心を起せる表にこそあらめ。伯父、軍を興して、行かせとのりたまひて、即ち丸邇臣の祖、日子國夫玖命を副へて、遣す時に、丸邇坂に忌免を居て、罷り往ましき。是に山代の和訶羅河に到れる時に、其の建波邇安王、軍を興して待ち遮り、各

河を中に挾きて、對き立ちて相挑みき。故其地の號を、伊杼美と謂ひしを、今は伊豆美とぞ謂ふ。爾に日子國夫玖命、其廂の人先づ忌矢彈と乞ふままに、建波邇安王射つれども、得中でざりき。是に國夫玖命の彈てる矢は、建波邇安王に射あてて、死にき。故其の軍悉に破れて、逃げ散けぬ。爾に其の逃ぐる軍を追ひ迫めて、久須婆之度に到る時に、皆迫めらえ窺みて、屎出でて、禪に懸りき。故其地の號を、屎禪と謂ひしを、今は久須婆とぞ謂ふ。又其の逃ぐる軍を遮りて斬れば、鵜の如河に浮きたりき。故其の河を鵜河と謂ふ。亦其の軍士を斬りはふりし故に、其地の號を、波布理會能ととも謂ふ。如此平け訖へて、参る上りて覆奏したまひき。

故大毘古命は、先の命の隨、高志國に罷り行ましき。爾に東の方より遣けし建沼河別、其の父大毘古と共に、相津に往き遇ひたまひき。故其地を相津と謂ふ。是を以て各遣けつる國の政和平けて、覆奏したまひき。

爾天下太平き、人民富み榮えき。是に初て男の弓端之調、女の手末之調を貢らしめたまひき。故其の御世を稱へまつりて、所知初國之御眞木天皇と謂す。

又是の御世に、依網池を作り、亦輕之酒折池を作らしき。

この天皇、御歲壹佰陸拾捌歲、御陵は山邊道勾之岡の上に在り。
 伊久米伊理毘古伊佐知命、師木の玉垣宮に坐しまして、天下治しめしき。此の天皇、沙本毘古

命の妹、佐波遲比賣命に娶ひまして、生みませる御子、品牟都和氣命。一柱 又且波比古多須美知能宇斯王の女、氷羽州比賣命に娶ひまして、生みませる御子、印色之入日子命、次に大帶日子瀟斯呂和氣命、次に大中津日子命、次に倭比賣命、次に若木入日子命。五柱 又其の氷羽州比賣命の弟、沼羽田之入毘賣命を娶して、生みませる御子、沼帶別命、次に伊賀帶日子命。二柱 又其の沼羽田之入日賣命の弟、阿邪美能伊理毘賣命を娶して、生みませる御子、伊許婆夜和氣命、次に阿邪美都比賣命。二柱 又大筒木垂根王の女、迦具夜比賣命を娶して、生みませる御子、袁邪辨王。一柱 又山代大國之淵が女、菊羽田刀辨を娶して、生みませる御子、落別王、次に五十日帶日子王、次に伊登志別王。又其の大國之淵が女、弟菊羽田刀辨を娶して、生みませる御子、石衝別王、次に石衝毘賣命、亦の名は布多遲能伊理毘賣命。二柱 凡て此の天皇の御子等、十六王。男王十三、女王三。

故大帶日子瀟斯呂和氣命は、天下治しめしき。御身長、一丈二寸、御歴の長、四尺一寸まじき。次に印色入日子命は、血沼池を作り、又狭山池を作り、又日下之高津池を作りたまひき。又鳥取之河上宮に坐しまして、横刀壹仟口を作らしたまひき。是を石上神宮に納め奉りたまひき。即ち其の宮に坐しまして、河上部を定めたまひき。次に大中津日子命は、山邊之別、三枝之別、稻木之別、阿太之別、尾張國の三野別、吉備の石无別、許呂母之別、

高皇產之別、飛鳥君、牟禮之別等の祖也。次に倭比賣命は、伊勢大神宮を拜き祭りたまひき。次に伊許婆夜和氣王は、沙木の穴太部之別の祖也。次に阿邪美都比賣命は、新羅古王に嫁ひまじき。次に落別王は、小月之山君、三川の衣君の祖也。次に五十日帶日子王は、春日山君、高志の池君、春日部君の祖。次に伊登志和氣王は、子まさざるに因りて子代として、伊登志部を定む。次に石衝別王は、羽叶君、三尾君の祖。次に布多遲能伊理毘賣命は、倭建命の后と爲りたまひき。

此の天皇、沙本毘賣を后と爲たまへる時に、沙本毘賣命の兄、沙本毘古王、其の伊呂妹に、夫と兄とは孰か愛しきと問曰へば、兄ぞ愛しきと答曰へたまひき。爾に沙本毘古王謀曰りけらく、汝寔に我を愛しく思ほさば、吾と汝と天下を治りてむとすといひて、即ち八鹽折之紐小刀を作りて、其の妹に授けて、此の小刀以て、天皇の寢ませらむを刺し殺しまつれと曰ふ。故天皇、其の謀を知しめさずて、其の後の御膝を枕きて、御寢坐しき。爾に其の后紐小刀以て、其の天皇之御頸を刺しまつらむとして、三度まで擧りたまひしかども、忍へかてに哀しく情ほして、能刺頸しまつらずて、泣きたまふ涙、御面に落ち溢れき。乃天皇、驚起きまして、其の後に問曰ひたまはく、吾は異き夢見たり。沙本の方より、暴雨零り來て、急に吾が面を治しつ。又錦色なる小蛇、我が頸になも纏繞りし。如此の夢は、何の表にか有らまじとひたまひき。爾に其の后、争はえじと以爲ほして、白天皇言、妾が兄沙本毘古王、妾に、夫と兄とは孰か愛しきと問曰ひた

りき。是く問ふにはえ面勝たずてなも、兄そ愛しきと答曰へつれば、妾に誅曰へけらく、吾と汝と天下を治さむ。故天皇を殺せまつれと云ひて、八麩折之紐小刀を作りて、妾に授けつ。是を以て御頸を刺しまつらむとして、三度まで擧りしかども、哀情忽起、得刺頸しまつらずて、泣きつる涙の落ちて、御面を治しつる。必ず是の表にこそ有らめとまをしたまひき。

爾に天皇、吾は殆に欺かえつる乎と詔りたまひて、乃ち軍を興して、沙本毘古王を擧りにつかはす時に、其の王稻城を作りて、待ち戦ふ。此の時沙本毘賣命、其の兄を忍ほし不得て、後門より逃げ出でて、其の稻城に納りましき。此の時しも、其の後妊身したりき。是に天皇、其の後の、愛み重みしたまふことも三年に至りぬるに懐妊してさへあることを不忍とおもほしき。故其の軍を廻はしめつつ、急げくも攻迫めたまはざりき。如此逗留れる間に、其の妊せりし御子も、産れましぬ。故其の御子を出して、稻城の外に置きまつりて、天皇に白さしめたまはく、若し此の御子をば、天皇の御子と思ほし看さば、治め賜へとまをさしめたまひき。是に天皇、其の兄をこそ怨ひたまへれ、爾后をば不得忍愛とおもほせりければ、得后之心、有しき。是を以て軍士の中に、力士の輕捷きを選り聚へて、宣りたまひつらくは、其の御子を取らむ時、其の母王をも掠ひ取りてよ。或髪或手、取り獲む隨、擲みて控き出でまつれとのりたまひき。爾に其の後豫め其の情を知りたまひて、悉に其の髪を刺りて、その髪以て、頭を覆ひ、亦玉緒を腐し

て、手に三重纏し、且酒以て御衣を腐して、全き衣の如服せり。如此設け備へて、其の御子を抱きて、城の外に刺し出でたまひき。爾其の力士等、其の御子を取りまつりて、即ち其の御祖を握りまつらむと、其の御髪を握れば、御髪自から落ち、其の御手を握れば、玉緒且絶え、其の御衣を握れば、御衣便ち破れぬ。是を以て其の御子を取獲りまつりて、其の御祖をば得とりまつらざりき。故其の軍士等、還りまゐる來て奏言しつらく、御髪自から落ち、御衣且破れ、御手に纏せる玉緒も、絶えにしかば、御祖をば獲まつらず、御子を取り得まつりつとまをす。爾に天皇、悔い恨みたまひて、玉作りし人等を惡まして、其の地を皆奪りたまひき。故諺に、地得ぬ玉作とぞ曰ふなる。

亦天皇、其の後に詔らしめたまはく、凡て子の名は、必ず母なも名くるを、是の子の御名をば何とか稱けむと言らしめたまひき。爾答へ白したまはく、今稻城を焼く時しも、火中に生れませれば、其の御名は、本牟智和氣御子とぞ稱けまつる宜きとまをさしめたまひき。又何に爲て日足し奉らむと詔らしめたまへるに、御母を取り、大湯坐若湯坐を定めて、日足し奉る宜しと答白したまひき。故其の後の白したまひの隨、日足し奉りき。又其の後に、汝の堅めしみづの小佩は誰かも解かむと問曰はしめたまへば、且波比古多須美智能宇斯王の女、名は兄比賣弟比賣、茲の二女王ぞ、淨き公民にませば、使ひたまふ宜しと答白さしめたまひき。然ありて遂に其の

沙本比古王を殺りたまへるに、其の伊呂妹も従ひたまひき。
 故其の御子を率て遊べる状は、尾張の相津なる、二俣楯を、二俣小舟に作りて、持ち上り来て、倭の市師池輕池に浮べて、其の御子を率て遊びき。然るに是の御子、八拳鬚心前に至るまで、眞事とはず。故余に高往く鶴が音を聞かして、始めてあぎとひ爲たまひき。爾山邊の大鶴、此者人名を遣して、其の鳥を取らしめき。故是の人、其の鶴を追ひ尋ねて、木國より、針間國に到り、亦追ひて稻羽國に越え、即ち且波國多遲麻國に到り、東方に追ひ廻りて、近淡海國に到り、乃ち三野國に越え、尾張國より傳ひて、科野國に追ひ、遂に高志國に追ひ到りて、和那美之水門に網を張り、其の鳥を取りて、持ち上りて獻りき。故其の水門を、和那美之水門とは謂ふ也。亦其の鳥を見たまへば、物言はむと思ほして、思ほすが如言ひたまふ事勿かりき。
 是に天皇患ひ賜ひて、御寢ませる時に、御夢に覺曰したまはく、我が宮を、天皇の御舎の如修理りたまはば、御子必ず眞事とはむ。如此覺したまふ時に、ふとまに占相へて、何の神の心ぞと求むるに、爾の祟は、出雲大神の御心なりき。故其の御子をして、其の大神宮を拜ましめに遣りたまはむとする時に、誰人を副はしめば吉けむとくらなふに、曙立王トに食へり。故曙立王に科せて、うけひ白さしむらく、此の大神を拜むに因りて、誠驗有らば、是の鷲巢池の樹に住める鷲や、うけひ落ちよ。如此詔りたまふ時に、其の鷲地に墮ちて死にき。又うけひ活きよ

と詔りたまへば、更に活きぬ。又甜白禰之前なる葉廣熊白禰を、うけひ枯し、亦うけひ生しき。爾其の曙立王に、倭老師木登美豐朝倉曙立王といふ名を賜ひき。即ち曙立王菟上王二王を、其の御子に副へて遣す時に、那良戸よりは、跛盲遇はむ。大坂戸よりも、跛盲遇はむ。唯木戸ぞ腋戸の吉き戸とトへて、出で行かす時に、到り坐す地毎に、品運部を定めき。
 故出雲に到りまして、大神を拜み訖へて、還り上ります時に、肥河の中に、黒櫛橋を作り、假宮を仕へ奉りて坐さしめき。爾に出雲國造の祖、名は岐比佐都美、青葉の山を飭りて、其の河下に立てて、大御食獻らむとする時に、其の御子の詔言りたまひつらく、是の河下に、青葉の山如せるは、山と見えて山には非ず。若し出雲の石砌之會宮に坐す、葦原色許男大神を以ちいつく祝が大廷かと、問ひ賜ひき。爾御伴に遣さえたる王等、聞き歡ひ見喜ひて、御子をば、檜柳の長穗宮に坐せまつりて、驛使を貢上りき。爾に其の御子、一宿肥長比賣に婚ひましき。故其の美人を竊伺たまへば蛇なりき。即ち見畏みて、遁逃げたまひき。爾に其の肥長比賣患みて、海原を光して、船より追ひ來れば、益見畏みて、山のたわより、御船を引き越して、逃げ上り行でましつ。是に覆奏言さく、大神を拜みたまへるに因りて、大御子物詔りたまへるが故に、參り上り來つとまをす。故天皇歡喜ばして、即ち菟上王を返して、神宮を造らしめたまひき。是に天皇其の御子に因りて、鳥取部鳥甘部品運部、大湯坐若湯坐を定めたまひき。

又其の後の白したまひの隨、美知能宇斯王の女等、比婆須比賣命、次に弟比賣命、次に歌羅比賣命、次に圓野比賣命并せて四柱を喚上げたまひき。然るに比婆須比賣命弟比賣命二柱を留めて、其の弟王二柱は、甚と凶醜かりしに因りて、本土に返し送られたまひき。是に圓野比賣、同じき兄弟の中に、姿醜きに以りて、還さゆる事、隣里に聞えむ、甚と慚しと言ひて、山代國の相樂に到りませる時に、樹の枝に取り懸りて、死なむとぞしたまひける。故其地の號を、懸木と謂ひしを、今は相樂と云ふなり。又弟國に到りませる時に、遂に淡き淵に墮ちいりてぞ死せたまひぬる。故其地の號を、墮國と謂ひしを、今は弟國と云ふ也。

又この天皇、三宅連等が祖、名は多遲麻毛理を、常世國に遣して、ときじくのかくの木實を求めしめたまひき。故多遲麻毛理遂に其の國に到りて、其の木實を探りて、緤八緤矛八矛を將來つる間に、天皇は既に崩りましぬ。爾に多遲麻毛理、緤四緤矛四矛を分けて、大后に獻り、緤四緤矛四矛を、天皇の御陵の戸に獻り置きて、其の木實を擧げて、叫び哭びて、常世國のときじくのかくの木實を持ちて參る上りて侍ふと白して、遂に叫哭び死にき。其のときじくのかくの木實といふは、今の橋也。

此の天皇、御年壹佰伍拾參歳。御陵は菅原之御立野の中に在り。又其の大后比婆須比賣命の時、石棺作を定めたまひ、又土師部を定めたまひき。此の後は、狹

木の寺間の陵に葬しまつりき。

大帶日子淤斯呂和氣天皇、繼向の日代宮に坐しまして、天下治しめしき。此の天皇、吉備臣等が祖、若建吉備津日子の女、名は針間之伊那能大郎女に娶ひまして、生みませる御子、櫛角別王、次に大碓命、次に小碓命、亦の名は倭男具那命、次に倭根子命、次に神櫛王。五柱 又八尺入日子命の女、八坂之入日賣命に娶ひまして、生みませる御子、若帶日子命、次に五百木之入日子命、次に押別命、次に五百木之入日賣命。又の妾の子、豐戸別王、次に沼代郎女、又の妾の子、沼名木郎女、次に香余理比賣命、次に若木之入日子王、次に吉備之兄日子王、次に高木比賣命、次に弟比賣命。又日向の美波迦斯毘賣を娶して、生みませる御子、豐國別王、又伊那能大郎女の弟、伊那能若郎女を娶して、生みませる御子、眞若王、次に日子人之大兄王、又倭建命の曾孫、名は須賣伊呂大日子王の女、詞具漏比賣を娶して、生みませる御子、大枝王。

凡て此の大帶日子天皇の御子等、所錄 廿一王、入記さざる五十九王、并せて八十王ませる中に、若帶日子命と倭建命、亦五百木之入日子命と、此の三王ぞ、太子とまをす名を負はして、其より餘 七十七王、たちは、悉に國國の國造、亦和氣稻置縣主に別け賜ひき。

故若帶日子命は、天下治しめしき。小碓命は、東西の荒神、伏はぬ人等を平けたまひき、次に櫛角別王は、茨田下連等が祖、次に大碓命は、守君、大田君、嶋田君の祖、次に神櫛王は、木國

酒部阿比古、宇陀酒部の祖、次に豊國別王は、日向國造の祖。
 是に天皇、三野國造の祖、神大根王の女、名は兄比賣弟比賣、二嬪子、其容姿麗美を聞し看
 し定めて、其の御子大碓命を遣して、喚上げたまふ。故其の遣さえたる大碓命、召上げずて、
 己と自ら其の二嬪子に婚けて、更に他女人を求めて、其の嬪女と詐名して貢上りき。是に天皇
 其他女なることを知しめして、恒に長眼を經しめ、亦婚しもせずて、惚はしめたまひき。故其
 の大碓命、兄比賣に娶ひて生みませる子、押黒之兄日子王、此は三野之宇泥須和氣の祖、亦弟比賣に娶
 ひて生みませる子、押黒弟日子王、此は亦宜都君等が祖なり。
 此の御世に、田部を定めたまひ、又東の淡水門を定めたまひ、又膳之大伴部を定めたまひ、又
 倭の屯家を定めたまひ、又坂手池を作りて、其の堤に竹を植ゑしめたまひき。
 天皇、小碓命に詔りたまはく、何とかも汝の兄朝夕の大御食に參る出來ざる。専ら汝ねぎ
 教へ覺せとのりたまひき。如此詔りたまひて以後、五日といふまでに、猶參る出たまはざりき。
 爾、天皇、小碓命に問ひ賜はく、何ぞ汝の兄久しく參る出ざる。若し未だ誨へず有りやとひた
 まへば、既にねぎつと答白したまひき。又如何にかねぎつると詔りたまへば、答白したまはく、
 朝署に廁に入りたりし時、持捕へて搦み批ぎて、其の枝を引き闕きて、薦に裏みて投げ棄てつと
 ぞまをしたまひける。

是に天皇、其の御子の建く荒き情を惶まして、詔りたまはく、西方に熊曾建二人有り。是伏は
 ず禮无き人等なり。故其の人等を取れとのりたまひて遣しき。此の時に當りて、其の御髮額に
 結はせり。爾に小碓命、其の姨倭比賣命の御衣御裳を給はり、劍を御懐に納れて幸行しき。故熊
 曾建が家に到りて見たまへば、其の家の邊に軍三重に圍み、室を作りてぞ居りける。是に新室樂
 爲、言ひ動みて、食物を設け備へたりき。故其の傍を遊行きて、其の樂する日を待ちたまひき。
 爾に其の樂の日に臨りて、其の結はせる御髮を童女の髮の如梳り垂れ、其の姨の御衣御裳を服し
 て、既に童女の姿に成りて、女人の中に交り立ちて、其の室内に入り坐しき。爾に熊曾建兄弟二
 人、其の嬪子を見感て、己が中に坐せて、盛りに樂けたり。故其の酣なる時に、懐より劍を
 出し、熊曾が衣の衿を取りて、劍以て其の胸より刺し通したまふ時に、其の弟建、見畏みて逃げ
 出でき。乃ち其の室の椅の本に追ひ至りて、其の背を取へ、劍以て、尻より刺し通したまひき。
 爾に其の熊曾建白言しつらく、其の刀をな動かしたまひそ。僕白言すべきこと有りたまをす。爾
 暫し許して、押伏せたまふ。是に白言しつらく、汝が命は誰にますぞ。吾は嚮向の日代宮に坐し
 まして、大八嶋國知しめす、大帶日子滌斯呂和氣天皇の御子、名は倭男具那王にます。おれ熊曾
 建二人、伏はず禮無しと聞し看して、おれを取殺れと詔りたまひて遣せりと詔りたまひき。爾に
 其の熊曾建、信に然かまさむ。西方に、吾二人を除きて、建く強き人無し。然るに大倭國に、吾

二人に益して、建き男は坐しけり。是を以て吾御名を獻らむ。今より以後倭建御子と稱へまをす
應しと白しき。是の事白し訖へつれば、即ち熟炊の如振り拆きて、殺したまひき。故其の時より
ぞ御名を稱へて、倭建命とは謂しける。然して還り上ります時に、山神河神、また穴戸神を、
皆言向け和して、參の上りましき。

即ち出雲國に入り坐して、其の出雲建を殺らむと欲ほして、到りまして即ち結友したまひき。
故竊に赤橋以て、刀に作り詐して、御佩かして、共に肥河に沐したまひき。爾に倭建命、河
より先づ上りまして、出雲建が解き置ける横刀を取り佩かして、易刀爲むと詔りたまふ。故後に
出雲建河より上りて、倭建命の詐刀を佩きき。是に倭建命、いざ刀合さむと詔云へたまふ。
爾各其の刀を抜く時に、出雲建詐刀を得抜かず。即ち倭建命其の刀を抜きて、出雲建を打ち
殺したまひき。爾御歌曰みしたまはく、

やつめさす 出雲建が 佩けるたち つづら多纏き 眞身なしにあはれ
故如此撥ひ治けて、參の上りて、覆奏したまひき。

爾に天皇亦頻きて倭建命に、東方十二道の荒夫琉神、またまつろはぬ人等を言向け和平
せと詔りたまひて、吉備臣等が祖、名は御鉏友耳建日子を副へて、遣す時に、比比羅木之八尋矛
を給ひき。故命を受けたまはりて、罷り行てます時に、伊勢大御神宮に參入りまして、神の朝廷

を拜みたまひて、其の娵倭比賣命に白したまへらくは、天皇既吾を死ねとや所思はすらむ。
何なれか西方の悪人等を撃りに遣して、返り參る上り來し間、幾時も経らねば、軍衆をも賜は
ずて、今更に東方十二道の悪人等を平けには遣すらむ。此に因りて思惟へば、猶吾既く死
ねと所思ほし看すなりけりとまをして、患ひ泣きて罷ります時に、倭比賣命、草那藝劍を賜ひ、
亦御囊を賜ひて、若し急事有らば、茲の囊の口を解きたまへとなも詔りたまひける。

故尾張國に到りまして、尾張國造の祖、美夜受比賣の家に入り坐しき。乃ち婚さむと思ほし
しかども、亦還り上りたらむ時にこそ婚さめと思ほして、期り定きて、東國に幸して、山河の
荒神、また伏はぬ人等を悉に言向け和平したまひき。故爾に相武國に到りませる時に、其の國
造詐り白さく、此の野の中に、大沼有り。是の沼の中に住める神、甚く道連振神也とまをす。
是に其の神を看行に、其の野に入り坐しつれば、其の國造、其の野に火をなも著けたりける。
故欺かえぬと知しめして、其の娵倭比賣命の給へる囊の口を解き開けて見たまへば、其の裏に火
打ぞ有りける。是に先づ其の御刀以て草を刈り撥ひ、其の火打を以ちて、火を打ち出で、向火を
著けて、焼き退けて、還り出でまして、其の國造等を皆切り滅し、即ち火を著けて焼きたまひ
き。故(其地をば)、今に燒遣とぞ謂ふ。

其より入り幸して、走水海を渡ります時に、其の渡の神浪を興て、船廻ひて、得進み渡りま

さず。爾に其の后名は弟橋比賣命白したまはく、妾御子に易りて海中に入りなむ。御子は、所遣の政遂げて覆奏したまふ應しとまをして、海に入りまさむとする時に、昔疊八重、皮疊八重、繩疊八重を、波の上に敷きて、其の上に下り坐しき。是に其の暴浪自から伏きて、御船得進みき。爾其の後の歌曰はせるみうた、

さねさし 相模の小野に もゆるひの 火中にたちて とひしきみはも
 故七日ありて後に、其の後の御櫛、海邊に依りたりき。乃ち其の櫛を取りて、御陵を作りて、治め置きき。

其より入り幸して、悉に荒夫琉蝦夷等を言向け、亦山河の荒神等を平和して、還り上り幸す時に、足柄の坂本に到りまして、御糧食す處に、其の坂神、白き鹿に化りて來立ちき。爾其の咋し遣りの蒜の片端以て、待ち打ちたまひしかば、其の目に中りて、打ち殺さえたりき。故其の坂に登り立ちて、三敷して、あづまはやと詔云りたまひき。故其の國を阿豆麻とは謂ふ也。即ち其の國より越えて、甲斐に出でて、酒折宮に坐しましける時に、歌曰ひたまはく、

にひばり 筑波をすぎて いくよか宿つる
 爾に其の御火燒の老人、御歌を續きて、
 日々並べて よには九夜 ひにはとをかを

とぞ歌曰ひける。是を以て其の老人を譽めて、東の國造にぞ給したまひける。
 其の國より科野國に越えまして、科野之坂神を言向けて、尾張國に還り來まして、先日二期りおかしし美夜受比賣の許に入り坐しつ。是に大御食獻る時に、其の美夜受比賣、大御酒盞を捧げて獻る。爾に美夜受比賣、其おすひの櫛に月經著きたり。故其を見そなはして、御歌曰みしたまはく、

ひさかたの 天の香山 利鎌に さ渡る杖 弱細 手弱腕を 枕かむとは あ
 れはすれど さ寝むとは あれはおもへど なが服せる 襲のすそに 月たち

にけり
 爾美夜受比賣、御歌に答へて曰ひけらく、

高ひかる ひのみこ やすみしし わがおほきみ あらたまの としが來經れ
 ば あらたまの つきは來經ゆく うべなうべな きみ待ちがたに わが服せ
 る 襲のすそに 月たたなむよ

故爾に御合ひまして、其の御刀の草那藝劍を、其の美夜受比賣の許に置きて、伊服岐能山之神を取りに幸行しき。
 是に詔りたまはく、茲の山神は、徒手に直に取りてむとのりたまひて、其の山に騰ります時に、

山邊に白き猪逢へり。其の大きき牛の如くなりき。爾言舉爲て詔りたまはく、是の白き猪に化れる者は、其の神の使者にこそあらめ。今殺らずとも、還らむ時に殺りてむとのりたまひて、騰り坐しき。是に大水雨を零らして、倭建命を打ち惑しまつりき。此の白き猪に化れる者は、其の神の使者には非ずて、其の神の正身にぞ當りけむを、言駈したまへるに因りて、恐さえたまへる也。故還り下り坐して、玉倉部の清泉に到りて、息ひ坐せる時に、御心稍痛めましき。故其の清泉を、居籍清泉とぞ謂ふ。其處より發して、當藝野の上に到りましし時に、詔りたまへるは、吾が心恒は慮よりも翔り行かむと念ひつるを、今吾が足得歩まず。たぎしの形に成れりとぞのりたまひける。故其地を、當藝と謂ふ。其地より、差少し幸行すに、甚く疲れませるに因りて、御杖を衝かして、稍に歩みまじき。故其地を、杖衝坂と謂ふ。尾津前の一松の許に到り坐せるに、先に御食せし時、其地に忘らしたりし御刀、失せず猶有りき。爾御歌曰みたまはく、

尾張に 直にむかへる 尾津の崎なる 一つ松吾兄を 一つ松 ひとにありせ
 ば 大刀はけましを きぬきせましを 一つ松吾兄を

其地より幸して、三重村に到りませる時に、亦吾が足、三重の勾如して甚く疲れたりと詔りたまひき。故其地を、三重と謂ふ。

其より幸行して、能煩野に到りませる時に、國思はして歌曰ひたまはく、

倭は くにのまほろば たたなづく あをかきやま ごもれる 倭し うるは

又歌曰、

いのちの 全けむひとは たたみこも 平群のやまの 隱白壽が葉を 鬢華に

此の歌は、思國歌也。又歌曰ひたまはく、

はしけやし 吾家のかたよ 雲居たちくも

此は片歌也。此の時御病甚急 爾に御歌曰を、

をとめの とこのべに わがおきし つるぎの大刀 その大刀はや
 と歌ひ竟へて即ち崩りましぬ。爾驛使を貢上りき。

是に倭に坐す后等、また御子等 諸、下り到まして、御陵を作りて、其地的那豆岐田に匍匐ひ
 廻りて、哭かしたつ歌曰ひたまはく、

なつきの 田の稻幹に 稻幹に はひ廻ろふ 藤葛

是に入尋白智鳥に化りて、天に翔りて、濱に向きて飛び行ましぬ。爾其の後及御子等、其の小
 竹の刈杖に、足跡り破るれども、其の痛をも忘れて、哭追ひいでましき。此の時の歌曰、

淺小竹はら 腰なづむ そらはゆかず あしよゆくな
又其の海鹽に入りて、なづみ行きましし時の歌曰、

うみがゆけば 腰なづむおほかはらの 植草 うみがは いさよふ
又飛びて、其の磯に居たまへる時の歌曰、

はまつちどり はまよはゆかず いそつたふ

是の四歌は、皆其の御葬に歌ひたりき。故今に其の歌は、天皇の大御葬に歌ふ也。

故其の國より、飛び翔り行まして、河内國の志幾に留りましき。故其地に御陵を作りて、鎮り坐
さしめき。其の御陵を、白鳥御陵とぞ謂ふ。然れども亦其地より更に天翔りて、飛び行ましぬ。
凡て此の倭建命、國平けに廻行りましし時、久米直の祖名は七拳脛、恒も膳夫として、從仕
へ奉りき。

此の倭建命、伊弉米天皇の女、布多運能伊理毘賣命に娶ひまして、御子帶中津日子命を生み
ましき。一柱 又其の海に入りましし弟橋比賣命に娶ひまして、生みませる御子、若建王。一柱
又近淡海の安國造の祖、意富多牟和氣が女、布多運比賣を娶して、生みませる御子、稻依別
王。一柱 又吉備臣建日子の妹、大吉備建比賣を娶して、生みませる御子、建貝兒王。一柱 又山代
の玖玖麻毛理比賣を娶して、生みませる御子、足鏡別王。一柱 又一妻のうめる子、息長田別王。

凡て是の倭建命の御子等、并せて六柱ませり。
故帶中津日子命は、天下治しめしき。次に稻依別王は、大上君、建部君等が祖。次に建貝兒王は、
廣敷の君、伊豫の別、登賣之別、麻佐首、宮道之別等が祖。足鏡別王は、鎌倉之別、小津、石代之別、
漁田之別の祖也。

次に息長田別王の子、杵俣長日子王。此の王の子、飯野眞黒比賣命、次に息長眞若中比賣、次
に弟比賣。三柱

故上に云へる若建王、飯野眞黒比賣に娶ひて、生みませる子、須賣伊呂大中日子王。此の王、
淡海の柴野入杵が女、柴野比賣に娶ひて、生みませる子、迦具漏比賣命。故大帶日子天皇、此
の迦具漏比賣命を娶して、子大江王を生みましき。一柱 此の王、庶妹銀王に娶ひて、生みませ
る子、大名方王、次に大中比賣命。二柱 故此の大中比賣命は、香坂王忍熊王の御祖にます。

此の大帶日子天皇の御年、壹佰參拾陸歳。御陵は山邊之道の上に在り。
若帶日子天皇、近淡海の志賀の高穴穗宮に坐しまして、天下治しめしき。此の天皇、穗積臣
等が祖、建忍山垂根の女、名は弟財郎女を娶して、生みませる御子、和詞奴氣王。一柱

故建内宿禰を大臣と爲たまひ、大國小國の國造を定め賜ひ、亦國國の堺、また大縣小縣の
縣主を定め賜ひき。

この天皇、御年、玖拾伍歳。御陵は沙紀の多他那美に在り。
 帶中日子天皇、穴門の豐浦宮また筑紫の訶志比宮に坐しまして、天下治しめしき。此の天皇、
 大江王の女、大中津比賣命に娶ひまして、生みませる御子、香坂王、忍熊王。二柱。又息長帶比賣
 命に娶ひましき。是の太后の生みませる御子、品夜和氣命、次に大柄和氣命、亦の名は品陀和氣
 命。二柱。此の太子の御名、大柄和氣命と負せる所以は、初め生れませる時に、御腕に軛如せる穴
 生りし故に、其の御名に著けまつりき。是を以て腹中に坐しまして國(定め)たまへりしこと知ら
 えたり。

此の御世に、淡道の屯家を定めたまひき。

其の太后息長帶日賣命は、當時神歸りたまへりき。故天皇筑紫の訶志比宮に坐しまして、熊
 曾國を撃けたまはむとせし時に、天皇御琴を控かして、建内宿禰大臣、沙庭に居て、神の命を
 請ひまつりき。是に太后歸神して、言教へ覺詔したまひつらくは、西方に國有り。金銀を本め
 て、目の炎耀く種種の珍寶、其の國に多なるを、吾今其の國を歸せ賜はむとのりたまひき。爾に
 天皇答へ白したまはく、高き地に登りて、西方を見れば、國土は見えず、唯大海のみこそ有
 れとまをして、詐爲す神と謂はして、御琴を押し退けて、控きたまはず、默坐しぬ。爾其の神大
 く怒らして、凡茲の天下は、汝の知す應き國に非ず。汝は一道に向ひませと詔りたまひき。是

に建内宿禰大臣白しけらく、恐し我が天皇、猶其の大御奉あそばせとまをしき。爾稍其の御琴を
 取り依せて、なまなまに控き坐しけるに、幾久もあらずて、御琴の音聞えずなりぬ。即火を舉げ
 て見まつれば、既く崩りましきにき。

爾驚き懼みて、殯宮に坐せまつりて、更に國の大ぬさを取りて、生剝逆剝、阿離溝埋尿戸、
 上通下通婚、馬婚、牛婚、鶏婚、犬婚の罪の類を種種求きて、國の大赦爲て、亦建内宿禰沙庭に
 居て、神の命を請ひまつりき。是に教へ覺したまふ狀、具に先日之の如くにて、凡此の國は、汝
 が命の御腹に坐す御子の知さむ國なりとをしへさしたまひき。

爾建内宿禰、恐し我が大神、其の神の腹に坐す御子い、何の子ぞもと白せば、男子ぞと答詔り
 たまひき。爾具に請ひまつりけらく、今如此言教へたまふ大神は、其の御名を知らまく欲しとま
 をせば、答詔へたまひつらく、是は天照大神の御心なり。亦底筒男中筒男上筒男、三柱の大神
 也。此の時にぞ其の三柱の大神の御名は顯れたまへる。今寔に其の國を求めむと思はさば、天神地祇、亦
 山神河海の諸神に、悉に幣帛奉り、我が御魂を船の上に坐せて、眞木の灰を瓊に納れ、亦箸
 とひらでを多に作りて、皆皆大海に散らし浮けて、度ります可しとのりたまひき。

故備に教へ覺したまへる如くして、軍を整へ、船を雙めて、度り幸す時に、海原の魚ども、
 不問大小、悉に御船を負ひて渡りき。爾に順風大に起きて、御船浪の從ゆきつ。故其の御船の

波瀾、新羅之國に押し騰りて、既に半國まで到りき。是に其の國主長ち惶みて奏言しけらく、今より以後、天皇の命の隨、御馬甘として、毎年に船變めて、船腹乾さず、船機乾さず、天地の共與、無退に仕へ奉らむとまをしき。故是を以て新羅國をば、御馬甘と定めたまひ、百濟國をば、渡屯家と定めたまひき。爾に其の御杖を、新羅國主の門に衝き立てたまひき。即ち墨江大神の荒御魂を、國守ります神と、鎮め祭りて、還り渡りましき。

故其の政未だ竟へたまはざる間に、懷妊せるみこ産れまさむとしつ。即御腹を鎮ひたまはむ爲に、石を取らして、御裳の腰に纏かして、筑紫國に渡りきましてぞ、其の御子はあれ坐しける。故其の御子生みたまへる地を、宇美とぞ謂けける。亦其の御裳に纏かせりし石は、筑紫國の伊斗村になも在る。

亦筑紫の末羅縣の玉嶋里に到り坐して、其の河邊に御食せず時しも、四月の月上旬なりしかば、其の河中の磯に坐して、御裳の糸を抜き取り、飯粒を餌に爲て、其の河の年魚をなも釣らしける。其の河の名を、小河と謂ふ。亦其の磯の名を、藤門比賣と謂ふ。故四月の月上旬の時、女人ども裳の糸を抜き、粒を餌に爲て、年魚釣ること、今に絶えず。

是に息長帶日賣命、倭に還り上ります時に、人の心疑はしきに因りて、喪船を一つ具へて、御子を其の喪船に載せまつりて、先づ御子は既に崩りましぬと言ひ漏らさしめたまひき。如此し

て上り幸す時に、香坂王、忍熊王聞きて、待ち取らむと思ほして、斗賀野に進み出で、宇氣比爲爲たまひき。爾に香坂王、歷木に騰り坐して見たまふに、大きな怒猪出でて、其の歷木を廻りて、即ち其の香坂王を喰ひつ。其の弟、忍熊王、其の態をも畏まずて、軍を興し待ち向へたまふ時に、喪船に赴ひて、空船を攻めたまはむとす。爾其の喪船より、軍を下して相戦ひき。此の時忍熊王は、難波の吉師部の祖、伊佐比宿禰を、將軍と爲たまひ、太子の御方には、丸瀬臣の祖、難波根子建振熊命をぞ、將軍と爲たまひける。故追ひ退けて、山代に到れる時に、還り立ちて、各退かず、相戦ひき。爾に建振熊命、權りて、息長帶日賣命は、既に崩りましぬれば、更に戦ふ可きこと無しと云はしめて、弓絃を絶ちて、欺陽りて歸服ひぬ。是に其の將軍、既に詐を信みて、弓を弭し、兵を藏めてき。爾に頂髪の中より、設けたる弦一名云宇佐由豆留を採り出で、更に張りて、追ひ撃ちき。故逢坂に逃げ退きて、對立ちて亦戦ひけるを、追ひ迫め敗りて、沙沙那美に出でてなも、悉に其の軍を斬りける。是に其の忍熊王、伊佐比宿禰と、共に追ひ迫めらえて、船に乗り海に浮びて、歌曰ひたまはく、

いざ吾君 振熊が 痛手おはずは にはどりの 淡海のうみに 潜させな吾
 とうたひて即ち海に入りて、共に死せたまひぬ。

故建内宿禰命、其の太子を率てまつりて、誤せむとして、淡海また若狹國を經歷し時に、高

志前の角鹿に、假宮を造りて坐せまつりき。爾其地に坐す、伊弉沙和氣大神之命、夜の夢に見えて、吾が名を、御子の御名に易へまく欲しと云りたまひき。爾言禮きて、恐し、命の隨易へ奉らむと白しき。亦其の神詔りたまはく、明日の旦、濱に幸す應し。易名の幣、獻らむとのりたまひき。故其旦、濱に幸行せる時に、鼻毀れたる入鹿魚、既に一浦に依れり。是に御子、神に白さしめたまはく、我に御食の魚給へりと云さしめたまひき。故亦其の御名を稱へて、御食津大神と號す。故今に氣比大神とも謂す。亦其の入鹿魚の鼻の血鼻かりき。故其の浦を血浦と謂ひしを、今は都奴賀とぞ謂ふなる。

是に還り上り坐せる時に、其の御祖息長帶日賣命、待酒を醸みて、獻らしき。爾其の御祖の御歌曰、

このみきは わがみきならず 酒のかみ とこよにいます 石たたす 少名御
神の 神壽 ほぎくるほし 豐壽 ほぎもとほし 獻りこし みきぞ 乾さず
飲せささ

如此歌はして、大御酒 獻らしき。爾に建内宿禰命、御子の爲に答へまつれる歌曰、
このみきを 醸みけむひとは その鼓 白にたてて うたひつつ 醸みけれか
も まひつつ 醸みけれかも このみきの みきの あやに 轉樂しささ

此は酒樂の歌也。

凡てこの帶中津日子天皇の御年、伍拾貳歲。御陵は河内の惠賀之長江に在り。

品陀和氣命、輕嶋の明宮に坐しまして、天下治しめしき。此の天皇、品陀眞若王の女、三柱の女王に娶ひませる。一の名は、高木之入日賣命、次に中日賣命、次に弟日賣命。此の女王等の父、品陀眞若王は、五百木之入日子命、尾張連の祖、建伊那陀宿禰の女、志理都紀日賣に娶ひて、生みませる子也。故高木之入日賣命の御子、額田大中日子命、次に大山守命、次に伊奢之眞若命、次に妹大原郎女、次に高目郎女。五柱 中日賣命の御子、木之荒田郎女、次に大雀命、次に根鳥命。三柱 弟日賣命の御子、阿倍郎女、次に阿具知能三腹郎女、次に木之菟野郎女、次に三野郎女。五柱 又丸邇之比布禮能意富美の女、名は宮主矢河枝比賣を娶して、生みませる御子、宇遲能和紀郎子、次に妹八田若郎女、次に女鳥王。三柱 又其の矢河枝比賣の弟袁那辨郎女を娶して、生みませる御子、宇遲之若郎女。一柱 又昨候長日子王の女、息長眞若中比賣を娶して、生みませる御子、若沼毛二候王。一柱 又櫻井田部連の祖、嶋垂根の女、糸井比賣を娶して、生みませる御子、連總別命。一柱 又日向之泉長比賣を娶して、生みませる御子、大羽江王、次に小羽江王、次に幡日之若郎女。三柱 又迦具瀨比賣を娶して、生みませる御子、川原田郎女、次に玉郎女、次に忍坂大中比賣、次に登富志郎女、次に迦多遲王。五柱 又葛城之野伊呂賣を娶して、生みませる御子、伊奢能麻和迦王。一柱

此の天皇の御子等、并せて廿六王。男王十一、女王十五。此の中に大雀命は、天下治しめしき。

是に天皇、大山守命と大雀命とに、汝等は、兄子と弟子と孰か愛しきと問はしたまひき。天皇の是く發問はしける所以は、宇遲能和紀郎子に、天下治しめさしめむの心、有しつれば也。爾に大山守命、兄子ぞ愛しきと白したまひき。次に大雀命は、天皇の間はし賜ふ大御情を知して白したまはく、兄子は、既に成人りつれば、愷きこと無きを、弟子はぞ、未成人ければ愛しきとまをしたまひき。爾に天皇詔りたまはく、さざきあぎの言ぞ、我が所思はすが如くなるとのりたまひて、即ち詔り別けたまへらくは、大山守命は、山海の政を爲したまへ。大雀命は、食國の政執り以ちて白し賜へ。宇遲能和紀郎子は、天津日繼知せとのりわけたまひき。故大雀命は、天皇の命に違ひまつらざりき。

一時、天皇、近淡海國に越え幸す時、宇遲野の上に御立たして、葛野を望けまして、歌曰はしけらく、

千葉の葛野をみれば、ももちたる家庭もみゆ、くにのほもみゆ、故木幡村に到り坐せる時に、其の道備に麗美嬢子遇へり。爾に天皇其の嬢子に、汝は誰が子ぞと問曰はしければ、答へ白さく、丸遷之比布禮能意富美が女名は宮主矢河枝比賣とまをしき。天

皇其の嬢子に、吾明日還幸さむ時、汝の家に入坐さむと詔りたまひき。故矢河枝比賣其の父に委曲に語りき。是に父が答曰ひけらく、是は天皇に坐しけり。恐し、我が子仕へ奉れと云ひて、其の家を厳しく飭りて、候ひ待てば、明日入り坐しぬ。故大御饗を獻る時に、其の女矢河枝比賣に大御酒盞を取らしめて獻りき。是に天皇、其の大御酒盞を取らしめながら御歌曰みしたまはく、

この蟹や、いづくの蟹、ももつたふ、角鹿の蟹、よこ去らふ、いづくにいたる、伊知運島、美島にとき、みほどりの、潜きいきづき、しなだゆふ、ささなみ路を、すくすくと、わがいませばや、木幡のみに、あはししをとめ、後方は、小楯ろかも、齒並喙、菱なす、櫟井の、丸遷坂の土を、初土は、はだあからけみ、底土は、土ぐろきゆゑ、三栗の、そのなかつ土を、頭つく、まひにはあてず、眉畫き濃にかきたれ、あはししをみな、彼もがと、わがみし子ら、此もがと、あがみし子に、轉宴に、むかひをるかも、い添ひをるかも。

如此御合まして生みませる御子ぞ、宇遲能和紀郎子にましける。天皇、日向國の諸縣君の女名は髮長比賣、其顔容麗美と聞し看して、使ひたまはむとして、喚上げたまふ時に、其の太子大雀命、其の嬢子の難波津に泊てたるを見たまひて、其の姿容之端正

に感でたまひて、即ち建内宿禰大臣に誂告へたまはく、是の日向より喚上げたまへる髪長比賣をば、天皇の大御所に請ひ白して、吾に賜はしめよとのりたまひき。爾建内宿禰大臣大命を請ひしかば、天皇即ち髪長比賣を其の御子に賜ひき。賜へる状は、天皇豊明開し看す日、髪長比賣に大御酒の柏を握らしめて、其の太子に賜ひき。爾に御歌曰みしたまはく、

いざ子ども 野蒜つみに 蒜つみに わがゆくみちの かぐはし はなたちば
 なは 上枝は 鳥の枯らし 下枝は ひとり枯らし 三粟の 中つ枝の ほ
 つもり あからをとめを いざささば よらしな

又御歌曰、

みづたまる 依網のいけの 振杖うち (ひし)が(らの) 刺しける知らに 尊
 くり 延へけく知らに わがこころし いやをこにして いまぞくやしき
 如此歌はして賜ひき。故其の嬪子を賜はりて後に、太子の歌曰みたまへる、
 みちの後 こはだをとめを かみのごと きこえしかども あひ杖纏く

又歌曰、

みちの後 こはだをとめは あらそはず 寝しくをしども うるはしみおもふ
 又吉野の國主等、大雀命の佩かせる御刀を贈て歌曰ひけらく、

品陀の ひのみこ 大雀 大雀 はかせる大刀 もとつるぎ すゑふゆ ふゆ
 木如す からが下樹の さやさや
 又吉野の白鸚生に横白を作りて、其の横白に大御酒を醸みて、其の大御酒を獻る時に、口鼓を撃ち伎を爲して、歌曰ひけらく、

白鸚の生に 横白をつくり 横白に 醸みし大御酒 甘らに きこしもち飲
 せ まろがち

此の歌は、國主等大贊獻る時時恒に、今に至るまで詠ふ歌也。

此の御世に海部山部山守部伊勢部を定め賜ふ。亦劍池を作る。亦新羅人參の渡り來つ。是を以て 建内宿禰命引き率て堤池に役たせて、百濟池を作る。

亦百濟國主照古王、牡馬壹走牝馬壹疋を、阿知吉師に付けて貢上りき。此の阿知吉師は、阿直良等が祖。亦横刀と大鏡とを貢上りき。又百濟國に、若し賢人有らば貢上れと科せ賜ふ。故命を受けて貢上れる人名は和邇吉師。即ち論語十卷千字文一卷并せて十一卷を、是の人に付けて貢進りき。此の和邇吉師は、文首等が祖。又手人韓鍛名は卓素亦吳服西素二人を貢上りき。

又秦造之祖 漢直之祖、また酒を醸むことを知る人名は仁番亦の名は須須許理等、參る渡り來つ。

故是の須須許理大御酒を醸みて獻りき。是に天皇是の獻れる大御酒にうらげて御歌曰はしけらく、

須須許理が 醸みし御酒に われゑひにけり 事酒 吹酒に われゑひにけ

如此歌はしつ幸行せる時に、御杖以ちて大坂の道の中なる大石を打ちたまひしかば、其の石走り避りぬ。故諺に堅石も醉人を避くるとぞ曰ふなる。

故天皇崩りまして後に、大雀命は、天皇之命の從、天下を宇遲能和紀郎子に譲りたまひき。是に大山守命は、天皇之命に違ひて、猶天下を獲むと欲て、其の弟皇子を殺さむの情有りて、竊に兵を設けて攻めむとしたまひき。爾に大雀命、其の兄の兵を備へたまふことを聞かして、即ち使者を遣りて、宇遲能和紀郎子に告げしめたまひき。故聞き驚かして、兵を河邊に伏し、亦其の山の上に、絶垣を張り帷幕を立てて、詐りて舍人を王に爲して、露に吳床に坐せて、百官恭敬び往來ふ狀、既に王子の坐す所の如して、更に其の兄王の河を渡りたまむ時の爲に、船楫を具へ飭り、亦佐那葛の根を春き、其の汁の滑を取りて、其の船の中の簀橋に差りて、踏みて作る應く設けて、其の王子は、布の衣褌を服て、既に賤人の形に爲りて、楫を執りて船に立ちませり。是に其の兄王、兵士を隠伏し、鏝を衣の中に服せて、河邊に到りて、船に乗りまさむ

とする時に、其の嚴しく飭れる處を望りて、弟王を其の吳床に坐すと以爲ほして、楫を執りて船に立ちませることをば都て知らずて、即ち其の楫執れる者に問曰ひたまはく、茲の山に忿怒れる大猪有りて傳に聞けり。吾其の猪を取らむと欲ふを、若し其の猪獲てむやとひたまへば、楫執れる者、不能と答曰へば、亦何由なればと問曰ひたまへば、時時往往にして取らむとすれどもえ得ず、是を以て不能と白すなりと答曰ひき。渡りて河中に到れる時に、其の船を傾けしめて、水の中に墮し入れき。爾に乃ち浮き出でて、水の隨流れ下りたまひき。即ち流れつつ歌曰ひたまはく、

ちはやぶる 宇治のわたりに 棹とり速けむひとし わが許所にこむ
是に河邊に伏隠れたる兵、彼廂此廂一時共に興りて、矢刺して流しき。故詞和羅之前に到りて洗み入りたまひぬ。故鈎を以ちて其の洗みたまひし處を探りしかば、其の衣の中なる甲に繋りて、かわらと鳴りき。故其地の號を詞和羅前とは謂ふ也。爾に其の骨を掛き出せる時に、弟王の歌曰、
ちはやひと 宇治のわたりに わたり瀬に たてる あづさゆみ まゆみ い
伐むと ころろは思へど い取らむと ころろは思へど 本方は きみをおも
ひで 末方は いもをおもひで いらななく そこにおもひで かなしけ

くここにおもひで、い伐すぞくる。あづさゆみ、まゆみ。故其の大山守命の骨をば、那良山に葬しき。是の大山守命は、土形君、磐形君、磐原君等が祖なり。

是大雀命と宇運能和紀郎子と二柱、天下を各譲りたまふ間に、海人い大贊を貢りき。爾兄は辭みて弟に貢らしめたまひ、弟はまた兄に貢らしめて相譲りたまふ間に、既に多日經ぬ。如此相譲りたまふこと一二時に非りければ、海人は既に往還に疲れて泣きけり。故諺に、海人なれや己が物から泣くとぞ曰ふ。然るに宇運能和紀郎子は、早く崩りましぬ。故大雀命ぞ天下治しめしける。

又昔新羅國主の子、名は天之日矛と謂ふ有り。是の人參る渡來りけり。參る渡來りける所以は、新羅國に一の沼有り、名を阿具奴摩と謂ふ。此の沼の邊に、一賤女晝寝したりき。是に日の耀虹の如其の陰上を指したるを、亦一賤夫、其の狀を異と思ひて、恒に其の女人の行を伺ひけり。故是の女人、其の晝寝したりし時より妊身みて、赤玉をなも生みける。爾に其の伺へる賤夫、其の玉を乞ひ取りて、恒は裏みて腰に著けたりき。此の人山谷之間に田を營れりければ、耕人等の飲食を牛に負せて、山谷の中に入りける。其の國主の子天之日矛過逢へり。爾其の人に問ひけらく、何ぞ汝飲食を牛に負せて、山谷へは入るぞ。汝必ず是の牛を殺して食ふならむと曰ひて、

即ち其の人を捕へて、獄囚に入れむとすれば、其の人答曰へけらく、吾牛を殺さむとは非ず。唯田人の食を送るにこそあれといふ。然れども猶赦さざりければ、其の腰なる玉を解きて、其の國主の子に幣しつ。故其の賤夫を赦して、其の玉を將來て、床邊に置けりしかば、即ち美麗嬪子に化りぬ。仍婚して嫡妻と爲たりき。爾に其の嬪子、常に種種の珍味を設けて、恒其の夫に食めき。故其の國主の子奢りて妻を罵れば、其の女人、凡吾は、汝の妻に爲る應き女に非ず。吾が祖の國に行なむとすといひて、竊ひて小船に乗りて、逃遁げ渡り來て、難波になも留りける。此は難波の比賣者會社に坐す阿加流比賣と謂す神也。

是に天之日矛其の妻の遁れしことを聞きて、乃ち追ひ渡り來て、難波に到らむとする間に、其の渡の神塞へて入れざりき。故更に還りて、多遲摩國に泊てつ。即ち其の國に留りて、多遲摩の俣尾が女名は前津見に娶ひて生める子多遲摩母呂須玖、此が子多遲摩斐泥、此が子多遲摩比那良岐、此が子多遲摩毛理、次に多遲摩比多訶、次に清日子。三柱、此の清日子當摩之畔斐に娶ひて生める子醉鹿之諸男、次に妹菅籠由良度美。故上に云へる多遲摩比多訶其の姪由良度美に娶ひて生める子葛城之高額比賣命。此は皇長帶比賣命の御祖。

故其の天之日矛の持ち渡り來つる物は、玉津寶と云ひて、埜二貫、又振浪比禮、切浪比禮、振風比禮、切風比禮、又奥津鏡、邊津鏡、并せて八種也。此は伊豆志之八前大神也。

故茲の神の女名は伊豆志袁登賣神坐せり。故八十神是の伊豆志袁登賣を得むとすれども、皆得婚す。是に二神有り。兄を秋山之下氷壯夫と號ひ、弟を春山之霞壯夫とぞ名ひける。故其の兄其の弟に謂ひけらくは、吾伊豆志袁登賣を乞へども、得婚す。汝此の嬢子を得てむやといへば、易く得てむと答曰ふ。爾に其の兄の曰く、若し汝此の嬢子を得て有らば、上下の衣服を避り、身高を量りて妻に酒を醸み、亦山河の物悉に備へ設けて、うれづくをこそ爲めと云ふ。爾に其の弟、兄の言へる如具に其の母に白せば、即ち其の母、布運葛を取りて、一宿の間に、衣禰杵機まで織り縫ひ、亦弓矢を作りて、其の衣禰等を服せ、其の弓矢を取らせて、其の嬢子の家に遣りしかば、其の衣服弓矢も、悉に藤の花とぞ成れりける。是に其の春山之霞壯夫、其の弓矢を嬢子の廁に繫けたるを、伊豆志袁登賣其の花を異と思ひて、將來る時に、其の嬢子の後に立ちて其の屋に入りて、即ち婚しつ。故一子生みたりき。爾に其の兄に、吾は伊豆志袁登賣を得たりと白曰ふ。是に其の兄い、弟の婚つることを懐懐みて、其のうれづく物を償はず。爾其の母に愁ひ白す時に、御祖の答曰へらく、我が御世の事、能くこそ神智はめ。又うつしき青人草習へや。其の物價はぬといひて、其の兄子を恨みて、乃ち其の伊豆志河の河嶋の節竹を取りて、八目之荒籠を作り、其の河の石を取り、鹽に合へて、其の竹の葉に裏み、詛ひ言はしめけらく、此の竹葉の青むが如、此の竹葉の萎むが如、青み萎め。又此の鹽の盈ち乾るが如、盈ち乾よ。又此の石の沈むが如、沈

古事記中卷終

み臥せ。如此詛ひて烟の上に置かしめき。是を以て其の兄八年の間干き萎み病み枯しき。故其の兄患ひ泣きて、其の御祖に請へば、即ち其の詛戸を返さしめき。是に其の身本の如くに安平ぎき。此は神うれづくといふ言の本也。

又此の品陀天皇の御子、若野毛二俣王、其の母の弟百師木伊呂辨亦の名は弟日賣眞若比賣命に娶ひて生みませる子大郎子、亦の名は意富富杼王、次に忍坂之大中津比賣命、次に田井之中比賣、次に田宮之中比賣、次に藤原之琴節郎女、次に取賣王、次に沙彌王。七王。故意富富杼王は、三國君、波多君、息長君、坂田の酒人君、山道君、筑紫の米多君、布勢君等の祖也。又根鳥王庶妹三腹郎女に娶ひて生みませる子中日子王、次に伊和嶋王。二柱。又堅石王の子は、久奴王也。

凡て此の品陀天皇、御年壹佰參拾歲。御陵は川内の惠賀の裳伏岡に在り。

古事記下巻

大雀命、難波の高津宮に坐しまして、天下治しめしき。此の天皇、葛城之曾都毘古の女、石之日賣命、大后に娶ひまして、生みませる御子、大江之伊邪本和氣命、次に墨江之中津王、次に蜷之水齒別命、次に男淺津間若子宿禰命。四柱 又上に云へる日向の諸縣君牛諸が女、髮長比賣を娶して、生みませる御子、波多毘能大郎子、亦の名は大目下王、次に波多毘能若郎女、亦の名は長日比賣命、亦の名は若日下部命。二柱 又庶妹八田若郎女に娶ひまし、又庶妹宇遲能若郎女に娶ひましき。此の二柱は、御子まさざりき。凡て此の大雀天皇の御子等、并せて六王ましき。男王五柱、女王一柱。故伊邪本和氣命は、天下治しめし、次に蜷之水齒別命も天下治しめし、次に男淺津間若子宿禰命も天下治しめしき。

此の天皇の御世に、大后石之日賣命の御名代として、葛城部を定めたまひ、亦太子伊邪本和氣命の御名代として、壬生部を定めたまひ、亦水齒別命の御名代として、蜷部を定めたまひ、亦大目下王の御名代として、大日下部を定めたまひ、若日下部王の御名代として、若日下部を定め

たまひき。

又秦人を役て、茨田堤、茨田三宅を作りたまひ、又丸瀬池、依網池を作りたまひ、又難波の堀江を堀りて、海に通し、又小橋江を堀り、又墨江之津を定めたまひき。

是に天皇、高山に登りまして、四方の國を見したまひて、詔りたまひつらく、國中に烟發たず、國皆貧窮し。故今より三年といふまでは、悉に人民の課役を除せとのりたまひき。是を以て大殿破れ壞れて、悉に雨漏れども、都て脩理ひたまはず、械を以ちて其の漏る雨を受けて、漏らざる處に遷り避けましき。後に國中を見したまへば、國に烟滿ちたりき。故人民富めりと爲ほして、今はと課役科せたまひき。是を以て百姓榮えて、役使に苦まさりき。故其の御世を稱へて、聖帝の世と謂す。

其の太后石之日賣命、甚多だ嫉妬したまひき。故天皇の使はす妾たちは、宮中をも得臨かず、言立てば、足もあがかに嫉妬みたまひき。爾に天皇、吉備の海部直が女、名は黒日賣、其容姿端正と聞き看して、喚上げて使ひたまひき。然れども其の太后の嫉ますを畏みて、本國に逃げ下りにき。天皇、高臺に坐して、其の黒日賣が船出浮海を望瞻けまして、歌曰ひたまはく、
沖方には 小舟つらく くらさきの まさつこわざも くにへくだらす
故太后、是の御歌を聞かして、大く怒りまして、大浦に人を遣して、追ひ下して、歩より追去ひ

たまひき。

是に天皇、其の黒日賣を戀ひたまひて、太后を欺かして、淡道嶋見たまはむと曰りたまひて、幸行せる時に、淡道嶋に坐して、遙に望けまして歌曰ひたまはく、

おしてるや 難波の崎よ いでたちて わがくにみれば 淡嶋 湊能暮呂嶋
檳榔の 鳥もみゆ 佐氣都嶋みゆ

乃ち其の嶋より傳ひて、吉備國に幸行しき。爾黒日賣、其の國の山方の地に大坐し、まさしめて、大御飯 獻りき。是に大御羹を煮むとして、其地の菘菜を採る時に、天皇其の嬢子の菘採む處に到り坐して、歌曰ひたまはく、

やまがたに 蔭ける菘菜も 吉備ひとと ともにしつめば たぬしくもあるか
天皇 上り幸す時に、黒日賣の獻れる御歌曰、

倭方に 西風ふきあげて くもばなれ 離きをりとも われわすれめや
又歌曰、

倭方に ゆくはたがつま 隠水の 下よ延へつつ ゆくはたがつま
此より後時、太后、豐樂したまはむとして、御綱柏を採りに、木國に幸行せる間に、天皇、八田若郎女に婚ひましつ。是に太后は、御綱柏を御船に積み盈てて、還幸す時に、水取司に駈使ゆ

る、吉備國の兒嶋の仕丁、是己が國に退るに、難波の大渡に、後れたる倉人女の船遇へり。乃ち語云りけらくは、天皇は、比日八田若郎女に婚ひまして、晝夜戲遊れますを、若し太后は、此事聞し看さね乎、靜に遊び幸行すとぞかたりける。爾其の倉人女、此の語れる言を聞きて、即ち御船に追ひ近きて、仕丁が言ひつる如狀具に白しき。是に太后、大く恨み怒りまして、其の御船に載せたる御綱柁をば、悉く海に投げ棄てたまひき。故其地を、御津前とは謂ふ也。即ち宮に入り坐さず、其の御船を引き避きて、堀江に沂らして、河の隨、山代に上り幸しき。此の時に歌曰ひたまはく、

つぎねふや 山代河を かはのぼり わがのぼれば かはのべに 生ひだて

る 烏草樹を 烏草の樹 其がしたに 生ひだてる 葉廣 五百箇眞椿 其が

はなの てりいまし 其がはの 廣りいますは おほきみるかも

即ち山代より廻りて、那良の山口に到り坐して、歌曰ひたまはく、

つぎねふや 山代河を みやのぼり わがのぼれば あをによし 那良をす

ぎ をだて 倭をすぎ わが見がほし くには 葛城 高宮 我家のあたり

如此歌ひて還らして、暫し筒木の韓人、名は奴理能美が家に入り坐しき。

天皇、太后山代より上り幸しぬと聞し看して、舍人名は鳥山と謂ふ人を使はしけるときに、

送りたまへる御歌曰、

山代に いしけ鳥山 いしけいしけ あがはしづまに いしきあはむかも

又續ぎて丸瀬臣口子を遣して、歌曰ひたまはく、

御室の その高城なる 大猪子が腹 大猪子が 腹にある 肝むかふ ころこ

をだにか あひおもはずあらむ

又歌曰、

つぎねふ 山代女の 木纏もち うちし大根 根白の 白腕 纏かず來ばこ

そ しらずともいはめ

故是の口子臣、此の御歌を白す時しも、大雨りき。爾に其の雨をも避けず、前殿戸に參り伏せば、違ひて後戸に出でたまひ、後殿戸に參り伏せば、違ひて前戸に出でたまふ。爾匍匐ひ進退ひて、庭中に跪きをる時に、水潦腰に至けり。其の臣、紅紐著けたる青摺の衣を服たりければ、水潦紅紐に拂れて、青首紅色に變りぬ。爾に口子臣の妹、口日賣、太后に仕へ奉れり。故是の口日賣歌曰ひけらく、

山代の 筒木宮に ものまをす あが兄のきみは なみたぐましも

爾に太后其の所由を問ひたまふ時に、僕が兄口子臣なりと答白しき。

是に口子臣、亦其の妹口比賣、また奴理能美、三人して譲りて、天皇に奏云さしめけらくは、
 大后の幸行せる所以は、奴理能美が養ふ虫、一度は匍ふ虫に爲り、一度は敷に爲り、一度は飛ぶ
 鳥に爲りて、三色に變る奇しき虫有り。此の虫を看行はしに、入り坐せるにこそあれ。更に異し
 き心はまさず。如此奏す時に、天皇、然らば、吾も、奇異と思へば、見に行かなと詔りたまひて、
 大宮より上り幸行して、奴理能美が家に入り坐せる時に、其の奴理能美、己が養へる三種の虫を、
 大后に獻りき。爾天皇、其の大后の坐せる殿戸に御立たして、歌曰はしけらく、
 つぎねふ 山代女の 木鏝もち うちし大根 さわさわに 汝が言へせこそ
 うちわたす 彌木榮如す 來入りまる來れ
 此の天皇と大后と歌はしたる六歌は、志都歌の返歌也。
 天皇、八田若郎女を戀ひたまひて、御歌を遣り賜へる、其の歌曰、
 八田の ひとつもと菅は 子もたす 立ちか荒れなむ あたら菅原 言をこそ
 菅原といはめ あたら清し女
 爾八田若郎女の答の歌曰、
 八田の ひとつもと菅は ひとりをりとも おほきみし 縦ときこさば ひとり
 をりとも

故八田若郎女の御名代として、八田部を定めたまひき。
 亦 天皇、其の弟速總別王を、妹と爲て、庶妹女鳥王を乞ひたまひき。爾に女鳥王、速總別王
 に語曰りたまはく、大后の強に因りて、八田若郎女をも治め賜はず、故仕へ奉らじ。吾は汝が命
 の妻に爲りなむと思ふといひて、即ち相婚ひましき。是を以て速總別王、復奏したまはざりき。
 爾に天皇、直に女鳥王の坐す所に幸して、其の殿戸の闕の上に坐しき。是に女鳥王、機に坐して、
 服織らせり。爾天皇歌曰みしたまはく、
 女鳥の わが王の 織ろす服 たが料ろかも
 女鳥王答の歌曰、
 高ゆくや 速總別の みおすひ料
 故天皇、其の情を知して、宮に還入りましき。
 此の時、其の夫速總別王の到來ませる時に、其の妻女鳥王歌曰ひたまはく、
 ひばりは 天にかける 高ゆくや 速總別 鶴鶴とらさね
 天皇此の歌を聞かして、即ち軍を興して、殺りたまはむとす。爾速總別王女鳥王、共に逃げ
 退りて、倉椅山に騰りましき。是に速總別王歌曰ひたまはく、
 はしたての 倉椅山を 嶮しみと 岩掻きかねて わがてとらすも

又歌曰、

はしたての 倉崎山は 嶮しけど いもとのほれば 嶮しくもあらず

故其地より逃亡げて、宇陀の蘇邇に到りませる時に、御軍追ひ到りて、殺せまつりき。

其の將軍山部大楯連、其の女鳥王の、御手に纏かせる玉釧を取りて、己が妻に與へたりき。

此時の後、豊樂爲たまはむとする時に、氏氏の女等、皆朝參す。爾に大楯連が妻、其の王の

玉釧を、己が手に纏きて參赴れり。是に大后石之日賣命、自ら大御酒の粕を取らして、諸氏氏

の女等に賤ひき。爾大后、其の玉釧を見知りたまひて、御酒の粕を賜はずて、乃ち引き退けたま

ひて、其の夫大楯連を召し出でて、詔りたまはく、其の王等禮无きに因りて、退ひ賜へる、是

は異なる事無くこそ。夫の奴や、己が君の御手に纏かせる玉釧を、膚も焔けきに刺ぎ持ち來て、

己が妻に與へたることとのりたまひて、乃ち死刑に給ひたまひき。

亦一時、天皇、豊樂したまはむとして、日女嶋に幸行せる時に、其の嶋に雁卵生みたりき。

爾建内宿禰命を召して、歌以て、雁の卵生める状を問はしたまへる、其の歌曰、

たまきはる 内の朝臣 汝こそは 世のながひと そらみつ 日本國に 雁

卵産と きくや
是に建内宿禰、歌以て語り白さく、

高ひかる ひのみこ 諾しこそ とひたまへ まこそに とひたまへ あれこ

そは 世のながひと そらみつ 日本國に 雁卵産と いまだきかず

如此白して、御琴を給はりて、歌曰ひけらく、

汝が王や つひにしらむと 雁は卵産らし

此は本岐歌の片歌也。

此の御世に、免寸河の西に、高樹有りけり。其の樹の影、且日に當れば、淡道嶋に逮び、夕

日に當れば、高安山を越えき。故是の樹を切りて、船に作れるに、甚と捷く行く船にぞありける。

時に其の船の號を、枯野とぞ謂ひける。故是の船を以て、且夕に淡道嶋の寒泉を酌みて、大御水

獻りき。茲の船の破壊れたる以て、鹽を燒き、其の燒け遣れる木を取りて、琴に作りたりしに、

其の音七里に響えたりき。爾歌曰に、

枯野を しほにやき 其があまり 琴につくり かきひくや 由良の門の 門

なかの 海石に 振れたつ 浸漬の木の さやさや

此は志都歌の返歌也。

此の天皇、御年捌拾參歳。御陵は毛受の耳原に在り。
伊邪本和氣命、伊波禮の若櫻宮に坐しまして、天下治しめしき。此の天皇、葛城之曾都毘古の

子、葦田宿禰の女、名は黒比賣命に娶ひまして、生みませる御子、市邊之忍齒王、次に御馬王、次に妹青海郎女、亦の名は飯豐郎女、三柱

本難波宮に坐しし時、大嘗に坐して、豐明爲す時に、大御酒にうらげて、大御寝ましき。爾に其の弟墨江中王、天皇を取りまつらむとして、大殿に火を著けたりき。是に倭漢直の祖、阿知直、盗み出でて、御馬に乗せまつりて、倭に幸さしめき。故多遲比野に到りまして、宿めまして、此間は何處ぞと詔りたまひき。爾阿知直白さく、墨江中王、大殿に火を著けたまへり。故率てまつりて倭に逃げゆくなりたまをしき。爾に天皇歌曰はしけらく、

丹比野に ねむとしりせば 防壁も もちて来ましもの ねむとしりせば
波瀾賦坂に到りまして、難波宮を望見りたまへば、其の火猶炳くみえたり。爾亦歌曰はしけらく、

殖生坂 わがたちみれば かぎりひの もゆる家群 つまがいへのあたり
故大坂の山口に到幸せる時に、女人遇へり。其の女人の白さく、兵を持たる人等、多茲の山を塞きをり。當岐麻道より、廻りて越え幸す應しとまをしき。爾天皇歌曰はしけらく、

大坂に あふやをとめを みちとへば ただにはのらず 當麻路をのる
故上り幸して、石上神宮に坐しましき。

是に其の伊呂弟水齒別命、參み赴まして、諫さしめたまふ。爾天皇詔らしめたまはく、吾汝が命を、若し墨江中王と、同心ならむかと疑ほせば、相言はじとのらしめたまへば、僕は穢邪き心無し。墨江中王と同じころにもあらずと答へ白したまひき。亦詔らしめたまはく、然らば、今還り下りて、墨江中王を殺して、上り來ませ。彼の時にこそ吾必ず相言はめとのらしめたまひき。故即ち難波に還り下りまして、墨江中王に近く習へまつる隼人、名は曾婆加理を欺きて、若し汝吾が言ふことを従かば、吾天皇と爲り、汝を大臣に作して、天下治さむとす、那何と云りたまひき。曾婆加理、命の隨と答白しき。爾其の隼人に多祿に給ひて、然らば汝の王を殺りまつれと曰りたまひき。是に曾婆加理、己が王の廟に入りませるを竊伺ひて、牙を以ちて刺して殺せまつりき。故曾婆加理を率て、倭に上り幸す時に、大坂の山口に到りまして、以爲ほさくは、曾婆加理、吾が爲に、大功有れども、既に己が君を殺せまつれるは、不義なり。然れども其の功を賽いずは、可謂無信。既に信りしごと行はば、還りて其の情こそ惶けれ。故其の功は報ゆとも、其の正身をば滅してむとぞおもほしける。是を以て曾婆加理に詔りたまはく、今日は此間に留りて、先づ大臣の位を給ひて、明日上幸さむとのりたまひて、其の山口に留りまして、即ち假宮を造りて、忽に豐樂爲して、乃ち其の隼人に、大臣の位を賜ひて、百官をして拜ましめたまふに、隼人歡喜びて、志遂げぬとぞ以爲ひける。爾に其の隼人に、今日大臣と、同じ葦の酒を

飲みてむとすと詔りたまひて、共に飲ます時に、面を隠す大鏡に、其の進むる酒を盛りたり。是に王子先づ飲みたまひて、隼人後に飲む。故其の隼人飲む時に、大鏡面を覆ひたりき。爾席の下に置かせる劔を取り出でて、其の隼人が頸を斬りたまひき。乃して明日ぞ上り幸しける。故其地を近飛鳥と謂づく。倭に上り到りまして、詔りたまはく、今日は此間に留りて、祓禊爲て、明日参る出で、神宮を拜まむとすとのりたまひき。故其地を遠飛鳥と謂つけき。故石上神宮に参る出で、天皇に、政既に平け訖へて、参る上りて侍ふと奏さしめたまひき。爾召し入れて、相語ひたまひき。

天皇、是に阿知直を、始めて藏官に任したまひ、亦粮地をも給ひき。亦此の御世に、若櫻部臣等に、若櫻部といふ名を賜ひ、又比賣陀君等に、比賣陀之君と謂ふ姓を賜ひき。亦伊波禮部を定めたまひき。

この天皇の御年、陸拾肆歳。御陵は毛受野に在り。

水齒別命、多治比の柴垣宮に坐しまして、天下治しめしき。此の天皇、御身の長九尺二寸半、御齒長一寸廣二分、上下等しく齊ひて、既に珠を貫けるが如くなりき。

この天皇、丸邇の許基登臣の女、都怒郎女を娶して、生みませる御子、甲斐郎女、次に都夫良郎女。二柱 又同じ臣の女、弟比賣を娶して、生みませる御子、財王、次に多訶辨郎女、并せて四

王ましき。

この天皇、御年陸拾肆歳。御陵は毛受野に在り。

男淺津間若子宿禰命、遠飛鳥宮に坐しまして、天下治しめしき。此の天皇、意富本村王の妹、忍坂之大中津比賣命に娶ひまして、生みませる御子、木梨之輕王、次に長田大郎女、次に境之黒

日子王、次に穴穗命、次に輕大郎女、亦の名は衣通郎女。御名を衣通王と與せる所以は、其の身の光衣より通り出でつれば也。次に八瓜之白日子王、次に大長谷命、次に橘大郎女、次に酒見郎女。九柱

凡てこの天皇の御子等、九柱ましき。男王五、女王四。此の九王の中に、穴穗命は、天下治しめしき。次に大長谷命も、天下治しめしき。

天皇、初め天津日繼知しめさむとせし時に、辭ひまして、我は長病し有れば、日繼得知さじと詔りたまひき。然れども大后を始め、諸卿等、堅く奏したまへるに因りてぞ、天下治しめしける。此の時新良國主、御調八十一艘貢進りき。爾に御調の大使、名は金波鏡漢紀武とぞ云ひける。此の人薬方を深く知れりき。故帝皇が御病を治差めまつりき。

是に天皇、天下の氏氏名名の人の、氏姓の忤ひ過てることを愁ひまして、味白壽の言八十禍津日前に、玖訶瓮を居ゑて、天下の八十友緒の氏姓を定め賜ひき。又木梨之輕太子の御名代として、輕部を定めたまひ、大后の御名代として、刑部を定めたまひ、大后の弟田井中比賣の御名代

王ましき。

として、河部を定めたまひき。

この天皇、御年漆拾捌歳。御陵は河内の惠賀長枝に在り。

天皇崩りまして後、木梨之輕太子、日繼知しめすに定まれるを、未だ位に即きたまはざりし間に、其の伊呂妹輕大郎女に射けて、歌曰ひたまはく、

あしひきの やまだをつくり やまだかみ 下樋を走せ 下聘ひに わが聘ふ
いもを 下泣きに わがなくつまを 今日こそは やすくはだ觸れ

此は志良宜歌也。又歌曰、

小竹葉に うつやあられの たしだしに 率寝てむのちは 人議ゆとも うる

はしと 眞寢し眞寢てば かりこもの みだればみだれ 眞寢し眞寢てば
此は夷振の上歌也。

是を以て百官を及めて、天下の人等、輕太子に背きて、穴穗御子に歸りぬ。爾輕太子畏みて、大前小前宿禰大臣の家に逃げ入りて、兵器を備へ作りたまひき。爾の時に作れる矢は、其の箭の前を射にしたり。故其の矢を輕箭と謂ふ。穴穗王子も兵器を作りたまふ。此の王子の作らせる矢は、即ち今時の矢也。是を穴穗箭と謂ふ。是に穴穗御子軍を興して、大前小前宿禰の家を圍みたまふ。爾其の門に到りませる時に、大氷雨零りき。故歌曰ひたまはく、

大前 小前宿禰が 金門かけ かくより來ね あめたちやめむ
爾に其の大前小前宿禰、手を擧げ膝を打ち、舞ひかなで歌ひ參る來。其の歌曰は、
みやひとの 脚結の小すず おちにきと みやひととよむ さとびともゆめ
此の歌は、宮人振也。如此歌ひつつ參る歸て、白しけらく、我が天皇の御子、伊呂兄王を及兵めたまふな。若し及兵めたまはば、必ず人咬はむ。僕捕へて貢進らむとまをしき。爾兵を解めて退り坐しき。故大前小前宿禰、其の輕太子を捕へて、率て參る出て貢進りき。其の太子、捕へらえて歌曰ひたまはく、

あまだむ 輕媛女 甚泣かば ひとしりぬべし 羽狭の山の ほとの下泣き
に 泣く

又歌曰、

あまだむ 輕媛女 したたにも より偃てとほれ 輕媛女ども

故其の輕太子をば、伊余湯に流ちまつりき。亦流たえたまはむとせし時に、歌曰ひたまはく、
天とふ とりも使ぞ たづがねの きこえむときは わが名とはさね

此の三歌は、天田振也。又歌曰ひたまはく、
おほきみを しまに放らば 船あまり い歸り來むぞ わがたたみゆめ 言を

こそ たたみといはめ わがつまはゆめ
此の歌は、夷振の片下也。其の衣通王、歌を獻る。其の歌曰、

なつくさの あひねのはまの 蠟貝に あしふますな あかしてとほれ
故後に亦戀慕ひ堪ねて、追ひ往ます時に、歌曰ひたまはく、

きみがゆき 氣ながくなりぬ やまたづの むかへをゆかむ まつにはまたじ
此に山多豆と云へるは、今の建木也。

故追ひ到りませる時に、待ち懐ひて、歌曰ひたまはく、

こもりくの 長谷の山の 大峽には 幡張り立て さ小峽には 幡張り立て
大峽にし なかさだめる おもひづまあはれ 槻ゆみの 伏る伏りも あづさ
ゆみ たてりたてりも のちも取りみる おもひづまあはれ

又歌曰、

こもりくの 長谷の川の かみつせに 齋杖をうち しもつせに 眞杖をう
ち 齋杖には かがみをかけ 眞杖には 眞玉をかけ 眞玉如す あが思ふい
も かがみ如す あが思ふつま ありと いはばこそに いへにもゆかめ く
にをもしぬはめ

如此歌ひて、即ち共に自ら死せたまひき。故此の二歌は、讚歌也。

穴穂御子、石上の穴穂宮に坐しまして、天下治しめしき。天皇、伊呂弟大長谷王子の爲に、坂
本臣等が祖根臣を、大日下王の許に遣して、詔らしめたまはらくは、汝が命の妹若日下王を、大
長谷王子に婚はせむとす。故 貢る可しとのらしめたまひき。爾に大日下王、四拜みて白したま
はく、若し如此大命も有らむかと疑へる故に、外にも出ださずて置きつ。是恐し、大命の 隨
奉進らむとまをしたまひき。然れども言以て白す事は、禮無しと思ほして、即ち其の妹の禮物と
して、押木の玉纒を持たしめて、貢獻りき。根臣い、即ち其の禮物の玉纒を盗み取りて、大日下
王を讒曰しまつりけらく、大日下王は、勅命を受けたまはらずて、己が妹や、等族の下席に爲ら
むと曰ひて、横刀の手上取りしばかりて怒りましつとまをしき。故 天皇 大く怒りまして、大日下
王を殺して、其の王の嫡妻長田大郎女を取り持ち來て、皇后と爲たまひき。

此より以後に、天皇 神牀に坐しまして、晝寢ましき。爾其の后と語らひて、汝思ほすこと有
りやと曰りたまひければ、天皇の 敦澤のふかければ、何の思ふことか有らむと答曰したまひ
き。是に其の 大后の先子目弱王、是年七歳になりたまへり。是の王、其の時しも、其の殿の下に
遊びませりき。爾 天皇 其の少王の殿の下に遊びませることを知しめさずて、大后に詔言りたま
はく、吾は恒思ほすこと有り。何ぞといへば、汝の子目弱王、成人りたらむ時、吾が其の父王を

殺せしことを知りなば、還して邪心有らむかとのりたまひき。是に其の殿の下に遊びませる目弱王、此の言を聞き取りて、便ち天皇の御寝ませるを竊伺ひて、其の傍なる大刀を取りて、其の天皇の頸を打ち斬りまつりて、都夫良意富美が家に逃げ入りましき。

この天皇御年伍拾陸歳。御陵は菅原の伏見岡に在り。

爾に大長谷王子、當時童男にましける。此の事を聞かして、懐懐み忿怒りまして、乃ち其の兄黒日子王の許に到まして、人天皇を取りまつれり。那何に爲まじと曰したまひき。然るに其の黒日子王、うちも驚かすて、怠緩におもほせり。是に大長谷王其の兄を罵りて、一には天皇に爲し、一には兄弟に爲すを、何ぞも恃心無く、ひとの其の兄を殺りまつれることを聞きつつ、驚きもせずて怠におもほせると言ひて、即ち其の衿を握りて控き出でて、刀を抜きて打ち殺したまひき。亦其の兄黒日子王に到まして、前の如狀告げましたまふに、このみこも亦黒日子王の如く緩におもほせりしかば、即ち其の衿を握りて、引き率て来て、小治田に到りて、穴を掘りて、立ちながらに埋みしかば、腰を埋む時に至りて、兩の目、走り抜けてぞ死せたまひぬる。

亦軍を興して、都夫良意富美の家を圍みたまひき。爾軍を興して待ち戦ひて、射出づる矢葦の盛に散るが如くなりき。是に大長谷王、予を仗につかして、其の内を臨みまして詔りたまはく、我が相言へる孃子は、若し此の家に有りやとのりたまひき。爾に都夫良意美此の詔命を聞きて、自

ら参り出で、佩ける兵を解きて、八度拜みて、白しけるは、先日に関ひ賜へる女子詞良比賣は、侍はむ。亦五處の屯宅を副へて獻らむ。所謂五處の屯宅は、今の葛城の五村の形なり也。然るに其の正身参る向ざる所以は、往古より今時に至るまで、臣連の王宮に隠ることは聞けど、王子の臣の家に隠りませることは未だ聞かず。是を以て思ふに、賤奴意富美は、力を竭して戦ふとも、更にえ勝ちまつらず。然れども己を恃みて、賤の家に入り坐せる王子は、死ぬとも棄てまつらじ。如此白して、亦其の兵を取りて、還り入りて戦ひき。爾力窮き、矢も盡きぬれば、其の王子に白しけらく、僕は手悉傷。矢も盡きぬ。今は得戦はじ。如何にせむとまをしければ、其の王子、然らば更に爲むすべ無し。今は吾を殺せよと答詔りたまひき。故刀以て其の王子を刺し殺せまつりて、乃ち己が頸を切りて死せにき。

茲より以後、淡海の佐佐紀山君の祖名は韓俗白さく、淡海の久多綿之蚊屋野に、猪鹿多かり。其の立てる足は、萩原の如く、指擧げたる角は、枯樹の如しとまをしき。此の時市邊之忍齒王を相率ひて、淡海に幸行して、其の野に到りませば、各異に假宮を作りて、宿りましき。爾明且、未だ日も出でぬ時に、忍齒王、以平心、御馬に乗らしながら、大長谷王の假宮の傍に到き立たして、其の大長谷王子の御伴人に詔りたまはく、未だ瘡め坐さぬにこそ、早く白す可し。夜は既に曙けぬ。獵庭に幸す可しとのりたまひて、乃ち馬を進めて出で行ましぬ。爾に大長谷王の御

所に侍ふ人等、うたて物云ふ王子なれば、慎したまへ。御身をも堅めたまふ宜しと白しき。即衣の中に甲を服まし、弓矢を取り佩かして、馬に乗らして出で行まして、倏忽に馬より往き變ばして、矢を抜きて、其の忍齒王を射落して、乃ち亦其の身を切りて、馬楯に入れて、土と等しく埋みき。

是に市邊王の王子等、意富那王、二柱、此の亂を開かして、逃げ去りましき。故山代の羽井に到りまして、御糧食しめす時に、面黥ける老人來て、其の糧を奪りき。爾其の二王、糧は惜まぬを、汝は誰人ぞと言りたまへば、我は山代の猪甘なりと答曰しき。故玖須婆の河を逃げ渡りて、針間國に至りまし、其の國人名は志自牟が家に入りまして、身を隠して、馬甘牛甘にぞ役はえいましける。

大長谷若建命、長谷の朝倉宮に坐しまして天下治しめしき。この天皇、大日下王の妹、若日下部王に娶ひましき。子まします。又都夫良意富美が女、韓比賣を娶して生みませる御子、白髮命、次に妹若帶比賣命、二柱、故、白髮太子の御名代として、白髮部を定めたまひ、又長谷部舎人を定めたまひ、又河瀬舎人を定めたまひき。

此の時に吳人參る渡り來つ。其の吳人を吳原に安置きたまひき。故其地を吳原と謂ふ也。初め大后日下に坐しける時、日下の直越道より、河内に幸行しき。爾山の上に登りまして、

望國內しければ、堅魚を上げて舎屋を作れる家有り。天皇其の家を問云はしめたまはく、其の堅魚を上げて作れる舎は、誰が家ぞとはしめたまひしかば、志幾之大縣主が家なりと答白しき。爾に天皇詔りたまへるは、奴や、己が家を、天皇の御舎に似て造れりとのりたまひて、即ち人を遣して、其の家を焼かしたまふ時に、其の大縣主懼ち畏みて、稽首み白さく、奴に有れば、奴ながら覺らずて、過ち作れり。甚と畏しとまをしき。故能美の御幣物を獻る。白き犬に布を繫けて、鈴を著けて、己が族名は腰佩と謂ふ人に犬の繩を取らしめて獻上りき。故其の火著くることを止めしめたまひき。即ち其の若日下部王の許に幸行して、其の犬を賜ひ入れて、詔らしめたまはく、是の物は、今日道に得つる奇しき物なり。故つまどひの物と云ひて、賜ひ入れき。是に若日下部王、天皇に奏さしめたまはく、日に背きて幸行せる事、甚と恐し。故己直に參る上りて仕へ奉らむとまをさしめたまひき。是を以て宮に還り上り坐す時に、其の山の坂の上に行き立たして、歌曰ひたまはく、

日下部の ちちのやまと たたみこも 平群のやまの ちちちちの やまの峽
に たち榮ゆる 葉廣熊白麴 もとには いくみ竹生ひ すゑへには たしみ
竹生ひ いくみ竹 いくみは寝ず たしみ竹 髓には率寝ず のちもくみ寝
む そのおもひづま あはれ

即ち此の歌を持たしめて、返し使はしき。
 亦一時、天皇遊行しつづ、美和河に到りませる時に、河邊に衣洗ふ童女有り。其容姿甚と麗かりき。天皇其の童女に汝は誰が子ぞと問はしければ、己が名は引田部赤猪子と謂すと答白しき。爾詔らしめたまへらくは、汝嫁夫がずてあれ、今喚してむとのらしめたまひて、宮に還り坐しき。故其の赤猪子、天皇の命を仰ぎ待ちて、既に八十歳を経たりき。是に赤猪子以爲ひけるは、命を望ぎまちつる間に、己に多の年を経て、姿體瘦み萎けてあれば、更に所持無し。然れども待ちつる情を顯しまをさずては、愾くて不忍とおもひて、百取の机代の物を持たしめて、參り出て貢獻りき。然るに天皇先に命りたまへりし事をば既く忘らして、其の赤猪子に問曰はしけらく、汝は誰やし老女ぞ。何由すれぞ參る來つるとはしければ、赤猪子答白しけらく、其の年の其の月に、天皇の命を被りて、今日まで大命を仰ぎ待ちて、八十歳を経たり。今は容姿既に青いて、更に所持無し。然はあれども己が志を顯し白さむとしてこそ、參り出つれとまをしき。是に天皇大く驚きまして、吾は既く先の事を忘れたり。然るに汝守志に命を待ちて、徒らに盛年を過ししこと、甚と愛悲しとのりたまひて、婚さまく欲しくおもほせども、其の極く老いぬるに憚りたまひて、得成婚さずて、御歌を賜ひき。其の歌曰、
 御室の 嚴白禱がもと 白禱がもと ゆゆしきかも 白禱はらをとめ

又歌曰、

引田の 若栗栖ばら 若くへに 率寝てましもの 老いにけるかも
 爾赤猪子が泣く涙に、其の服せる丹指の袖悉りて濡れぬ。其の大御歌に答へまつれる歌曰、
 御室に 築くやたまかき 築きあまし 誰にかもよらむ かみのみやひと

日下江の いろえのはちす はなばちす みのさかりびと 羨しきろかも
 爾其の老女に多祿に給ひて、返し遣りたまひき。故此の四歌は、志都歌也。
 天皇 吉野宮に幸行せる時、吉野川の濱に、童女のある。其形姿美麗かりき。故是の童女を婚して、宮に還り坐しき。後に更に亦吉野に幸行せる時に、其の童女の遇へりし所に留りまして、其處に大御吳床を立てて、其の御吳床に坐しまして、御琴を弾かして、其の嬢子に憐爲しめたまひき。爾其の嬢子好く憐へるに因りて、作御歌みしたまへる、其の歌曰、
 吳床座の かみのみてもち ひく琴に 憐するをみな 常世にもかも
 即ち阿岐豆野に幸して、御獵せず時に、天皇御吳床に坐しましけるに、蝦御腕を咋ひけるを、蜻蛉来て、其の蛸を咋ひて、飛びいにき。是に作御歌みしたまへる、其の歌曰、
 御吉野の 小牟漏が岳に ししふすと たれぞおほまへに まをす やすみし

し わがおほきみの ししまつと 吳床にいまし しろたへの 神著具ふ
 手跡に 蛭かきつき その蛭を 蜻蛉はや咋ひ かくのごと 名におはむと
 そらみつ 倭の國を 蜻蛉島とふ
 故其の時よりぞ、其の野を阿岐豆野とは謂ひける。
 又一時、天皇 葛城の山の上に登り幸しき。爾に大猪出でたりき。即ち 天皇 鳴鏑を以ちて、
 其の猪を射たまへる時に、其の猪怒りて、うたき依り來。故 天皇 其のうたきを畏みて、榛の上
 に登り坐しき。爾歌曰みしたまはく、

やすみしし わがおほきみの あそばしし ししの やみししの うたきかし

こみ わが逃げ のほりし 荒岳の はりのきのえだ

又一時 天皇 葛城山に登り幸せる時、百官の人等、悉に紅紐著ける青摺の衣を給はりて服たり
 き。彼の時に其の所向の山の尾より、山の上に登る人有り。既に天皇の 鹵簿に等しく、其の
 装束の狀、また人衆も、相似て頽れず。爾に天皇 望らして問曰はしめたまはく、茲の倭國に、
 吾を除きて亦王は無きを、今誰人ぞ如此て行くとはしめたまひしかば、答へ曰せる狀も、天皇
 の大命の如くなりき。是に天皇 大く怒らして、矢刺したまひ、百官の人等も、悉に矢刺しけれ
 ば、其の人等も皆矢刺せり。故 天皇 亦問曰はしめたまはく、然らば其の名を告らさね。各

名を告りて矢彈たむとのりたまひき。是に答へ曰さく、吾先づ問はえたれば吾先づ名告爲む。吾
 は、惡事も一言、善事も一言、言離の神、葛城の一言主之大神なりとまをしたまひき。是に天皇
 惶畏みて白したまはく、恐し我が大神、うつしおみ有さむとは覺らざりきと白したまひて、大御
 刀また弓矢を始め、百官の人等の服せる衣服を脱がしめて、拜みて獻りき。爾其の一言主大神
 手打ちて其の捧物を受けたまひき。故 天皇の還幸す時、其の大神山を降り來まして、長谷の山
 口に送り奉りき。故是の一言主之大神は、彼の時にぞ顯れませる。

又 天皇、丸邇の佐都紀臣が女袁杼比賣を婚ひに、春日に幸行せる時、媛女の道に逢へる。幸行
 を見て、岡邊に逃げ隠りき。故作御歌みしたまへる、其の御歌曰、

をとめの い隠る岡を 金鈕も 五百箇もがも 鈕き撥ぬるもの

故其の岡を、金鈕岡とぞ謂ける。

又 天皇 長谷の百枝槻の下に坐しまして、豊樂 爲す時に、伊勢國の三重姫、大御蓋を指擧
 げて獻りき。爾に其の百枝槻の葉落ちて、大御蓋に浮べりき。其の姫落葉の 蓋に浮べるを知ら
 ずて、猶大御酒 獻りけるに、天皇 其の蓋に浮べる葉を看行して、其の姫を打ち伏せ、刀を
 其の頸に刺し充てて、斬りたまはむとする時に、其の姫 天皇に白曰しけらく、吾が身をな殺し
 たまひそ。白す應き事有りとまをして、即ち歌曰ひけらく、

纏向の 日代の宮は あさひの 日照るみや ゆふひの 日陰るみや たけの
 根の 根足るみや 木の根の 根蔓ふみや 八百土よし い杵築のみや まき
 さく 檜の御門 新嘗屋に おひだてる ももだる 槻が枝は 上つ枝は あ
 めを覆へり 中つ枝は 吾妻を覆へり 下枝は 鄙を覆へり 上つ枝の 枝の
 末葉は 中つ枝に おち觸らばへ 中つ枝の 枝の末葉は 下つ枝に おち觸
 らばへ 下枝の 枝の末葉は ありぎぬの 三重の子が 指擧がせる 瑞玉盃
 に うきしあぶら おちなづさひ みなこをろ こをろに 是しも あやにか
 しこし 高ひかる ひのみこ ことの かたりごとも こをば
 故此の歌を獻りしかば、其の罪赦さえにき。
 爾に大后歌はしける其の歌曰、

倭の この高市に 小高る 市の高處 新嘗屋に おひだてる 葉廣 五百箇
 眞椿 そがはの ひろりいまし そのはなの てりいます 高ひかる ひのみ
 こに とよみき たてまつらせ ことの かたりごとも こをば
 即ち天皇歌曰はしけらく、
 ももしきの おほみやひとは うづら鳥 領布とりかけて 鶴鶴 尾ゆきあ

へ にはすずめ うずすまりて けふもかも さかみづくらし 高ひかる
 ひのみやひと ことの かたりごとも こをば
 此の三歌は、天語歌也。故此の豊樂に、其の三重塚を譽めて、多祿に給ひき。
 是の豊樂の日、亦春日の袁杼比賣が、大御酒 獻る時に、天皇の歌曰ひたまへる、

みなそそく 臣のをとめ 秀禰とらすも 秀禰とり かたくとらせ 下がた
 く やがたくとらせ 秀禰とらす子
 此は宇岐歌也。爾に袁杼比賣歌を獻れる、其の歌曰、

やすみしし わがおほきみの あさとには い倚りだたし ゆふとには い倚
 りだたす 胸机が したの いたにもが 吾兄を
 此は志都歌也。

この天皇、御年百貳拾肆歳。御陵は河内の多治比の高鷲に在り。
 白髪大倭根子命、伊波禮の薺栗宮に坐しまして、天下治しめしき。此の天皇、皇后まします、
 御子もましますさざりき。故御名代として、白髪部を定めたまひき。故天皇 崩りまして後、天
 下治す可き王まします。是に日繼知しめさむ王を問ふに、市邊忍齒別王の妹、忍海郎女、亦の
 名は飯豊王、葛城の忍海の高木角刺宮に坐しませしき。

爾に山部連小楯、針間國の宰に任れる時に、其の國の人民名は志自牟が新室に到りて、樂す。是に盛に樂けて、酒酣なるとき、次第のままに皆舞ひぬ。故火燒き少子二口、籠の傍に居たる。其の少子等にも舞はしむるに、其の一少子、汝兄先づ舞ひたまへと曰へば、其の兄も、汝弟先づ舞ひたまへと曰ふ。如此相讓る時に、其の會へる人等、其の相讓らふ狀を咲ひき。爾遂に兄まつ舞ひ訖りて、次に弟舞はむとする時に、詠曰爲つらく、

物部の 我が夫子が 取り佩ける 大刀の手上に 丹畫き著け 其の緒には
赤幡を裁ち 赤幡立てて 見ゆれば五十隱る 山の三尾の 竹を (本)かき刈
り 未押し壓すなす 八絃琴を調べたる如 天下治め賜ひし 伊邪本別氣天皇
の 御子 市邊之押齒王の 奴末

とのりたまへば、即ち小楯連聞き驚きて、床より墮ち轉びて、其の室なる人等を追ひ出して、其の二柱の王子を、左右の膝の上に坐せまつりて、泣き悲みて、人民を集へて、假宮を作りて、其の假宮に坐せまつり置きて、驛使貢上りき。是に其の姨飯豐王、聞き歡ばして、宮に上らしめたまひき。

故天下治しめさむとせし間、平羣臣の祖、名は志毘臣、歌垣に立ちて、其の袁神命の婚さむとする美人の手を取れり。其の嬢子は、菟田首等が女、名は大魚といへり。爾袁神命も歌垣に立

たしき。是に志毘臣歌曰ひけらく、

おほみやの 彼つ鱈手 隅かたふけり
如此歌ひて、其の歌の末を乞ふ時に、袁神命歌曰ひたまはく、
おほたくみ 拙劣みこそ 隅かたふけれ

爾志毘臣亦歌曰ひけらく、
王の ころを寛み おみのこの やへのしばかき いらたたずあり
是に王子亦歌曰ひたまはく、

潮瀬の 波折をみれば あそびくる 鮪が鱈手に 妻たてりみゆ
爾志比臣愈忍りて歌曰ひけらく、

おほきみの みこのしばかき 八節結び 結り廻し きれむしばかき やけむ
しばかき

爾に王子亦歌曰ひたまはく、

大魚よし 鮪衝く海人よ 其が荒れば うらこほしけむ 鮪衝く鮪
如此歌ひて、鬮ひ明して、各退けましぬ。明且之時、意富神命袁神命二柱議云りたまはく、凡て朝廷の人等は、且には朝廷に参赴り、晝は志毘臣門に集ふ。余今は志毘臣ならず寢たらむ。其

の門に人も無けむ。故今ならずは、可謀り難けむとはかりて、即ち軍を興して、志毘臣が家を圍みて、殺りたまひき。

是に二柱の王子等、各に天下を相譲りたまひて、意富禰命其の弟袁禰命に譲りたまはく、針間の志自牟が家に住めりし時に、汝が命を顯したまはざらましかば、更に天下臨さむ君とはならざらましを、既に汝が命の功にぞ爲りける。故吾兄にはあれども、猶汝が命先づ天下を治しめしてよといひて、堅く譲りたまひき。故得辭みたまはずて、袁禰命ぞ、先づ天下治しめしける。袁禰之石築別命、近飛鳥宮に坐しまして、捌歳天下治しめしき。この天皇、石木王の女難波王に娶ひましき。子はましまさざりき。

此の天皇、其の父王市邊王の御骨を求きたまふ時に、淡海國なる賤き老嫗參り出て白しつらく、王子の御骨を埋みたりし所は、専ら吾能く知れり。亦其の御齒以て知る可しとまをしき。御齒は、三枝如す押齒坐せりき。爾民を起てて、土を掘りて、其の御骨を求きて、即ち其の御骨を獲たまひて、其の蚊屋野の東の山に、御陵作りて葬めまつりて、韓俗が子等に、其の御陵を守らしめたまひき。然後持上其御骨也。故還り上り坐して、其の老嫗を召して、其の地を失れず見置きて知れりしことを譽めて、置目老嫗といふ名號を賜ひき。仍て宮の内召し入れて、敦く廣く慈み賜ひき。故其の老嫗の住む屋をば、宮邊近く作りて、日毎に必ず召しき。故大殿の戸に鐸を懸けて、其の老

嫗を召さむとする時は、必ず其の鐸を引き鳴したまひき。爾作御歌みしたまへる、其の歌曰、
淺茅原 小谷を過ぎて ももづたふ 鐸ゆるくも 置目來らしも
是に置目老嫗、僕甚く耆老にたれば、本國に退らま欲しと白しき。故白せる隨退りたまふ時に、天皇見送らして、歌曰ひたまはく、

置目もや 淡海の置目 あすよりは みやまがくりて みえずかもあらむ

初め天皇、難に逢ひて、逃げましし時に、其の御糧を奪りし猪甘の老人を求きたまひき。是に求ぎ得たるを、喚び上げて、飛鳥河の河原に斬りて、皆其の族どもの膝の筋を斷ちたまひき。是を以て今に至るまで、其の子孫倭に上る日、必ず自から跛く也。故其の老の所在を能く見しめき。故其地を志米須と謂ふ。

天皇、其の父王を殺したまひし大長谷天皇を深く怨みまつりて、其の靈に報いむと欲ほしき。故其の大長谷天皇の御陵を毀らむと欲ほして、人を遣す時に、其の伊呂兄意富禰命の奏言したまはく、是の御陵を破壊らむには、他人を遣す可からず。専ら僕自から行きて、天皇の御心の如破壞りて參り出むとまをしたまひき。爾天皇、然らば命の隨幸行せと詔りたまひき。是を以て意富禰命自から下り幸して、其の御陵の傍を少し掘りて、還り上らして、既に掘り壞りぬと復奏言したまひき。爾に天皇、其の早く還り上りませることを異みまして、如何に破壊りたまひしぞと

詔りたまへば、其の陵の傍の土を少し掘りつと答白したまひき。天皇詔りたまはく、父王の仇を報いむと欲ふなれば、必ず其の陵を悉に破壊りてむを、何ぞ少し掘りたまひしぞとのりたまへば、答曰したまはく、然爲つる所以は、父王の怨を、其の靈に報いむと欲はすは、誠に理也。然れども其の大長谷天皇は、父の怨には爲れども、還りては我が従父に爲し、亦天下治しめしし天皇にますを、今單に父の仇といふ志をのみ取りて、天下治しめしし天皇の陵を悉に破壊りなば、後人必ず誹謗りまつりてむ。唯父王の仇は、報いずはある可からず。故其の陵邊を少し掘りつ。既に是く取みせまつりてあれば、後世に示すにも足へなむ。如此奏したまひつれば、天皇、是も亦大理なり、命の如くて可しとぞ答詔りたまひける。

故天皇崩りまして、即ち意富神命天津日繼知しめしき。この天皇、御年參拾捌歳。八歳天下治しめしき。御陵は片岡の石坏岡の上に在り。

意富神命、石上の廣高宮に坐しまして、天下治しめしき。この天皇、大長谷若建天皇の御子春日大郎女に娶ひまして、生みませる御子、高木郎女、次に財郎女、次に久須毘郎女、次に手白髪郎女、次に小長谷若雀命、次に眞若王。又丸瀧日爪臣の女、糠若子郎女を娶して、生みませる御子、春日山田郎女。此の天皇の御子たち、并せて七柱ます。此の中に小長谷若雀命は天下治しめしき。小長谷若雀命、長谷の列木宮に坐しまして、捌歳天下治しめしき。此の天皇、太子ましま

さす。故御子代として、小長谷部を定めたまひき。御陵は片岡の石坏岡に在り。この天皇、既に崩りまして、日續知しめす可き王まします。故品天皇の五世の孫、袁本桴命を、近淡海國より上り坐さしめて、手白髪命に合せまつりて、天下を授け奉りき。

袁本桴命、伊波禮の玉穂宮に坐しまして天下治しめしき。この天皇、三尾君等が祖名は若比賣を娶して生みませる御子、大郎子、次に出雲郎女。二柱、又尾張連等が祖、凡連が妹目子郎女を娶して生みませる御子、廣國押建金日命、次に建小廣國押楯命。二柱、又意富神天皇の御子手白髪命、是は太后にますに娶ひまして生みませる御子、天國押波流岐廣庭命。一柱、又息長眞手王の女麻組郎女を娶して生みませる御子、佐佐宜郎女。一柱、又坂田大侯王の女、黒比賣を娶して生みませる御子、神前郎女、次に茨田郎女、次に(馬來)田郎女。(三柱) 又茨田連小望が女關比賣を娶して生みませる御子、茨田大郎女、次に白坂活日郎女、次に小野郎女、亦の名は長目比賣。三柱、又三尾君加多夫が妹倭比賣を娶して生みませる御子、大郎女、次に丸高王、次に耳王、次に赤比賣郎女。四柱、又阿倍の波延比賣を娶して生みませる御子、若屋郎女、次に都夫良郎女、次に阿豆王。三柱、此の天皇の御子等、并せて十九王。男、七柱、女、十二柱。此の中に天國押波流岐廣庭命は、天下治しめしき。次に廣國押建金日命も天下治しめしき。次に建小廣國押楯命も天下治しめしき。次に佐佐宜王は、伊勢神宮を拜りたまひき。

此の御世に、笠紫君石井、天皇之命に従はずして、禮无きこと多かりき。故物部荒甲之大連、大伴之金村連一人を遣して、石井を殺らしめたまひき。

この天皇、御年肆拾參歲、御陵は三嶋の藍に在り。

廣國押建金日命、勾の金箸宮に坐しまして天下治しめしき。此の天皇御子ましまさざりき。

御陵は河内の古市の高屋村に在り。

建小廣國押楯命、楯桐の鷹入野宮に坐しまして天下治しめしき。この天皇、意富那天皇の御子

橋之中比賣命に娶ひまして、生みませる御子、石比賣命、次に小石比賣命、次に倉之若江王。

又川内之若子比賣を娶して、生みませる御子、火穗王、次に惠波王。此の天皇の御子等并せて五

王。男三、女二。

故火穗王は、志比陀君の祖。惠波王は、倉那君、多治比君の祖也。

天國押波流岐廣庭天皇、師木嶋大宮に坐しまして、天下治しめしき。この天皇、楯桐天皇

の御子石比賣命に娶ひまして、生みませる御子、八田王、次に沼名倉太玉敷命、次に笠縫王。三柱

又其の弟小石比賣命に娶ひまして、生みませる御子、上王。一柱 又春日の日爪臣の女糠子郎女を

娶して、生みませる御子、春日山田郎女、次に麻呂古王、次に宗賀之倉王。三柱 又宗賀之稻目宿

禰大臣の女岐多斯比賣を娶して、生みませる御子、橋之豐日命、次に妹石桐王、次に足取王、次

に豐御氣炊屋比賣命、次に亦麻呂古王、次に大宅王、次に伊美賀古王、次に山代王、次に妹大伴

王、次に櫻井之玄王、次に麻奴王、次に橋本之若子王、次に泥杼王。十三柱 又岐多志比賣命の妹

小兒比賣を娶して、生みませる御子、馬木王、次に葛城王、次に間人穴太郎王、次に三枝部穴太

部王、亦の名は須賣伊呂杼、次に長谷部若雀命。五柱 凡て此の天皇の御子等、并せて廿五王。

此の中に沼名倉太玉敷命は、天下治しめしき。次に橋之豐日命も、天下治しめしき。次に豐御氣

炊屋比賣命も、天下治しめしき。次に長谷部之若雀命も、天下治しめしき。并せて四王なも天下

治しめしける。

沼名倉太玉敷命、他田宮に坐しまして、壹拾肆歲天下治しめしき。此の天皇、庶妹豐御食炊

屋比賣命に娶ひまして、生みませる御子、靜貝王、亦の名は貝鱗王、次に竹田王、亦の名は小貝

王、次に小治田王、次に葛城王、次に宇毛理王、次に小張王、次に多米王、次に櫻井玄王。八柱

又伊勢の大鹿首の女小熊子郎女を娶して、生みませる御子、布斗比賣命、次に寶王、亦の名は糠

代比賣王。二柱 又息長眞手王の女、比呂比賣命に娶ひまして、生みませる御子、忍坂日子人太子、

亦の名は麻呂古王、次に坂勝王、次に宇遲王。三柱 又春日中若子、か女老女子郎女を娶して、生み

ませる御子、難波王、次に桑田王、次に春日王、次に大侯王。四柱

此の天皇の御子等、并せて十七王ませる中に、日子人太子、庶妹田村王亦の名は糠代比賣

命に娶ひまして、生みませる御子、岡本宮に坐しまして天下治しめしし天皇、次に中津王、次に多良王。三柱 又漢王の妹大俣王に娶ひまして、生みませる御子、智奴王、次に妹桑田王。二柱 又麻妹、玄王に娶ひまして、生みませる御子、山代王、次に笠縫王。二柱 并せて七王。御陵は川内の科長に在り。

橘豊日命、池邊宮に坐しまして、參成天下治しめしき。此の天皇、稻目宿禰大臣の女、意富藝多志比賣を娶して、生みませる御子、多米王。一柱 又庶妹間人穴太部王に娶ひまして、生みませる御子、上宮之廢戸豐聰耳命、次に久米王、次に植栗王、次に茨田王。四柱 又當麻之倉首比呂が女、飯女之子を娶して、生みませる御子、當麻王、次に妹須賀志呂古郎女。

此の天皇、御陵は石寸池の上に在りしを、後に科長の中陵に遷しまつりき。
長谷部若雀天皇、倉橋柴垣宮に坐しまして、肆歲天下治しめしき。御陵は、倉橋岡の上に在り。

豐御食炊屋比賣命、小治田宮に坐しまして、參拾漆歲天下治しめしき。御陵は大野岡の上に在りしを、後に科長の大陵に遷しまつりき。

古事記下卷終

解題

古事記は今を去ること一千二百餘年、元明天皇の和銅五年に出來た書物で、撰者を太朝臣安萬侶といふ。我が國で書かれた記録で、現存してゐるものとしては、これが最も古い。しかし古事記より前に又種々の記録のあつたことも、明らかに證據がある。

天武天皇は、それ等の記録に傳へて居る事實に彼是誤謬があるので、それを改定して後世に傳へようといふ御思召で、舍人稗田阿禮に勅して、「帝皇の日繼、及び先代の舊辭」を誦み習はしめられたといふ。天皇崩御あらせられて二十餘年、和銅四年九月に至つて、元明天皇は新に太安萬侶に詔し、阿禮の誦む所の御歷代天皇の御紀及び古來の言傳へを撰録せしめ給うた。乃ち翌年正月出來上つたのが古事記三卷である。されば古事記撰述の目的は、我が國古代の傳説及び史實を忠實且つ精確に傳へるにあつた。古事記が出來てから九年目に、日本書紀が勅撰せられた。同じく我が國古代の歴史を書いた書物であるが、これは悉く漢文で書いてある。然るに古事記は漢字こそ用ひてあるが、我が國語を以て書いたもので、訓を主とした、いはば國文である。

古事記の本文を熟讀すると、決して一人の語る所を筆録したもの、又は一箇の史料を潤色削減

したものではないと考へられる。一人の物語や一箇の史料によつたものであるとすれば、敘述は自から單純で、且つ矛盾撞著のあるべき筈はない。日本書紀には本文にあげた事項と多少相違のある説は、「一書に曰」として、本文の次に一字下げて列擧してある。書紀の編纂に際して、多數の史料を有してゐることは、これで明瞭である。然るに古事記は、或事項については、書紀の本文よりも、又書紀に謂ふ所の一書のどれよりも委しい記事がある、即ち書紀の本文に用ひられた史料や、これと多少相違のある若干の史料などを綜合して書いたのではないかと思はれる筋合がある。又前後に關係のない記事が中間に介在してゐる場合もある。又一條の物語中、同一であるべき神の名や物の名が前後相異つて居る場合もある。是等の點から考へると、古事記は稗田阿禮一人の物語を筆録し、又單に一箇の史料を潤色削減したものとは、どうしても思はれない。

古事記といひ、日本書紀といひ、何れも我が國古來の傳説及び史實を後世に遺さうとしたもので、この二書が殆ど時を同じうして出來た所以は、當時の國民の自覺心が大いに高まつた爲であらう。即ち海外諸國に對して、日本あることを知り、光輝ある我が國家の起源を語り、尊嚴無比なる我が皇室の御由來を明らかにしようとした結果が、二大記録の編纂となつたのであらう。但し重ねていふ如く、古事記は訓を主とし、書紀は文を宗としてゐるので、後世書紀の方が弘く行はれた。書紀の古寫本は種々残つて居り、中にも應神紀の殘缺には、奈良時代の筆寫と認められ

るものさへあるのに、古事記の方は、最も古いと言はれてゐる眞福寺本（名古屋市眞福寺寶生院所藏國寶『古事記』）さへ、今を去る五百六十七年、建徳二年及び文中元年に僧賢瑜の書寫したものである。古寫本の少いことも、その書の行はれなかつた一證であらう。それを近世本居宣長が發奮、刻苦して古訓を考へ、古意を究めて『古事記傳』四十八卷を著し、本書を弘く世に紹介したのは、顯著なる功績と言はねばならぬ。宣長の門下長瀬眞幸は、後、『古事記傳』により、文字も訓も新に正しく刻まして新刻古事記三卷を世に送つた。これが世に謂ふ宣長の『正古訓古事記』である。當文庫本は、その『正古訓古事記』の初版、即ち享和三年癸亥十月發行のものを底本としたのである。

昭和十二年春

幸田成友

凡例

- 一、本書は『正古訓古事記』を假名交り文に書き下したものである。底本は享和三年版を用いた。
- 一、原文の漢字はなるべく保存した。
- 一、原文に萬葉假名を以て書かれた語は、固有名詞及特殊なもの外すべて平假名に改めた。
- 一、歌の萬葉假名は平假名に改めた上、適宜『古事記傳』に據つて漢字を當てた。
- 一、純粹の漢文體に意訓が施されてゐて、その文字を用ひて讀み下し難いものは、特に原形傍訓の儘に示した。
- 一、底本に於て、寫本の寫し誤りとして訓み丈を改められてあるものは、『古事記傳』に據つて文字をも正した。
- 一、段落は、凡て『古事記傳』に従つてこれを設けた。尙、歌は『古事記傳』にも同行に續けてあるものを特に別行にした。因に本書卷末の目次も「古事記傳目錄」の段の分ち方に従つたものである。
- 一、本書に、小活字（六ポイント）を以て組んだのは、底本に小さく二行に割つてある箇所である。

- 一、尙、底本の割註の中、單に音訓を指示したのみものは悉く省いた。
- 一、本書に、を右傍に附したのは、宣長が「讀み得ず」或は「讀む可からず」として、底本に傍訓を施してない箇所である。
- 一、本書に（ ）を以て示したのは、底本の本文中○符で圍んで補つた文字を、讀み下した箇所である。
- 一、底本の本文中□符を附して、衍なる旨指摘された文字はこれを省いた。

目次

古事記序

古事記上卷

天地の初發の段……………七頁一行

神世七代の段……………七七

淤能基呂嶋の段……………八三

みとのまぐはひの段……………八七

大八嶋成出の段……………九七

諸神等生坐の段……………一〇七

伊邪那美命御石隠の段……………一一六

迦具土神被殺の段……………一二五

夜見國の段……………一三二

御身蔭の段……………一四一三

三柱の貴の御子御事依の段……………一六八

須佐之男命御啼いさちの段……………一六三

御うけひの段……………一七五

男御子女御子御詔別の段……………一八一五

須佐之男命御荒備の段……………一九一一

天石屋戸の段……………二〇五

須佐之男命御被避の段……………二一〇

八俣遠呂智の段……………二二二

須賀宮の段……………二二七

大國主神の御祖の段……………二三四

稻羽の素菴の段……………二四七

手間山の段……………二五一

根堅洲國の段……………二六八

八千矛神の御妻問の段……………二八八

うきゆひの段……………二九二

大國主神の御末の神等の段……………三一二

少名毘古那神の段……………三一五

幸魂奇魂の段……………三二〇

大年神羽山戸神御子等の段……………三二五

國平御議の段……………三三二

天若日子の段……………三四六

大國主神國避の段……………三六一

御孫命御天降の段……………三九四

日向宮御鎮座の段……………四〇二

媛女君の段……………四一六

媛田毘古神の阿邪訶の段……………四一九

大山津見神詛の段……………四二一

木花佐久夜毘賣の御子産の段……………四二四

御幸易の段……………四三七

古事記中卷

綿津見宮の段……………四四一

火照命奉仕の段……………四六一

難羽産屋の段……………四七五

鶉草葺不合命の御子等の段……………四八九

白檮原宮の段 神武……………四九一

東行兒——那賀須泥毘古舌——高倉下舌——八咫鳥舌——兄宇迦斯、弟宇迦斯舌——忍坂の
 大室、土雲八十建 舌——勢夜陀多良比賣 舌——伊須氣余理比賣 舌——當義志美美命 舌

高岡宮の段 紘堵……………五八二

浮穴宮の段 安寧……………五八五

境岡宮の段 懿德……………五八三

掖上宮の段 孝昭……………五九四

秋津嶋宮の段 孝安……………五九一

黒田宮の段 孝璽……………五九一

境原宮の段 孝元……………六〇一四

伊邪河宮の段 開化……………六一一五

水垣宮の段 崇神……………六三一五

意富多多泥古高——活玉依比賣命

玉垣宮の段 垂仁……………六七一五

沙木毘賣命、沙木毘古王充

日代宮の段 景行……………七五二

小碓命共——熊曾建志——倭建命と稱へ調す大——出雲建大——東方十二道の荒夫琉神大

——倭比賣命充——燒遣充——弟橋比賣命命——酒折宮命——美夜受比賣命——尾津前の一

松命——能須野命——白鳥御陵命

志賀宮の段 成務……………八五二

訶志比賣命 仲哀……………八六一

息長帶比賣命命——建内宿禰大臣命——新羅之國命——香坂王、忍熊王命

明宮の段 應神……………九一三

大山守命、大雀命命——宮主矢河枝比賣命——髮長比賣命——百濟の貢命——宇遲能利紀郎子

古事記下卷

天之日矛命——伊豆志登賣命

高津宮の段 仁德……………一〇三一

國見命——大后石之日賣命命——黒日賣命——八田若郎女命——速禮別王、女鳥王命

若櫻宮の段 履中……………一一一五

墨江中王命——曾喜加理命

多治比賣宮の段 反正……………一二四二

遠飛鳥宮の段 允恭……………一二五三

木製輕太子、輕太郎女命

穴穗宮の段 安廣……………一二九二

目弼王命

朝倉宮の段 雄略……………一三二〇

若日下部王命——赤猪子命——吉野川の濱の童女命——三重琛命

斐栗宮の段 清寧……………一三九二

富那命、真那命二三

近飛鳥宮の段 顯宗……………一三七

 賈目老嫗二三——猪甘の老人二三

廣高宮の段 仁賢……………一三四

列木宮の段 武烈……………一三四

玉穗宮の段 繼體……………一三五

金磐宮の段 安閑……………一三六

檜埴宮の段 宣化……………一三六

師木嶋宮の段 欽明……………一三七

他田宮の段 敏達……………一三八

池邊宮の段 用明……………一三八

倉椅宮の段 崇峻……………一三九

小治田宮の段 推古……………一三九

(大森製本)

昭和十一年三月二十二日
昭和十一年四月二十五日
昭和十一年五月九日
昭和十一年六月九日
昭和十一年七月九日
昭和十一年八月九日
昭和十一年九月九日
昭和十一年十月九日
昭和十一年十一月九日
昭和十一年十二月九日

古事記★
定價二十錢

版書科教・庫文波岩

1

發行所

東京市神田區
一ツ橋二丁目三番地

岩波書店

電話一〇一八七
九段一〇二九九
銀座日座東京二六二
電話一〇一八八
小賣部一〇一八八
電話一〇一八八

校訂者

幸田成友

發行者

東京市神田區一ツ橋二丁目三番地
岩波茂雄

印刷者

東京市神田區錦町三丁目十一番地
白井赫太郎

精興社印刷

岩波文庫教

第一編	古事記	幸田成友校訂	定價二十錢
第二編	白文萬葉集上卷	佐佐木信綱編	定價一圓
第三編	白文萬葉集下卷	佐佐木信綱編	定價八十錢
第四編	新訓萬葉集上卷	佐佐木信綱編	定價八十錢
第五編	新訓萬葉集下卷	佐佐木信綱編	定價六十錢
第六編	古今和歌集	尾上八郎校訂	定價四十錢
第七編	源氏物語(一)	島津久基校訂	定價四十錢
第八編	源氏物語(二)	島津久基校訂	定價四十錢
第九編	源氏物語(三)	島津久基校訂	定價四十錢
第十編	源氏物語(四)	島津久基校訂	定價六十錢
第十一編	源氏物語(五)	島津久基校訂	定價四十錢
第十二編	枕草子(春曙抄)上卷	池田龜鑑校訂	定價四十錢
第十三編	枕草子(春曙抄)中卷	池田龜鑑校訂	定價四十錢
第十四編	枕草子(春曙抄)下卷	池田龜鑑校訂	定價四十錢
第十五編	大鏡	和田英松校訂	定價四十錢
第十六編	新古今和歌集	佐佐木信綱校訂	定價六十錢

科書版目錄

第十七編	平家物語上卷	山田孝雄校訂	定價四十錢
第十八編	平家物語下卷	山田孝雄校訂	定價六十錢
第十九編	徒然草	西尾實校訂	定價二十錢
第二十編	奥の細道(その他)	伊藤松宇校訂	定價二十錢
第二十一編	日本永代藏	和田萬吉校訂	定價二十錢
第二十二編	世間胸算用	和田萬吉校訂	定價二十錢
第二十三編	訓讀日本書紀上卷	黑板勝美編	定價二十錢
第二十四編	訓讀日本書紀中卷	黑板勝美編	定價六十錢
第二十五編	訓讀日本書紀下卷	黑板勝美編	定價六十錢
第二十六編	方丈記	山田孝雄校訂	定價二十錢
第二十七編	紫式部日記	池田龜鑑校訂	定價二十錢
第二十八編	更級日記	西下經一校訂	定價二十錢
第二十九編	增鏡	和田英松校訂	定價四十錢

附記—本叢書は、高等諸學校教科用に供するを目標として編輯したものであり、四六判であるが、一般國文學研究者に取つて非常に便利な書入本となり得ると信じます。【フワイバー装】

讀書子に寄す

岩波茂雄

岩波文庫發刊に際して

眞理は萬人によつて求められることを自ら欲し、藝術は萬人によつて愛されることを自ら望む。嘗ては民を愚昧ならしめるために愚藝が最も狭き堂宇に閉鎖されたことがあつた。今や知識と美とを特權階級の獨占より奪ひ返すことはつねに進取的なる民衆の切實なる要求である。岩波文庫は此要求に應じそれに勵まされて生まれた。それは生命ある不朽の書を少數者の書齋と研究室とより解放して街頭に開き立たしめ民衆に任せしめるであらう。近時大量生産預約出版の流行を見る。その廣告宣傳の狂態は姑く措くも後代に貽す全書が其編輯に萬全の用意をなしたるか。千古の典籍の翻譯企圖に敬虔の態度を缺かざりしか。更に分賣を許さず讀者を堅持して數十冊を強ふるが如き、果して其揚言する愚藝解放の所以なりや。吾人は天下の名士の聲に和して之を推擧するに躊躇するものである。この秋にあつて岩波書店は自己の責務の愈重大なるを思ひ、從來の方針の徹底を期するため既に十數年以前より志して來た計畫を慎重審議この際斷然實行することにした。吾人は範をかのレクラム文庫にとり、古今東西に互つて文藝哲學社會科學自然科學等種類の如何を問はず、苟も萬人の必讀すべき眞に古典的價値ある書を極めて簡易なる形式に於て逐次刊行し、あらゆる人間に須要なる生活向上の資料、生活批判の原理を提供せんと欲する。この文庫は預約出版の方法を排したるが故に、讀者は自己の欲する時に自己の欲する書を各個に自由に選擇することが出来る。携帶に便にして價格の低きを最主とするが故に、外觀を顧みざるも内容に至つては厳選最も力を盡し從來の岩波出版物の特色を益發揮せしめようとする。この計畫たるや世間の一時の投機的なるものと異り、永遠の事業として吾人は微力を傾倒しあらゆる犠牲を忍んで今後永久に繼續發展せしめ、もつて文庫の使命を遺憾なく果さしめることを期する。藝術を愛し知識を求むる士の自ら進んで此舉に参加し、希望と忠告とを寄せられることは吾人の熱望するところである。その性質上經濟的には最も困難多き此事業に敢て當らんとする吾人の志を諒として其達成のため世の讀書子とのうらはしき共同を期待する。

昭和二年七月

既刊書目

古事記 幸田成友校訂	竹取物語並附録 島津久基校訂	大鏡 和田英松校訂
新日本書紀 上巻 黒板勝美編	伊勢物語 單代弘賢校訂	梁塵秘抄 佐佐木信綱校訂
舊日本書紀 中巻 黒板勝美編	土佐日記 池田龜鑑校訂	新山家集 佐佐木信綱校訂
新日本書紀 下巻 黒板勝美編	倭漢朗詠集 山田孝雄校訂	水鏡 和田英松校訂
記紀歌論集 武田祐吉校註	枕草子(春曙抄) 上巻 池田龜鑑校訂	新古今和歌集 佐佐木信綱校訂
祝詞・壽詞 千田 憲編	枕草子(春曙抄) 下巻 池田龜鑑校訂	藤原定家(附定家) 佐佐木信綱校訂
續日本紀宣命 倉野野司編	源氏物語(一) 島津久基校訂	新金槐和歌集(附補) 費藤茂吉校訂
新萬葉集 上巻 佐佐木信綱編	源氏物語(二) 島津久基校訂	中世歌論集 久松潜一編
新萬葉集 下巻 佐佐木信綱編	源氏物語(三) 島津久基校訂	六百番歌合 峯岸巖秋校訂
白萬葉集 上巻 佐佐木信綱編	源氏物語(四) 島津久基校訂	方丈記 山田孝雄校訂
白萬葉集 下巻 佐佐木信綱編	源氏物語(五) 島津久基校訂	松浦宮物語 藤須賀清子校訂
古語拾遺 加藤玄智校訂	紫式部日記 池田龜鑑校訂	保元物語 岸谷誠一校訂
神樂歌・催馬樂 武田祐吉編	更級日記 西下隆一校訂	平家物語 岸谷誠一校訂
古今和歌集 尾上八郎校訂	三條西榮花物語 上巻 三條西公正校訂	平家物語 上巻 山田孝雄校訂
	三條西榮花物語 中巻 三條西公正校訂	東關紀行海道記 玉井幸助校訂
	三條西榮花物語 下巻 三條西公正校訂	十六夜日記 玉井幸助校訂

增	神皇正統記	鏡	和田英松校訂	世間胸算用	和田英松校訂	鷓鴣	衣石田元季校訂
徒	然	草	西尾實校訂	西鶴	西尾實校訂	雲萍	志
兼	好法師家集	西尾實校訂	兼	奥の細道その他	伊藤松字校訂	酒落	高木好次校訂
改	訂花傳書	野上豐一校訂	芭蕉	芭蕉七部集	伊藤松字校訂	雨月	語
申	樂談義	野上豐一校訂	芭蕉	芭蕉俳句集	原恩藏校訂	玉勝	本
能	作書・學習條條	野上豐一校訂	芭蕉	芭蕉連句集	小宮豐隆編	玉勝	間
至	花選集	野上豐一校訂	芭蕉	芭蕉書翰集	勝峯晋風編	玉勝	問
諸	伽草子	鳥津久基編校	芭蕉	芭蕉花屋日記	小宮豐隆校訂	玉勝	間
閑	吟集	藤田德太郎校註	芭蕉	風俗文選	伊藤松字校訂	玉勝	問
好	色一代男	和田萬吉校訂	芭蕉	燕村七部集	伊藤松字校訂	玉勝	問
好	色一代女	和田萬吉校訂	芭蕉	燕村俳句集	原恩藏編註	玉勝	問
好	色五人女	和田萬吉校訂	芭蕉	松の落葉	藤田德太郎校註	玉勝	問
武	道傳來記	和田萬吉校訂	芭蕉	松の落葉	藤田德太郎校註	玉勝	問
武	家義理物語	和田萬吉校訂	芭蕉	松の落葉	藤田德太郎校註	玉勝	問
日	本永代藏	和田萬吉校訂	芭蕉	松の落葉	藤田德太郎校註	玉勝	問

南	里見八犬傳	小池徳五郎校訂	加	賀	河竹紫俊校訂	二	宮翁夜話	羅住正兒校訂
鈴	木北越雪譜	岡田武校校訂	加	賀	河竹紫俊校訂	海	舟座談	藤本善治編
東	海道膝栗毛	十運合一九作	加	賀	河竹紫俊校訂	日	本道徳論	西村茂樹著
柳	多留	上卷 西原柳雨校訂	加	賀	河竹紫俊校訂	講	孟餘話	吉田松陰著
柳	多留	中卷 西原柳雨校訂	加	賀	河竹紫俊校訂	福	澤撰集	藤澤諭吉著
柳	多留	下卷 西原柳雨校訂	加	賀	河竹紫俊校訂	文	明論之概	藤澤諭吉著
浮	世風	式多三馬作	加	賀	河竹紫俊校訂	寒	民選集	中江篤介著
浮	世風	式多三馬作	加	賀	河竹紫俊校訂	兆	民選集	中江篤介著
萬	載狂歌集	野崎左文校訂	加	賀	河竹紫俊校訂	日	本開化小史	田口卯吉著
德	和歌後萬載集	野崎左文校訂	加	賀	河竹紫俊校訂	內	村鑑三隨筆集	內村鑑三著
忍	ぶの忍	助太阿彌校訂	加	賀	河竹紫俊校訂	清	澤文集	清澤滿之著
忍	ぶの忍	助太阿彌校訂	加	賀	河竹紫俊校訂	網	鳥梁川集	安倍能成編
赤	垣源藏・仲光	河竹紫俊校訂	加	賀	河竹紫俊校訂	入	木道三部集	藤校訂
辨	の平右衛門	河竹紫俊校訂	加	賀	河竹紫俊校訂	歌	舞音樂略史	小中村清麿著
實	錄先代萩	河竹紫俊校訂	加	賀	河竹紫俊校訂	俗	樂旋律考	上原六郎著
孝	子善吉	河竹紫俊校訂	加	賀	河竹紫俊校訂	論	畫四種	坂崎坦編

茶の 本村 三賢

現代文學

小説神 隨 坪内逍遙著
 新曲 浦島 坪内逍遙著
 新曲 結映 坪内逍遙著
 うたかたの記 三島 坪内逍遙著
 キタ・セクスアリス 森 鷗外著
 雁 森 鷗外著
 護持院ケ原の敷討 森 鷗外著
 左千夫歌集 豊後 吉野著
 左千夫歌論抄 土屋 文明著
 二人女房 尾崎 紅葉著
 子規歌集 正岡 規著
 墨汁一滴 正岡 規著
 病牀六尺 正岡 規著
 仰臥漫録 正岡 規著
 漾虛集 夏目 漱石著

坊つちやん 夏目漱石著
 枕 夏目漱石著
 行 人 夏目漱石著
 こゝろ 夏目漱石著
 硝子戸の中 夏目漱石著
 道 草 夏目漱石著
 明 暗 上巻 夏目漱石著
 明 暗 下巻 夏目漱石著
 風流佛・一口劍 幸田 露伴著
 五重塔 幸田 露伴著
 太郎坊 他三篇 幸田 露伴著
 自然と人生 徳富 花房著
 北村透谷集 島崎 勲著
 文道遺稿 金築 松桂著
 観音岩 前篇 川上 眉山著
 観音岩 後篇 川上 眉山著
 源をぢ 他二篇 國木 田丸著

運命論者 他三篇 國木 田丸著
 號 外 他六篇 國木 田丸著
 蒲團・一兵卒 田山 花袋著
 生 田山 花袋著
 田舎教 師 田山 花袋著
 晩翠詩抄 土井 晩翠著
 にっこり 八木 龍一著
 たけくら 八木 龍一著
 藤村詩抄 島崎 勲著
 千曲川のスケッチ 島崎 勲著
 生ひ立ちの記 島崎 勲著
 柳の實の熟する時 島崎 勲著
 飯倉だより 島崎 勲著
 春を待ちつつ 島崎 勲著
 高野 豊泉 鏡花著
 眉かくしの豊泉 鏡花著
 註文帳・白鷺泉 鏡花著
 歌行 燈泉 鏡花著
 風流機法 他三篇 高濱 虚子著

上田敏詩抄 野野 浩著

赤彦歌集 久保 田不二子著
 有明詩抄 浦原 有明著
 泣菫詩抄 藤田 泣菫著
 宣言 有島 武郎著
 長塚節歌集 豊後 吉野著
 入江のほとり 正宗 白鳥著
 生まざりしならば 正宗 白鳥著
 千鳥 他四篇 鈴木 三重吉著
 桑の實 鈴木 三重吉著
 銀の匙 中 勘助作
 煤の煙 森田 草平作
 和解の姉 男 志賀 直哉著
 小僧の神様 他十篇 志賀 直哉著
 若山牧水歌集 若山 喜志子著
 白秋詩抄 北原 白秋著
 白秋抒情詩抄 北原 白秋著

海神丸 野上 彌生子著
 大石良雄 野上 彌生子著
 そ の 妹 武者小路 實篤著
 幸福者 武者小路 實篤著
 人間萬歳 武者小路 實篤著
 友情 武者小路 實篤著
 波 山本 有三著
 青銅の基督 長與 善郎著
 陸奥直次郎 長與 善郎著
 出家とその弟子 倉田 百三著
 布施太子の入山 倉田 百三著
 偷盗 芥川 龍之介著
 河童 芥川 龍之介著
 侏儒の言葉 芥川 龍之介著
 春夫詩鈔 佐藤 春夫著
 厭世家の誕生 佐藤 春夫著

英・米文學

ニートピア (理想郷) トマス・モア著
 ベーコン隨筆集 神吉 三郎譯
 フォーrest博士 松尾 相譯
 闘技者サムソン 中村 爲治譯
 ブレイク抒情詩抄 森島 文章譯註
 パーリンズ詩集 中村 爲治譯
 湖の麗人 スコット 著
 ラム沙翁物語 野上 彌生子譯
 イン・メモリアム 入江 直樹譯
 イノック・アーデン 入江 直樹譯
 クリスマス・カロール 森田 草平譯
 爐邊のこほろぎ 本多 顯彰譯
 二都物語上巻 佐々木 直次郎譯
 プラウサウル 藤 勇譯
 喜劇論 相良 徳三譯

エレホ	山本政喜	★
ベーター論集	田部重治	★
緑の木	阿部知二	★
幻燈を退ふ女(他六篇)	森村豊	★
月下の影(他五篇)	森村豊	★
オ・ヘルン東西文學評論	三宅嘉三郎	★
新アラビヤ夜話	佐藤嘉三郎	★
寶	佐藤嘉三郎	★
ジーキル博士と	佐藤嘉三郎	★
ドリアン・グレイ	岩田良吉	★
サ	西村孝次	★
獄中	佐々木直次郎	★
裸夫の家	阿部知二	★
人と超人	市川又彦	★
思想の遠し得る限り	市川又彦	★
(原名メテオ時代に離れ)	相良徳三	★
聖女チロウ	野上豊一郎	★
シャロック	コナン・ドイル	★
ホームズの冒険	コナン・ドイル	★
ピーター・パン	ジャコブ・ロンドン	★
アイランド	ジャコブ・ロンドン	★
隊を組んで歩く妖精達	山宮允	★
キツプリング詩集	中村爲徳	★
ジャングルブック	キツプリング	★
争	石田孝太郎	★
静寂の宿	石田孝太郎	★
ユリシイズ(一)	森田名原他四名	★
ユリシイズ(二)	森田名原他四名	★
ユリシイズ(三)	森田名原他四名	★
ユリシイズ(四)	森田名原他四名	★
ユリシイズ(五)	森田名原他四名	★
ニリシイズ	森田名原他四名	★
マンズフィールド	山正毅	★
スケッチ・ブック	高松雄	★
自然	片上伸	★
想集	佐藤清	★
エヴァンジェリン	野上豊一郎	★
ボウ黒	森村豊	★
草の葉	森村豊	★
王子と乞食	村岡花子	★
ねぢの廻轉	村岡花子	★
小公子	若松睦子	★
あしなが	若松睦子	★
おぢさん	若松睦子	★
荒野に生れて	本多顯彰	★
地平の彼方	清野賢一郎	★
獨・塊文學		
賢者ナイタン	大庭米治郎	★
フアウスト第一部	鷗外	★
フアウスト第二部	鷗外	★
ヘルマンとドロテア	佐藤通次	★
若いエルテルの悩み	若野賢一	★
平ルハルム	上巻	★
平ルハルム	下巻	★
マイスター	久男	★

たぐみと戀	實吉捷郎	★
ブレンシユタイン	常良	★
ヴイルヘルム・テル	櫻井政隆	★
ヒュペーリオン	渡邊格司	★
黄金寶壺	石川道雄	★
牡猫の生觀	ホフマン	★
牡猫の生觀	ホフマン	★
影を失くした男	井汲越次	★
全グリム童話集 第一	金田一	★
全グリム童話集 第二	金田一	★
全グリム童話集 第三	金田一	★
全グリム童話集 第四	金田一	★
全グリム童話集 第五	金田一	★
全グリム童話集 第六	金田一	★
全グリム童話集 第七	金田一	★
ゲエテの對話抄	エンゲルマン	★
ハルツ紀行	内藤	★
みづうみ他三篇	シユトルム	★
三色菫・溺死	伊藤武雄	★
村のロメオとユリア	草間平作	★
僧の婚禮	伊藤武雄	★
忘れられぬ言葉	木	★
埋	木	★
アルト	木	★
ハイデルベルク	木	★
沈	木	★
日の出	木	★
ソアーナの異教徒	木	★
希臘の春	木	★
歌春の目ざめ	木	★
悪童物語	木	★
トオスマン短篇集	木	★
トオスマン短篇集	木	★
トオスマン短篇集	木	★
平	木	★
行	木	★
ジャクリスと	ヤコブ	★
祖	ヤコブ	★
維納の辻音楽師	石川	★
みれん	石川	★
アナトール	石川	★
戀愛三味	石川	★
縁の鴉鵲他一篇	石川	★
佛・白文學		
ポリウクト	木村	★
人間嫌ひ	木村	★
クレージュの奥方	木村	★
愛と偶然との戯れ	木村	★
マノン・レスコー	木村	★
懺悔録	木村	★
懺悔録	木村	★
懺悔録	木村	★
懺悔録	木村	★

第二十分册 既刊 定價各★★

生命の不可思議 上巻 後藤格次郎著 ★★
 生命の不可思議 下巻 後藤格次郎著 ★★
 チャールズ ダーウキン F.ダーウキン著 ★★
 ラブラタの博物學者 岩田良吉著 ★★
 はるかた國 与野長十郎著 ★★
 家畜系統史 加藤龍一著 ★★
 科學の價值 田邊元著 ★★
 科學と方法 吉田輝一著 ★★
 科學者と詩人 平林初之輔著 ★★
 史的に見たる 利根の宇宙觀の變遷 寺田實彦著 ★★

法律・政治

アリストテレスの國家論 岡田謙著 ★★
 君主論 黒田正利著 ★★
 法の精神 上巻 宮澤俊義著 ★★
 法の精神 下巻 宮澤俊義著 ★★

人間不平等起原論 ルッソ著 ★★
 民約論 平林初之輔著 ★★
 權利のための闘争 イーリントン著 ★★
 近代民主政治 卷一 松山武義著 ★★
 近代民主政治 卷二 松山武義著 ★★
 近代民主政治 卷三 松山武義著 ★★
 近代民主政治 卷四 松山武義著 ★★
 近代民主政治 卷五 松山武義著 ★★
 近代民主政治 卷六 松山武義著 ★★
 近代民主政治 卷七 松山武義著 ★★
 近代民主政治 卷八 松山武義著 ★★
 近代民主政治 卷九 松山武義著 ★★
 近代民主政治 卷十 松山武義著 ★★
 近代民主政治 卷十一 松山武義著 ★★
 近代民主政治 卷十二 松山武義著 ★★
 近代民主政治 卷十三 松山武義著 ★★
 近代民主政治 卷十四 松山武義著 ★★
 近代民主政治 卷十五 松山武義著 ★★
 近代民主政治 卷十六 松山武義著 ★★
 近代民主政治 卷十七 松山武義著 ★★
 近代民主政治 卷十八 松山武義著 ★★
 近代民主政治 卷十九 松山武義著 ★★
 近代民主政治 卷二十 松山武義著 ★★
 近代民主政治 卷二十一 松山武義著 ★★
 近代民主政治 卷二十二 松山武義著 ★★
 近代民主政治 卷二十三 松山武義著 ★★
 近代民主政治 卷二十四 松山武義著 ★★
 近代民主政治 卷二十五 松山武義著 ★★
 近代民主政治 卷二十六 松山武義著 ★★
 近代民主政治 卷二十七 松山武義著 ★★
 近代民主政治 卷二十八 松山武義著 ★★
 近代民主政治 卷二十九 松山武義著 ★★
 近代民主政治 卷三十 松山武義著 ★★
 近代民主政治 卷三十一 松山武義著 ★★
 近代民主政治 卷三十二 松山武義著 ★★
 近代民主政治 卷三十三 松山武義著 ★★
 近代民主政治 卷三十四 松山武義著 ★★
 近代民主政治 卷三十五 松山武義著 ★★
 近代民主政治 卷三十六 松山武義著 ★★
 近代民主政治 卷三十七 松山武義著 ★★
 近代民主政治 卷三十八 松山武義著 ★★
 近代民主政治 卷三十九 松山武義著 ★★
 近代民主政治 卷四十 松山武義著 ★★
 近代民主政治 卷四十一 松山武義著 ★★
 近代民主政治 卷四十二 松山武義著 ★★
 近代民主政治 卷四十三 松山武義著 ★★
 近代民主政治 卷四十四 松山武義著 ★★
 近代民主政治 卷四十五 松山武義著 ★★
 近代民主政治 卷四十六 松山武義著 ★★
 近代民主政治 卷四十七 松山武義著 ★★
 近代民主政治 卷四十八 松山武義著 ★★
 近代民主政治 卷四十九 松山武義著 ★★
 近代民主政治 卷五十 松山武義著 ★★
 近代民主政治 卷五十一 松山武義著 ★★
 近代民主政治 卷五十二 松山武義著 ★★
 近代民主政治 卷五十三 松山武義著 ★★
 近代民主政治 卷五十四 松山武義著 ★★
 近代民主政治 卷五十五 松山武義著 ★★
 近代民主政治 卷五十六 松山武義著 ★★
 近代民主政治 卷五十七 松山武義著 ★★
 近代民主政治 卷五十八 松山武義著 ★★
 近代民主政治 卷五十九 松山武義著 ★★
 近代民主政治 卷六十 松山武義著 ★★
 近代民主政治 卷六十一 松山武義著 ★★
 近代民主政治 卷六十二 松山武義著 ★★
 近代民主政治 卷六十三 松山武義著 ★★
 近代民主政治 卷六十四 松山武義著 ★★
 近代民主政治 卷六十五 松山武義著 ★★
 近代民主政治 卷六十六 松山武義著 ★★
 近代民主政治 卷六十七 松山武義著 ★★
 近代民主政治 卷六十八 松山武義著 ★★
 近代民主政治 卷六十九 松山武義著 ★★
 近代民主政治 卷七十 松山武義著 ★★
 近代民主政治 卷七十一 松山武義著 ★★
 近代民主政治 卷七十二 松山武義著 ★★
 近代民主政治 卷七十三 松山武義著 ★★
 近代民主政治 卷七十四 松山武義著 ★★
 近代民主政治 卷七十五 松山武義著 ★★
 近代民主政治 卷七十六 松山武義著 ★★
 近代民主政治 卷七十七 松山武義著 ★★
 近代民主政治 卷七十八 松山武義著 ★★
 近代民主政治 卷七十九 松山武義著 ★★
 近代民主政治 卷八十 松山武義著 ★★
 近代民主政治 卷八十一 松山武義著 ★★
 近代民主政治 卷八十二 松山武義著 ★★
 近代民主政治 卷八十三 松山武義著 ★★
 近代民主政治 卷八十四 松山武義著 ★★
 近代民主政治 卷八十五 松山武義著 ★★
 近代民主政治 卷八十六 松山武義著 ★★
 近代民主政治 卷八十七 松山武義著 ★★
 近代民主政治 卷八十八 松山武義著 ★★
 近代民主政治 卷八十九 松山武義著 ★★
 近代民主政治 卷九十 松山武義著 ★★
 近代民主政治 卷九十一 松山武義著 ★★
 近代民主政治 卷九十二 松山武義著 ★★
 近代民主政治 卷九十三 松山武義著 ★★
 近代民主政治 卷九十四 松山武義著 ★★
 近代民主政治 卷九十五 松山武義著 ★★
 近代民主政治 卷九十六 松山武義著 ★★
 近代民主政治 卷九十七 松山武義著 ★★
 近代民主政治 卷九十八 松山武義著 ★★
 近代民主政治 卷九十九 松山武義著 ★★
 近代民主政治 卷一百 松山武義著 ★★

經濟・社會

ケネー經濟表 増井幸雄著 ★★
 國富論 上巻 氣賀野郎著 ★★
 國富論 下巻 氣賀野郎著 ★★
 富に關する省察 永田清雄著 ★★
 初版人口の原理 高野三郎著 ★★
 經濟學及課税の原理 リカード著 ★★
 小泉信三譯 ★★

ケネーの理論の徹底的研究 中山伊知郎著 ★★
 地代論 山口正西著 ★★
 經濟學試論集 末永良喜著 ★★
 ミル自傳 西本正美譯 ★★
 資本論初版鈔 長谷部文雄著 ★★
 賃労働と資本 長谷部文雄著 ★★
 賃銀・價格および利潤 長谷部文雄著 ★★
 フランスに於ける内亂 木下牛治著 ★★
 猶太人問題を論ず 久留間敏彦著 ★★
 國家の起源 西澤六著 ★★
 國家の起原 西澤六著 ★★
 住宅問題 加田君二著 ★★
 エングス空想より科學へ 漢野 見譯 ★★
 道徳の經濟的基礎 ショウウインガー著 ★★
 經濟的財價值 ボーイム・ウエッセル著 ★★
 の基礎理論 長守善譯 ★★
 資本論解説 カウツキー著 ★★
 マックス・社會科學方法論 富永祐治譯 ★★
 ウエーバー社會科學方法論 立野保男譯 ★★
 職業としての學問 尾高邦雄譯 ★★

經濟學入門 ローゼンブルグ著 ★★
 佐野文夫譯 ★★

資本論精論 上巻 ローゼンブルグ著 ★★
 長谷部文雄譯 ★★

資本論精論 中巻 ローゼンブルグ著 ★★
 長谷部文雄譯 ★★

資本論精論 下巻 ローゼンブルグ著 ★★
 長谷部文雄譯 ★★

資本論精論再論 ローゼンブルグ著 ★★
 長谷部文雄譯 ★★

ブルジョアの手紙 松井圭子譯 ★★

戦争論 上巻 馬込健之助譯 ★★
 戦争論 下巻 馬込健之助譯 ★★

戦争論 下巻 馬込健之助譯 ★★

労働者綱領 小泉信三譯 ★★

暴力論 上巻 フレレル著 ★★
 暴力論 下巻 フレレル著 ★★

暴力論 下巻 フレレル著 ★★

婦人論 上巻 草間平作譯 ★★
 婦人論 下巻 草間平作譯 ★★

婚姻の諸形式 木下史郎譯 ★★

戀愛と結婚 上巻 エレン・ケイ著 ★★
 戀愛と結婚 下巻 エレン・ケイ著 ★★

マルクス・エングルス傳 リアゾノフ著 ★★
 長谷部文雄譯 ★★

レトロシアにおける上 大山岩雄譯 ★★
 ニン資本主義の發展卷 西大 岩雄譯 ★★
 ニン資本主義の發展卷 西大 岩雄譯 ★★
 ニン何を爲すべきか 平田良徳譯 ★★
 カール・マルクス (他五篇) レーニン著 ★★
 レーニンの (他五篇) 伊藤 弘譯 ★★
 ゴオリキーへの手紙 中野重治譯 ★★
 レーニンの帝國主義 長谷部文雄譯 ★★

岩波文庫に就て

□岩波文庫は普及を第一義として刊行する廉價版であります。
 □内容の精選 東西古今の古典並に價値高い良書を續々刊行、網羅せしめ、校訂、翻譯に於て、また校正、印刷、製本等に於ても最善の注意を拂つてゐます。
 □最低の廉價 定價は専ら低廉を旨とし、豊富な内容を小さい形の中に収める形式を採つてゐます。
 □購求の自由 豫約出版ではありませんので、讀者は何時でも自由に欲しいものを採擇購求することが出来ます。全國の書店に取揃へてあります。
 □携帯の至便 平福百穂畫伯の裝幀による菊半截判で、體裁は極めて洒洒、旅行その他の伴侶に至便であります。
 □解説附目錄 岩波文庫の各書について解説を附した分類總目錄があります。

御申込み次第早速お送り申し上げます。
 □定價は便宜上星(★)数を以て現はし、★一つが二十錢であります。定價と送料とを表にしますと大體次のやうになります。
 ★ 送料二十錢 送料二錢
 ★★ 四十錢 四錢
 ★★★ 六十錢 六錢
 ★★★★ 八十錢 八錢
 ★★★★★ 一圓 八錢
 星数はまた頁数をも現はし、★一つは大體百頁乃至百五十頁であります。

□御注文は、すべて前金でお願ひ致します。著者名・書名・巻数・册数及び御住所氏名を楷書で明記の上、代金に必ず送料を添へてお送り願ひます。
 □御送金には「振替東京二六二四〇番」の御利用が最も安全で廉便であります。爲替で御送金頂いても結構であります。また切手代用の場合には一割増に願ひます。

最新刊書

駿臺雜誌 森鏡三校訂 ★★
 翁問答 中江藤樹著 加藤盛一校註 ★★
 講孟餘話(舊講孟劄記) 吉田松陰著 廣瀬豊校訂 ★★
 シャーロック・ホームズの冒険 コナン Doyle 作 菊池武一譯 ★★
 物質と記憶 ベルグソン著 高橋里美譯 ★★
 ドーソン蒙古史 上卷 田中孝一郎譯補 ★★
 兼好法師家集 西尾實校訂 ★★
 南總里見八犬傳(一) 曲亭馬琴作 小池藤五郎校訂 ★★

日本風景論

志賀重昂著 小島島水解説 ★★
 はるかな國とほい昔 藤岳しづ著 ★★
 クレイヴの奥方 ラファイエット夫人作 生島遼一譯 ★★
 ジャングルブック キップリング作 中村爲治譯 ★★
 評釋猿 養 幸田露伴著 ★★
 西方の人續西方の人 芥川龍之介著 他二篇 ★★
 海の波戀の波 グリルパルツァー作 番匠谷英一譯 ★★
 駒風(タイフーン) コンラッド作 三宅幾三郎譯 ★★
 迷路 フォンターネ作 伊藤武雄譯 ★★

369
323

最 新 刊 書

阿片常用者の告白	田部重治 譯作	★
若き日の藝術家の自畫像	チエームズ・デロイス 譯作 名原廣三郎 譯作	★★★
肖像畫・馬車	平井肇 譯作	★
レ・ミゼラブル (一)	ヴィクトル・ユゴー 譯作 豊島與志雄 譯作	★★★
カント 純粹理性批判 下卷一	天野貞祐 譯	★★★
吾等がために踊れ 他八篇	ゴールズワージー 譯作 龍口直太郎 譯作	★★★
アングデルセン 自傳	大畑末吉 譯	★★
ブッデンブローク一家 (一)	トオマス・マン 譯作 成瀬無極 譯作	★★
後世への最大遺物 他二篇	内村鑑三 著	★

終

